

難民青年と日本女性

明日へ

生きる

横井 秀治

目次

第一章	大学病院
第二章	いのちの恩人
第三章	中世の街
第四章	二人の約束
第五章	自立心
第六章	アルプスの風
第七章	難民収容所
第八章	希望
第九章	なぜ、自分に
第十章	花火
終章	蝉の声

第一章 大学病院

(こんな早朝に、一体、だれだ)

ベッドから跳ね起きて居間に行き、半睡状態のまま、今もけたたましく鳴り響いている受話器を取った。

「大変なことになってしまった。すぐに来てください。お願いします。お願いします」
うわずった、聴き取りにくい声だったが、シャキールだとわかった。

「ミホが救急車で運ばれ、意識がなく、今生死にかかわる状態なのです。ボクはクリニックから電話しています。ミホが死んでしまうかも知れない。一刻も早くここに来てください」

強く懇願するような口調と「死んでしまうかもしれない」との言葉に驚愕し、一気に目覚めた思いとなった。

「何、クリニックだって！」

「はい、テュービンゲンの大学病院です。今、脳外科の手術棟からです」

「脳外科？」

「そうです。一刻も早くここに来てください」

重大な事が起こったことは、察することができた。でも、なぜ美帆がそのようなところへ運ばれたのかとの考えが、頭の中を駆け巡った。が、今は病院へ行くことが先決だ。

「よし、わかった。すぐにそこへ行くから」

腕時計をのぞくと、ちょうど午前四時である。

居間から寝室に戻ると、妻のゲルトルートが、

「日本から？」

と、ベッドの上で目をこすりながら訊いた。

「いや、シャキールからだ。美帆が救急車で運ばれ、今、病院にいるのだ。それも脳外科に」

「えっ、ミホが！」

甲高い声と同時に、彼女の瞳が急に大きくなった。

「大学病院は、たしか高台の丘の中腹に建っていたよね」

「ええ、そうよ。一体、どうして？」

「彼女に何があったのかは、今はまったくわからない。とにかく、これからクリニックへ行ってくる」

着替えを終えてから、家の裏に駐車していた車に乗り、ひとり病院へ走った。

八月下旬の夜明け前、それも日曜日なこともあって、薄暗い通りに車と人の影はない。

四日前、美帆と路上で出逢った時は元気そうな顔でいたのに。彼女に一体何が起こったのだろうと推しながら、ハンドルを握り続けた。

五分ほどで大学病院の駐車場に着き、早足で八階建ての大きな近代的建物に行った。入口のガラス張りの大きなドアは閉まっていたが、隣の小さなドアは開いていたので、そこから中に入った。と、あたりは静まり返っていて、人影はない。

目指す脳外科の手術棟がどこなのかと白い壁に掛かっていた案内図を見たが、よくわからない。どうしようかと迷っていると、夜勤を終えた看護師らしき人が足音を響かせなが

ら、こちらへ歩いてくるのが見えた。

「脳外科の手術室へ行きたいのですが」

「二階ですよ。あのエレベーターに乗ると、いいですよ」

それを聴き、急ぎ足で二階の手術室がある棟へ向った。

その棟までくると、シャキールが頭をうな垂れて廊下の長椅子に座っていた。私の姿を目にするや、彼は立ち上がり、駆け寄ってきて、

「ミホが、ミホが」

と、頭を下に向けたまま言った。腫れぼったい目には、涙が浮かんでいた。

「一体、どうした。美帆に何が起こった？」

シャキールは直ぐには返事をせずに、右手で両目頭を押さえたまま、しばらく黙っていた。その彼を、近くにあった長椅子に腰かけさせてから、私も座った。

落ち着きを少し取り戻した彼が、話し出した。

「昨晩の九時でした。マクドナルドの仕事が終わり、自分の住まいに戻ろうとしたのですが、ミホに会ってから帰ろうと思い、彼女の住むアパートに行き、呼び鈴を何度も押したのです。返答がなかったもので、いないのだろうと思い、帰ろうとしました。でも、もう一度押してみると、いつもとは違う彼女の声がインターホンを通して聞こえてきたのです。それも、『助けて』と弱々しい声でした。何かが起こったのだと思い、急いで駆けつけると、彼女が部屋のなかで頭をかかえて倒れていたのです」

そこまで言って、シャキールは遠くを見つめるような目つきになった。その時の情景を思い出したのか、強張った表情である。

再び彼が話し出すのを待った。

「ミホは両手で頭を強く押さえたまま、日本語で何かを言ったのです。ボクは日本語がわかりません。ドイツ語で『一体、どうしたの？ 頭が痛いのか？』と呼びかけたのですが、ミホは両手で頭をかかえたままでした。ボクがもう一度訊くと、彼女はか細い声を出しながら、再び日本語で何かを言ったのです。そのあと、ミホは意識を失い、眠ったようになってしまいました。これは大変なことになったと思います、すぐに救急車を呼んだのです」

三年間ドイツで暮らしていたシャキールだったので、彼の話すドイツ語はパキスタン独特の速いアクセントがあつたが、話している内容は十分に理解できた。

「救急車はすぐに来て、意識のないミホを運ぼうとしました。もちろん、ボクもその救急車に同乗しました」

私たちの前を、数名の看護師たちが小走りで通り過ぎた。

「病院に着いてから、係の人から事情聴取されたのですが、ボクのドイツ語表現が十分でなかったのか、相手によく伝わらなかった。何かボクを疑っているようでした。ミホがたばこを吸うか、麻薬を打つかなども質問されました。そのうえ、ボクの身の上も詳しく問われました。それが済んだのが、真夜中の二時ごろだったと思います」

彼の目にはもう涙は浮かんでいなかったが、興奮状態が続いていることは、時々汗ばんだ両手をズボンに擦りつけていることでわかった。

一通りのことを言い終えると、シャキールは視線を足元に落とし、黙り続けた。その彼に訊いた。

「それで、美帆は今どうしている？ 何か説明を受けたの？」

「いえ、まだ何も聴いていません。看護師がここで待つように言っただけなのです」
白い壁にかかっている時計の針は、六時を指していた。看護師たちが私たちの前を頻繁に行き来するようになった。

美帆の今の容体を知ろうとして、シャキールと一緒にナースセンターへ行き、四人いた看護師のひとりに訊いた。

「彼女に、一体、何が起きたのでしょうか」

「様々な検査をした結果、頭部に異常が見つかり、ドクターたちが急遽集まり、これから手術をすることになりました」

驚いた。隣にいたシャキールはもつと愕いたに違いない。恋人の美帆が、まさか開頭手術を受けるとは想像さえもしなかっただろう。もつと詳しいことを知ろうとした。

「一体、頭部内に、何が生じたのでしょうか」

「詳しいことは、ドクターに訊ねてください。説明をしてくれるでしょう。でも、すぐに手術をしなければならぬので、話す時間があるかどうか」

「手術はどのくらいかかるのでしょうか」

「五、六時間は要するでしょう」
息を飲んだ。五、六時間の頭部手術、それも緊急を要するとは。私とシャキールは廊下の隅にあった長椅子に再び腰を下ろし、待つことになった。

手術が終わるまでには、まだ時間が十分にあつたので、一旦家に帰ろうとした。しかし、シャキールのことが気になった。彼をここに一人にさせておくと、不安が一層増すのではないだろうかと思つたからだ。そこで、美帆の親しくしている中国人の友人である淑香に連絡して、ここに来てもらおうとした。

電話で事情を話すと、淑香は即駆けつけた。その彼女に、今までの経緯を事細かく話をしてから、しばらくの間シャキールの傍にいて欲しいと頼んだ。

少ししてから、ひとりナースセンターに行き、非常の際は直ぐに私の家に電話をしてくれるように伝えてから、病院をあとにした。

家に戻ると、妻と息子のミヒヤエルはすでに朝食を済ましていた。その二人に、美帆が倒れて病院に運ばれたことを伝えた。

「それは大変なことになったわね。わたしも、病院へ行こうかしら？」

心配そうな顔を浮かべながら、妻が言った。

「いや、今はシャキールと美帆の友人である淑香がいるから、その必要はないだろう」

「でも、気がかりだし、行くわ」

そう主張した彼女を、無理やりに制した。

私たち家族は、しばしば美帆を家に招いて一緒に食事をしてきた。彼女が来宅すると、十七歳になるダウン症のミヒヤエルはともよるこび、また妻も若い美帆と話をするのをたのしんでいた。その美帆が頭部手術を受けるとのを知り、妻は案じたのだった。

そろそろ病院へ行こうとした時だった。居間の電話ベルが鳴った。受話器を取ると、看護師からだった。医師が早急に告げたいことがあるとの知らせだった。

手術中に何か突発的なことが起つたのではないだろうかとの嫌な思いを抱きながら、急いで車に乗り、ひとり病院へ向つた。

先ほどの早朝とは打って変わって、今は大きなガラスで囲まれたカフェテリア内には、

大勢の見舞客がいた。そこを通り過ぎて、医師の室に入った。

「あなたは日本語を話せるね。わたしは手術をした執刀医のマイヤーです。外にいる二人に患者の病状についての説明をしたのだが、彼らは日本語が話せないとのことだった。そこで、これから話すことを、あなたから患者の両親に伝えてほしい」

私と同じ歳ぐらいの四十代半ばの白衣を着たドクターがこれから何を言うのかに、耳を傾けた。

「コンピュータ断層撮影および脳血管の写真を撮った結果、脳動脈瘤の破裂によるくも膜下出血であることが判明した。手術それ自体は成功に終わったのだが、今後患者がどのような状態になっていくかは、今の時点では予測がつかない。生命に関わる手術だったので、これから先のことは何とも言えない」

「それでは、彼女は今、生と死の境にいる状態なのですか」

ドクターは肯いた。

「手術では一つの動脈瘤と小さい末梢枝を切除したが、あと二つそれらしきものが残っている。それらがもし破裂すると、危険な状態になるだろう。とにかく、両親を呼んだほうがいい」

「わかりました。すぐに、両親に伝えます」

部屋を出てから、廊下の長椅子に浅く座っていたシャキールと淑香のところに行き、

「美帆の両親に電話したいのだが、番号がわからないのだ。知っているか」

と訊くと、シャキールが立ち上がった。

「ミホの手帳に、両親の電話番号が記されていたと思います。それを見れば、わかるでしょう。彼女の部屋に、それはあるはずです」

「よし、それではこれから美帆の部屋へ行こう」

そう言うてから、彼を連れて美帆が住んでいた学生用アパートへ向った。淑香は病院に残ることになった。

シャキールを車に乗せ、エンジンをかけてから助手席の彼に、

「美帆は、時々頭が痛かったのだろうか」

と訊くと、首を横に振りながら、

「そのようなことは、なかったように思うのです」

と、答えた。

アパートは市内の大きな墓地の裏にあった。一年前、私たち家族は美帆とシャキールから夕食に招待されて、ここに訪れたことがあった。その時、シャキールの作った油濃いパキスタン料理をアパート前の広い芝生の庭で、皆と木のテーブルを囲んで一緒に食べたことがあった。あの時に笑ったように見えた、背丈二メートルほどの大きな向日葵が今も同じように庭に咲いていた。が、その姿に明るさがなかった。

美帆は二階建ての学生用アパートで他に五人の大学生と一緒に暮らしていた。が、今は夏休中なので、建物内には誰もいない。シーンと静まり返っているだけだった。

彼女の部屋に入ると、昨夜の出来事を漂わせるように、電話帳や食べ物などが床に散乱していた。早速、私とシャキールとで目的の手帳を捜しはじめたのだが、なかなか見つかることができないでいた。さらに探し続けていると、本と本の間小さな手帳が挟まっているのを見つけた。これかなと思いつきながら頁を繰っていると、両親の電話番号らしきも

のが目に留まった。

「あつたぞ。これだと思う。すぐに連絡したいのだが」

今も探しているシャキールに言った。彼は私のほうに顔を向け、

「電話機は共同の炊事場にありません」

と言い、私をキッチンに導いた。

受話器を取ってから、ダイヤルを回した。今は日本時間で夜のちようど十一時。両親は寝ているのではないだろうか。発信音を聴き続けた。なかなか出てこない。待った。カチツと音がした。

「もしもし、中山さんのお宅ですか」

「そうですか」

「わたくしは、娘さんが住んでいるチュービンゲンの街で暮らしているものです。美帆さんのお父さんですね」

「ええ、そうです」

「娘さんのことなのですが、昨夜急に自分の部屋で意識がなくなって倒れ、急遽救急車で大学病院に運ばれました」

「何ですって、娘が！」

「はい、そうです。病院ですぐに頭の手術を受けることになりました」

「開頭手術？」

「はい、五時間の手術でした。くも膜下出血です」

「くも膜下出血！」

相手の声が、一オクターブ高くなった。

「医師の説明では、手術は成功に終わったとのことでした。しかし、今後のことは予測がつかないともおっしゃいました。『とにかく、両親を呼んだほうがいいでしょう』とドクターに言われ、この電話をかけています」

そう伝えてから、今の娘さんの病状について詳しく話をした。父親はしばらく黙り続けた。いた。

「もし、もし、聞こえていますか」

「ええ、わかりました。すぐにこちらへ行くように手続きをします」

「それでは、こちらに来るのをお待ちします。成田からフランクフルトで乗り換えて、シユトウツトガルト空港で降りるのが一番いいと思います。わたしが飛行場に出迎えに行きます。そこから車で、三十分ほどでチュービンゲンの大学病院です。とにかく、飛行機便が決まり次第、わたしのほうに知らせてください」

「ありがとうございます。お世話になります。航空券が取れましたら、こちらに電話を入れます。よろしく願います」

「こちらで、できることはします。娘さんに何か急な変化が生じたら、すぐに連絡します」
そう言うてから、重く感じられた受話器を置いた。

彼女の部屋に戻ると、室内はきれいに片付いていた。シャキールに、美帆の両親と話をしたことを伝えてから、彼と一緒に部屋を出た。

広い庭を横切りながら、目鼻立ちの整った、淡いコーヒー色をした二十五歳のシャキールの横顔を見ると、床などを急いで拭いたせいだろうか、額には汗が滲んでいた。その彼に、

「昨夜、この建物内には、誰もいなかったのだね」

と訊くと、彼は手で額の汗を拭うようにしながら、

「はい、学生たちは皆、両親の家に帰ってしまいましたから」

と、答えた。そして、白いハンカチをポケットから取り出した。

「と言うことは、もし君が美帆のところへ訪れていなかったら、彼女は倒れたままになっていたのか」

シャキールの傍には、彼と同じぐらいの高さ一八五センチぐらいの顔ほどの大きさの向日葵が何本か咲いていた。先ほどと違って今度は、それらが微笑んでいるように映った。

病院に戻ってから、淑香に両親と連絡がとれたことを話すと、彼女は自分が住んでいる学生寮に帰った。

少ししてから、シャキールと一緒にナースセンターに行った。

「変化が現れていないでしょうか」

「今のところ、ずっと眠ったままです」

看護師は肩をすぼめながら答えるだけだった。

再び廊下にあった長椅子のところに行き、座りながら看護師からの連絡を待つことになった。シャキールは、昨晩から一睡もしていない。顔には、疲労感がありありと漂っていた。その横顔を見ながら、

「住まいに戻って、すこし休んだほうがいいよ」

と勧めると、彼は首を横に振りながら、

「いいえ、ミホが目を覚ますまで、ここにいます。ミホがどうなるかもわからない今、自分は帰れません」

と言い、また首を横に振った。

「その気持ちはわかるが、看護師が今日は目を覚まさないかもしれませんよと言っていたし、一旦住まいに戻り、明日の朝一番の電車に乗ってまた来れば？」

再度帰るように勧めると、仕方なさそうに肯いた。そこで、彼をチュービンゲン駅まで車で送ることにした。

彼を駅で降ろしてから私の住いに戻ると、時計の針は夜の九時を指していた。居間のソファーに座っていると、今日一日の出来事が止め処無く浮かんでくるのだった。

一時間が過ぎた。電話のベルが鳴ったので受話器を取ると、美帆の母親からである。彼女に娘さんの病状について、詳しく説明をしていると、むせび泣く声が電話線を通して何度も聞こえてきた。

今度は、母親に代わって父親が出た。

「私と次女のあゆみが、そちらへ行くことになりました。パスポートを発効してもらったから、一刻も早くそちらへ飛び立ちます。妻は体が弱く、病気がちなので飛行機には乗れないのです」

「そうですか」

「よろしくお願いします」

その言葉を聴き、受話器を置いた。

翌朝、食事を済ませてから病院に行くと、シャキールが待合室の長椅子に頭を下げて腰かけていた。その彼と握手を交わしながら、

「美帆はもう目を覚ました？」
と訊くと、

「いえ、まだなのです」

と、憂慮に満ちた声で答えた。

「そのうち覚めるよ。いや、きつと覚めるよ」

そう言うてから、私も座った。

二時間ほどシャキールと話をしていたが、何の連絡もなかった。そこで、彼を連れてカフェテリアに行き、コーヒーを飲んだり、病院の中庭を二人で歩いたりしながら、美帆が麻酔から覚めるのを待った。

ナースセンターに三回目に行った時、看護師が「もう目を開けてもよいのに」と首を傾げながら言ったことが何度も浮かび、気にかかりながら待った。正午になっても、まだ何の連絡もない。二人とも焦燥感を覚え出した。

日が暮れかけた夕方となった。シャキールと一緒に再びカフェテリアでコーヒーを飲んでいると、一人の看護師が私たちのところにやって来た。

「目を覚ましたよ。すこしの間なら、会ってもいいですよ」

それを聴いた私とシャキールは、椅子から勢いよく立ち上がり、彼女のあとに付いて行った。

集中治療室にはベッドが六床並び、どのベッドも周りには様々な器具が置かれ、何人も看護師たちが重篤な患者の傍で、カルテに何かを記入していた。室内全体に緊張感が漂っているのが一目でわかった。

美帆のベッドサイドに寄ると、シャキールが響きのある低い声で、「ミホー」と呼びかけた。と、彼女の臉が開き、黒い瞳が次第に大きくなった。彼が自分の顔を彼女に近づけると、美帆は彼の目を見つめた。二人は何も言わずに三十秒ほど見つめ合っていた。そのあと、彼女の臉がゆっくりと閉じた。

集中治療室から出ると、シャキールは笑顔を浮かべながら、私の手を力強く握り、ニッコリした。その手を強く握り返した。

美帆の両親に、娘さんが目を覚ましたことを早く知らせようとして、国際電話をかけることができるところに行った。

ダイヤルを回した。

「娘さんが麻酔から覚めました」

「目を覚ましたのですね」

父親の声である。傍に母親いるのだろう、「目を覚ましたの？」の声が耳に入った。

「私たちのことはわかったように思えます。ドクターが話すには、今のところ手術による合併症などはないと話してくれました。ただ、右半身はマヒしているので、言語の障害は出るだろうとのことでした」

「そうですか。とにかく、命は助かったのですね」

それに何と答えてよいのかわからずに黙った。ただ、ドクターが今後のことは、今の段階では予測することはできないと伝えた。

「それで、こちらにはいつ来られますか」

「パスポートが取れたので、明日の便で、あゆみとそちらへ向います」

「そうですか。それでは、飛行場でお待ちしています」

「お世話になります。よろしく願います」

父親は、「よろしく願います」を二度繰り返した。

翌朝、父親と妹のあゆみが今日の夜にこちらに来ることを、美帆に早く知らせようと思
い、朝食も摂らずに病院へ向った。

病棟内に入ると、シャキールが駆け寄ってきて、

「さつき、ミホと会いました。意識はしっかりあって、左手でボクの手を握ったのです。

ミホの目は潤んでいました。それを見て、ボクはうれしくて、うれしくて」

と、感動に満ちた声で言った。

「それで、ドクターと会って、説明してもらったの？」

「まだです。一緒に行ってくださいませんか」

彼は続けた。

「一緒だと、医者は詳しく話してくれますので。難民のボクには」

そのあと、彼は言葉を濁した。その彼の顔を見ながら言った。

「もちろんだよ。それに、美帆の両親も連絡を待っていることだし」

私たち二人は医師の室に入り、ドクターから美帆の今の病状を詳しく聴いたあと、二人
部屋に移った彼女の病室に行った。

窓際に置かれた、美帆のベッドに寄ると、鼻腔には酸素をおくる管、それに体には何本
ものコードがまかれていた。

体を動かそうとするのだが、右半身はまったく動かぬ状態である。私たちの話すことは
理解できるように、瞼を開閉する動きでそれがわかった。その彼女に、一つひとつの語を
区切って、

「頭の手術をしたのですよ。手術は、成功に終わりましたよ」

と言うと、彼女は静かに肯いた。そして、シャキールのほうに顔を向けた。それに応じ
るかのように、彼は自分の顔を美帆に近づけた。しばらく二人は見つめ合っていた。

少ししてから、美帆に、

「お父さんと妹さんが今晚来ますよ」

と伝えると、彼女は理解できないかのような表情を浮かべた。今の状況がまだ十分に把
握してないのだろうと察したので、もう一度ゆっくりと語を区切って繰り返した。

「お父さんと妹さんが、来ますよ」

今度は肯いた。

第二章 いのちの恩人

車に乗り、夏の暮れかかった高速道路上を三十分ほど走り、シュトゥットガルト空港に九時過ぎに到着。荷物の検査を終えて出てくる二人を待った。

しばらくすると、大勢の乗客の中に日本人らしき姿を見かけたので、歩み寄った。

「美帆さんのお父さんですね」

「ええ、そうです」

薄着の背広に紺色の地味なネクタイをした父親が深々と頭を下げ、財布から名刺を取り出した。そこには、食品会社の経理部係長と記されていた。

早速二人を車に乗せ、テュービンゲンへ走った。ハンドルを握りながら、今日に至るまでの娘さんの病状について二人に詳しく伝えると、厳格そうな顔付きの父親が私のほうに顔を向けた。

「それでは、娘は助かったのですね」

「ええ、そのように思います」

それを聴いた父親はネクタイを少し緩め、ホッとした表情で座席に深くもたれかかった。その時、後席で私たちの会話を聴いていた、半袖のブラウスに濃いブルー色のスラックスを身につけたあゆみが身を乗り出した。

「助かったのだわ。ああ、よかった！」

安堵したのだろう、いくらか明るい声である。バックミラーをのぞくと、姉と違って頬がふっくらとして、日焼けをしていた。声は姉にそっくりだった。

「それで、娘は意識があるのですね。私たちが来たことは、わかるのですね」

父親が私のほうに顔を向けながら訊いた。

「ええ、ただ、右半身は完全にマヒして、発語はなく、失語症になっています。詳しいことは、明日ドクターが説明してくれることになっています」

「そうですか。とにかく、命が助かってよかったです」

父親はそう言うてから、目を瞑った。三日三晩、心配と緊張のために眠っていないのだろう、目の下には隅ができていた。

その彼に、これだけは今伝えておこうとした。

「病院には、今シャキールという青年がいます。娘さんと二年近く付き合っているでしょう。その彼が部屋に倒れていた彼女を発見し、救急車を呼んだのです。彼が訪ねていなかったら、学生用アパートには誰もいなかったもので、娘さんはどうなっていたか」

「シャキール？ その人も学生なのですか」

父親は私の横顔を見ながら訊いた。それに何と答えようかと迷っていると、後席に座っていたあゆみが言葉を挟んだ。

「その人が姉の命を救った人ともいえるのですね。いのちの恩人ともなるのですね。姉から届いた手紙のなかに、その人のことがよく書かれてありました。たしか、パキスタン人ですよ」

「ええ、そうです。彼がお姉さんのところに訪れていなかったら、大変なことになっていたでしょう」

それを聴いた父親は、深く肯いた。あゆみはその父の様子をじっと見据えていた。

病院に着き、美帆の病室前に行くと、今日の仕事を終えたシャキールが椅子に座っていた。二人に、彼のことを簡単に紹介してから、ドアを開けて中に入った。

美帆が私たちに顔を向けるや、妹と父親はベッドに寄った。と、美帆の瞳が次第に大きくなった。

「美帆！」

父親が呼びかけた。彼女は何かを言いたそうにしていたが、声が出ないでいた。それを目にした父が、じっと娘の顔を見つめながら、

「あー、大丈夫だよ」

と、言った。二歳年下のあゆみは、目に涙を浮かべ、

「姉さん、来たわよ」

と声を出して、姉の手を握った。姉はゆっくりと目を瞬いた。二人は無言でしばらくの間、手を握り続けていた。その情景をあとにして、私とシャキールは病室をあとにした。

十分ほどすると、和らいだ顔付きの二人が病室から出てきた。二人とも先ほどまでの緊張した顔ではなく、ホッとした表情に変わっていた。父親は直ぐに妻に電話をかけたいと望んだので、彼を国際電話が置いてあるところに案内した。

電話を終えた父親を待つて、私たち四人は病院を出て、再び私の車に乗った。まず、同乗していたシャキールをチュービンゲン駅で降ろし、これから二人が宿泊するホテルへ走った。

車中での三人の会話となった。父親は娘の体に幾本も入っている管を目にして、胸が詰まったと言い、でも、こちらが話したことが娘に伝わったのを知って、胸を撫で下ろしたとも付け加えた。あゆみも同じようなことを語った。

チュービンゲン城前に建つホテルの駐車場に着き、腕時計をのぞくと、午前〇時が過ぎていた。早速、私たちはホテルのカウンターに行くと、奥から六十代の威勢のいい女主人が現れた。

「ミホはどうなった？ 意識は戻った？」

心配そうな顔付きで訊いた。それと言うのも、美帆は二年前から週末はこのホテルで学生アルバイトをしていて、女主人はその美帆のことを、ことのほか可愛がり、また自分も脳卒中で同じ大学病院で手術を受けたこともあって、美帆の病状をとでも気にかけていたからだだった。

「意識は、戻ってきました。でも、右半身はマヒしています」

「そうなの。で、どの病室にいるの？ 数日したら、見舞いに行くから」

女主人はそう言うてから、二人が寝る部屋に案内した。

私たち三人は部屋のソファアに腰かけ、美帆の病状などについて語った。壁にかかっていた時計を見ると、真夜中の一時半が過ぎていた。二人とも時差ボケと緊張とで疲れているだろうと思い、彼らの部屋から出て、ホテルの前に建つ私の家に戻った。

翌朝ホテルに行くと、二人は朝食を済ませ、部屋で私が来るのを待っていた。父親は韓国に一度旅行したことがあったが、あゆみは日本から出国したことがないと語った。朝食を摂るのに少し手間を取ったようだが、ホテルの人が気遣ってくれたお蔭で、なんとか済ますことができたと言った。

ふと窓際近くの壁に目を向けると、黒い背広がハンガーにかかっているのが見えた。あゆみもそのほうに目をやった。と、彼女がニッコリした顔で、

「父は、あの服が必要になるかもしれないと思って、トランクのなかに入れたのです。でも、そうならずには本当によかったです」

と、言った。父親も、その黒い服を見ながら肯いた。私たちは早速部屋を出て、車に乗って病院へ向った。

病院の待合室に入ると、シャキールの横にテュービンゲン大学で研究している日本の女性医師が、私たちを待っていた。ドクターの説明の際に、医療に関する専門的な単語も出てくるだろうと思いい、その女性医師に來てもらったのである。

医師のいる室に入り、私たちはドクターの説明に耳を傾け続けた。それが終わると、父親がドクターの目を正視しながら訊いた。

「頭のなかに残っているあと二つの動脈瘤は、いつか破裂するのでしょうか」

「それは、今のところ何とも言えません。右半身のマヒ症と言語障害が生じてはいますが、それらはこれからリハビリテーションをしていけば、日毎に良くなっていくでしょう」

「そうですか。何とぞ、よろしく願います」

父親は深々とお辞儀をした。私たちも同じように頭を下げた。

美帆の病室のドアを開けて中に入ると、彼女は私たち一人ひとりに目をやった。妹がベッドに寄った。

「少しずつ良くなると、お医者さんが話してくれたわ」

それを聴いた姉はゆっくりと肯き、何かを話そうと口を動かした。が、私たちはその言葉を聴き取ることができずにいた。そこで、妹が姉の左手にペンを握らせたのだが、紙に書いた字らしきものが読めなかった。今度はあいうえお表を出して、指で示してもらおうと試みたのだったが、その語は単語となっていないので、よくわからなかった。しかし、そのような遣り取りの中でも、美帆は父親と妹が來たのをよるこんでいるのがありありと窺えた。

私たち五人はベットサイドでしばらく過ごしてから、一旦病院を出て、昼食を摂るために私の家へ向った。

居間に入ると、妻が作った、この地方の郷土料理のマウルタツシュが、テーブル上のお皿に盛ってあった。それを食べながら、私たちは先ほど説明してくれたドクターの話と今後についてなどの話し合いとなった。その中で、父親はシャキールがパキスタンからの難民であることを知り、驚いた表情を浮かべた。と、それに気づいたあゆみが話題を直ぐに変えた。

昼食を終えてから、皆を再び車に乗せて病院まで行き、彼らを降ろしてからひとり家に戻った。

妻とミヒヤエルと一緒に夕食を摂っていると、電話ベルが鳴った。父親からであった。ホテルへ来て欲しいとの知らせだった。家から三十メートル離れたホテルへ歩いて向った。

部屋に入ると、父親とあゆみが私を待っていた。ソファアに腰かけた私を見るや、父親が話し出した。

「美帆の病状もわかったので、あゆみを残してあと二日したら、日本へ戻ります」
それを聴いたあゆみが、私のほうに顔を向けた。

「父は会社のことが気になっているのです。仕事一途な父ですから」

そう言うてから、彼女は隣に座っている父の横顔を訝しそうに見つめた。父は腕組みをして、目を閉じたまま黙り続けていた。二人の間に言い争いがあつたことは一目瞭然だった。少しすると、あゆみが声を高くして言った。

「姉はシャキールさんがいたからこそ、助かったのですよね」

私に同調を求めるような声だった。

「そうです」

それを聴いた父親が、今まで瞑っていた目を開けた。

「わかった」

何か吹っ切れたような声である。あゆみは私のほうに顔を向けてニッコリと肯いた。

二日して、父親の帰る日となった。車で二人をまた病院に連れて行った。

美帆の病室に入ると、ベッドサイドの椅子にシャキールが座っていた。父親とあゆみは彼と挨拶ていどの会話を交わした。そのあと、私とシャキールは病室をあとにしてカフェテリアに行った。

コーヒーを飲み出してから一時間が過ぎていたので、私たちは病室に戻った。

「そろそろ飛行場へ行かねばならない時刻となりました」

父親にそう伝えると、彼は娘の顔に目を据えながら静かな声を出した。

「それでは、美帆」

娘は口をわずかに動かした。その彼女に、父がさらに続けた。

「お母さんに、よく知らせておくから」

娘は肯いた。その様子を傍で見入っていたあゆみが、微笑みながら姉の手をしつかりと握った。

父親はシャキールと別れの握手を交わしたあと、私と一緒に病室から出た。

第三章 中世の街

あゆみは、言葉が少し出てきた姉と会うのをよるこんでいた。彼女にとって、ドイツは初めての外国の地。病院とホテルの往復だけでなく、せめてこの美しい街だけでも見学してもらおうと思いい立ち、案内することにした。

彼女が泊まっているホテルから歩き出した。前には、一六〇六年頃にローマの凱旋門を模して造られた、ルネサンス様式のテュービンゲン城門が威風堂々と立っている。そこへ続く石畳の坂道を登りながら、あゆみに話しかけた。

「お姉さんは、少しずつ回復に向っていますね」

「ええ、初めて病院で姉を見たときは、生きていたという、それだけでうれしかったです。それが日を追うことに良くなって、昨日からリハビリをはじめたのですよ。右腕がほんのわずかでしたが、上がりました。車イスにも、一時間ほど乗っていられるようにもなりました」

明るい顔で語った。

「お姉さんは頑張るほうだから、日毎に体のほうは良くなっていくでしょう」

「体だけでなく、会話もそれなりに、できるようになってきたのです」

そう言うってから彼女は立ち止まり、肩から吊り下がっていたバッグを私に見せた。

「昨日、姉のところへ行ったとき、お互い笑い出したことがあったのですよ。このバッグを持って、姉のところに行くと、『それは、わたしのだ』と姉が笑うように言ったのです。『ごめん。急いで日本から出たので、これがお姉さんのものだったことを忘れていたわ。少しの間、貸してね』と言うと、姉は微笑みながら肯いたのです」

彼女の声は弾んでいた。

私たちは再び歩き出した。石門を潜り、石畳の坂道をさらに登って行くと、美帆が入院している病院が見える高台に出た。その方角を眺めながら、あゆみが話し出した。

「姉は昨日窓に映る外の景色を見ながら、『太陽、東から昇って西に沈む』と呟くように言ったのです。目に映る光景を口に出したのでしょうか、それを聞いたとき、あと数日でここを去っていく自分が悲しくなっています」

そう語ったあとも、彼女はなおも病院のほうに視線を向け続けていた。私もあゆみと同様に病院の方向に目をやり続けた。

城内を一廻りしてから先ほど潜った門を出て、古い家々が建ち並ぶ曲がりくねった路地を歩いていると、あゆみがある家の門柱に一四九一年と刻まれた文字を見た。

「古く建てられた家なのですね。よく今まで保たれていますね」

驚いたような声で言った。彼女に説明した。

「石と木で作られたこれらの建物は、数十年に一度は外壁の色を新たに塗ったり、屋根瓦を替えたりしています。わたしが住んでいる家も四百五十年以上も前に建てられたのですよ。大家は維持するのに苦心しているみたいです。古いものを保つのは新しいものを作るより骨を折っているでしょうね。それだけ家主は歴史を大切に、誇りを持っているのでしょうか。とくに、テュービンゲンは戦災にまったく遭っていないので、街全体が中世の姿のまま残っているのです」

さらに石畳の坂道を下って行くと、切妻屋根のある中世の木組み家屋に囲まれたマルクト広場に出た。大勢の人たちが大きな籐の手さげ籠を持ち、色とりどりに並ぶ果物や野菜などを買っていた。その様子を、あゆみは眺めていた。

彼女に話した。

「この街では、月・水・金の午前中だけここで朝市が開かれ、市民は新鮮な野菜を、ここでするのです。ほら、今は果物の季節で、桃・あんず・梨・りんご・ぶどう・いちご・サクランボ・トウモロコシ、それにスイカなどがどの店にも並んでいるでしょう」

「ええ、果物の甘酸っぱい香りがあたり一面に漂い、彩がありますね」

「ハムやチーズやパン、それに花などもここで買えますよ」

「そうですね。あら、あそこに大きなヒマワリの花があるわ。なんと大きいのでしょうか。人の顔ほどはありますね」

あゆみは店の中をのぞくようにして歩いていった。少しすると、彼女が急に立ち止まり、一際目立つ建物を見上げた。

「あの大きな建築物は華やかさがありますね」

「あれは、市庁舎です。一四三五年に建てられ、実務的なことはあそこではしていません。建物内には市長室、会議室などがあって、そのなかの一室で私たちは結婚式を挙げましたよ」

「あそこで、結婚式を！」

「戸籍官の前での十五分くらいの簡単な式でしたが、ドイツではそれだけで結婚式となるのです」

当時の式の様子を、歩きながら彼女に語った。

この地方独特の大きな木組みの家々に囲まれたマルクト広場を抜け、石畳がさらに続く道を進んだ。と、あゆみが高く聳え建つ街一番の大きな教会の塔に目を向けた。

「あの教会の塔に行くこともできますよ。登ってみますか。塔からは、街全体が見渡せ、それは素晴らしい眺めですよ。螺旋形階段を何段も登ることになりますが」

「ええ、あそこの上に立ってみたいです」

彼女は声高らかに言った。そこで、塔の見晴台に立つことにした。

あゆみは塔に立つや、眼下に目をやりながら、周りの人たちにも届くような声を上げた。

「うわあー、すごいわ。ほんとに街全体が見渡せますね。赤オレンジ色の屋根が、まるでマッチ箱のようだわ。上から旧市内を見下ろすと、今までとはまったく違った模様ですね」

「中世の街の佇まいをより感じるのではないですか」

「ええ、その通りです」

あゆみはなおも目を下に落とし続けていた。その彼女に、教会周辺の建物について、説明をした。

「正門前にある建物は、昔は出版社で、ゲートルが訪れたこともあります。ほら、あそこ建物はヘルマン・ヘッセが若いころ、店員として三年間働いていた本屋ですよ。この街は人口八万数千人ですが、そのうち学生が二万人もいて、大学の街ともなっているのです」

「そうですね。それで若い人の姿をよく見かけたし、店のショーウィンドーもとても若々しくて、センスがいいなと思ったのです」

塔の上に十分ほどいてから、先ほど登った螺旋階段を下りて外に出ると、堂内のひんや

りした涼しさから、急に真夏の暑さになった。でも、空気が乾燥しているので、日陰は涼しいものだった。

さらに歩いて行くと、変化に富んだショーウインドーが並ぶ下り道となった。イタリアのアイスクリーム店前には、強い日差しを浴びて十名近くの人たちが並んでいた。そこを通り過ぎて行くと、全長百メートル近くはあるだろう橋の上に立った。

あゆみが周りを見渡した。

「ここからの眺め、素晴らしいですね。下に流れている川は、何と言うのですか」

「ネッカー川といって、ハイデルベルグの街を貫き、大河ラインへ走っていきます。ほら、あそこに大きな鱒が泳いでいるでしょ」

「えっ、どこですか」

あゆみは、私の指差す川面に目を落とした。

「あつ、あそこに。まさか鱒がいるなんて、思ってもみませんでした」

今度は川沿いに建ち並ぶ五階建ての古い大きな家々に、彼女は目を向けた。

「ここからの眺め、最高ですね」

「夜になると、あそこに照明がアップされ、それは色鮮やかになりますよ。観光客はこの橋の上でよく写真を撮ったりしています。ほら、あそこでも」

あゆみは、若いカップルが写真を撮り合っているほうに目を向けた。

「ここは、『テュービンゲンの顔』ともなっているのです」

「そうなのですか。風情があるところですね」

そう言いながら、あゆみは一本の竿で操られている細長い小舟を眺めながら訊いた。

「あの舟の上で、それぞれの板にもたれかかっている人たちは学生たちですか」

「おもしろいです。でも最近、観光客も乗るようになってきました」

彼女は、なおもゆっくりと揺れながら動いている十二人乗りの舟を見続けていた。

私たちは橋の中央付近から中洲へ通じる階段を下りて、樹齢二〇〇年にも及ぶ百本のプラタナスの並木道を歩き出した。百メートル行くと、あゆみが立ち止まった。

「ここは、まるでヘンゼルとグレーテルに出てくるようなメルヘンの世界ですね」

今までの憂慮に満ちていたあゆみの顔が、旅行者に見られるような開放的な眼差しに変わっていた。

ふと、腕時計をのぞくと、十一時半が過ぎていた。昼食をどこかで摂らねばならない。テュービンゲンに来てから、彼女はいつも病院のカフェテリアで食べていたので、この街の名物レストランへ案内することにした。そこは街外れの丘陵の中腹に建ち、学生たちが好んで行くところだった。

彼女を車に乗せ、走り出した。りんごの木々が道の左右に立ち並んでいる光景を眺めながら、彼女が言った。

「どの木にも、赤い実がなっていますね」

「ええ、実は小さいですが、おいしいですよ。食べてみますか」

「採ってもよいのですか」

「木の下に落ちているりんごなら、いいでしょう。わたしは家族とよく森に行き、落ちているりんごを拾い、よくかじりながら歩いていきますよ」

車を止め、小さな赤いりんごを拾い、それを彼女に手渡した。あゆみはティッシュでそれ

を拭き、口に運んだ。と、りんごの甘酸っぱい香りが車の中にパッと広がった。あと少しで、シュヴァルツ・ロッホと呼ばれているレストランだ。

いつもは屋外に百名近く座れる椅子とテーブルが満席なのだが、今日は三十名ほどの人たちだけが座っているだけ。展望のよい席を見つけたので、そこに腰かけた。

「いい眺めですね」

あゆみが前方に広がる丘陵に囲まれた盆地風景を見ながら言った。

「このレストランは、素晴らしい景色だけでなく、料理の味がいいことでも名が知られているのです。とくに、自家製のソーセージやハム、それにポテトサラダとりんご酒、もちろんびールは絶品です。お姉さんもドイツの学生たちと、ここで何度も食べたことがあると聞きましたよ」

「そうですか。ここで昼食を摂ったことを、あとで姉に話してみます。こちらの言うことは、ほとんど理解してきましたので」

農家が経営しているレストランなので、時々牛や鶏の鳴く声が聞こえ、それに数羽の孔雀が樹の枝に止まって、色鮮やかな羽根を広げているのが見えるのである。私たちは樹齢八百年の菩提樹の下で、郷土料理を食べ続けた。

昼食を終え、再び車で病院へ向かった。

車中、あゆみは姉の病状がいくら落ち着いてきたこと、また東京の建設会社の現場で働いている身なので、明後日には日本へ戻らなければならないと語った。それを聴き、シヤキールのことをしっかりと今伝えねばと思った。

「病院に毎日訪れているシヤキールのことですが、彼と話をしましたか」

「ええ、英語で簡単な会話をしました」

「彼はマクドナルドで働き、仕事が終わると、病院に行き、よくやっているといますよ。彼とは今まで数えきれぬほど会って話をしたが、会うたびに好感の持てる青年だと思いううになりましたね」

「ええ、私もそう思います。私を病院に連れて行ってくれたり、病院近くの大学植物園にも姉が眠っている間に案内もしてくれたり、優しい青年ですね。彼が姉の恋人なのは、姉の表情からしてわかります。それに、姉から届く手紙に、彼のことかしばしば書かれてありましたから」

「そうですか。彼の存在は、今もそして今後もお姉さんにとっては大きいでしょうね」

「ええ、私もそう思います」

彼女は私の横顔を見ながら、さらに続けた。

「父は、シヤキールさんが難民だと知ったとき、怪訝な顔つきをしました。保守的な父です。でも、父が帰国して、母にいい青年だったと言ったのを母から聴きました。シヤキールさんのことは、母に電話で詳しく話しました」

それを聴き、あゆみは勿論、美帆の父親もシヤキールの存在を大きく感じとっているのだろうと思った。彼のことを、さらに話すのを止めることにした。

十分ほどで病院に着き、美帆の病室に入ると、早速あゆみが、チュービンゲン市内観光とレストランでの食事のことなどをたのしそうに姉に話しはじめた。姉はニコニコしながら、その話しに聴き入っていた。

それから二日後、あゆみが宿泊しているホテルに行くと、彼女はすでに朝食を済ませ、

荷物をまとめて部屋で私を待っていた。

美帆と一緒にホテルの受付で宿泊費の精算をしていると、女主人が奥から出てきた。

「宿泊代は要らないよ。ミホの命が助かって、よかった、よかった」

いつもの威勢のよい声である。私たちは目を丸くした。美帆がここでアルバイトをしていたからとはいえ、無料とは。それもあゆみの十日分と父親の四日分である。信じられない気持ちになった。いつも美帆の働きぶりを誉めていた女主人。予想もなかった言葉に、あゆみは即マルクト広場へ向った。そして、買ってきた花とワインを女主人に心から感謝して手渡した。そのあと、私たちは再び病院へ走った。

美穂の病室に入ると、仕事を休んだシャキールがベッドサイドに座って美帆と話をしていた。彼女の鼻からは管が取れて、顔色も良く、こちらが時々冗談を言うのと、笑顔を浮かべるようにもなった。それを見て、私とシャキールはよろこんだ。しかし、あと三十分で別れとなるあゆみは、複雑な気持ちでいたに違いない。その彼女が私に話し出した。

「昨日、抜糸があつたのですよ。白い包帯を取った姉の頭を初めて見たのです。抜糸は相当痛かったようで、姉は目に涙を浮かべながら、低い声で『まだ、まだ』と日本語で言ったのです」

妹は微笑みながら、姉の動く左手を強く握った。姉は少し照れたような顔をしてニッコリした。それを見て、さぞ痛かっただろうと想像したのだった。と同時に、よくここまで持ち直してきたし、この照れた顔に美帆の強さを感じた。そこに、希望を読み取ることができるのだった。

別れの時刻になった。姉が何を思ったのか、妹の目を凝視しながら、いくらか声を高くして言った。

「アパートの台所にある冷蔵庫に、わたしのものがあるから、それを持って行って！」

「それは何なの？」

妹が訊いたが、姉は微笑みだけだった。

姉妹が別れる時間となった。私とシャキールは室から出た。十分ほどしてから、あゆみが指先で涙を拭うようにして、私たちのところに来た。それを待って、冷蔵庫にあるものを取るために美帆のアパートへ向かった。

冷蔵庫内に、何があるのかと三人で謎当てのような気持ちで開けると、スモークサーモンがあつた。それを目にしたあゆみが、笑顔を浮かべた。

「私たち姉妹、それに母もスモークサーモンが大好きなのです。これを家に戻ってから、母と一緒に食べます」

彼女は、それを大事そうにバッグに入れた。何か一つでも妹にお土産として手渡したいという姉の思いやりなのだろうと思った。

飛行場へ向う途中、私たちは、彼女が倒れてから今までよくここまで回復してきたことなどを語り合った。

チェックインの時間となった。あゆみが私の前に立った。

「姉がこれほど多くの人と交流があり、お見舞いに来てくださり、本当に感激しました。どうぞ、皆さんによるしくお伝えください。人のありがたさを身に浸みて感じました。それは姉も同じです」

そう言って、頭を深く下げた。

「いや、美帆さんから大きな力を得ているのは私たちです。見舞いに来た人たちと連絡を取り合いながら、電話で少しずつ良くなってきている彼女の病状を伝え合っているのです。そうすると、お互い『共に』という意識みたいなものが生じて、まわりの人との繋がりがいかに大切なのかを知ったのですから」

私もお辞儀をした。あゆみは、今度は私の隣にいたシャキールに目を移した。

「姉の看病をしてくださって、本当にありがとうございます。今後も、姉のことをよろしくお願いします」

彼女がそう日本語で言ったのを、ドイツ語に訳して彼に伝えた。

それを聴いたシャキールは、あゆみの目を見ながら、英語で語句を強くして言った。

「ボクでできることは、何でもします」

出国手続きを済ませたあゆみが、こちらを振り向いて手を振った。私たちも手を振り返した。彼女のうしろ姿を見ながら、姉妹が再び会える日が来るのを願った。その日が来るのを願った。

第四章 二人の約束

手術を受けてから二週間半が過ぎ、美帆は脳外科から神経内科に移った。と同時に、今までしていた点滴と尿管チューブ、それに心電図のモニターなどは不要となり、少しずつ快方に向い出した。しかし、右半身の麻痺は相変わらず続いていて、ひとりりで歩くことは出来ないでいた。

言語治療は毎日行われ、発語と理解力は驚くほどに戻りつつあった。私と話す日本語会話は難なくできるようになってはいたが、シャキールとはドイツ語会話のためにいくらか不自由さがあった。が、お互いの意思の疎通には差し障りはなかった。このまま順調にいくだろうと思った。

しかし、手術して一ヶ月が過ぎた日のことだった。家の電話ベルがけたたましく鳴り響いた。受話器を取ると、いつもとは違うシャキールの甲走った声が飛び込んできた。

「ミホが再び集中治療室に、運ばれてしまった。一体、何が起こったのだろう。ボクは心配で、心配で」

「またどうして？ いつから集中治療室に入った？」

「ボクが仕事を終えて、いつものようにミホの病室に入ると、彼女はいないのです。たぶん、リハビリの治療に行ったのだろうと思います、しばらく待っていたのです。すると、看護師が来て、『ミホさんは、急に体の調子が悪いのを訴え、嘔吐して意識がなくなり、集中治療室にすぐに入り、今検査中です』と言ったのです」

「よし、わかった。すぐそちらへ行くから」

車のハンドルを握りながら、もしかしたら、あと二つある動脈瘤が破裂したのではないだろうかと思った。医者が今度破裂したら、前よりも厳しい病態になるだろうと言ったことが浮かんだ。もしそうなら…。

駐車場に車を置き、シャキールのいるところへ早足で向かった。

彼と会い、早速二人でナースセンターに行き、三人いた看護師の一人に訊ねた。

「一体、彼女に何が起こったのでしょうか」

「今、検査中なので、結果が出るまで待ってください」

そう答えるだけだった。待つしかなかった。

私たちが美帆の病室に戻ると、ベッドの上かけ布団が荒々しく置かれてあった。緊急事態であったことがひと目でわかった。ベッドの脇の小さな机の上には、日本からの手紙が何通も重ねられ、その横には十月からはじまる大学の科目選択の本と聖書が並んでいた。少し快方に向ってきたので、大学で再び学ぼうとしたのだろうか。

一時間が過ぎた。病室を出てナースセンターに行き、再び看護師に美帆の容体について訊ねたが、「まだ検査中です」と答えるだけだった。

仕方なく再び美帆の病室に戻り、暮れ行く外の景色を窓から見るではなしに眺めていた。シャキールは椅子の上で両手を合わせるようにして祈り続けていた。その彼を連れて、カフェテリアに行った。

店内は明るく、何人かがテーブルを囲んで話をしていた。私たちはコーヒーカップを持って椅子に腰かけた。少しすると、シャキールが誰彼に言うでもなく、

「どうしたのだろう。ミホに何が起こったのだろう」

と呟き、深い溜息を洩らした。そのあと、私にわずかに聞こえるような声を出した。

「ミホはこのところ、言語の障害も少しずつなくなり、話が十分にできるようになって、ボクが来るのをいつも待っていたのに。一体、どうしたのだろう？」

それを聴き、言おうかどうか迷ったが、つい口から出てしまった。

「検査の結果が心配だが、もしかして」

そう言ったあと、黙った。彼も再手術のことを考えていると思うと、それから先のことを言葉にすることはできなかった。目の前のコーヒーカップに手を伸ばし、一口飲み、話題を変えた。

「枕元には、来学期用の選択科目を選ぶ本があったが、美帆は再び大学のゼミに出席しようとしたのだろうか」

「あの本は、淑香が持ってきたのです。良くなってきたので、ミホは希望を持っていました。しかし、こんどのもので、それもどうなるか」

彼は自分のカップをしばらく見続けたあと、今度は私の目を正視した。

「一週間前、ミホはこのようなことを言ったのです。それは、ボクたちがお互いの心情を話していたときでした。彼女が、『このような身になっていろいろなことを考えるようになったわ。死に対する不安はあるわ。でも、それよりも、今まで自分は本当に生きてきたのかとの思いになったわ』と」

「それを、ドイツ語で言ったの？」

「いいえ、ドイツ語混じりの英語でした。それから彼女はしばらく黙ってから、ボクを見つめ、『シャキール、ありがとう』と小声で言ったのです」

彼女が日本語ではなく、英語でそのように言ったのに驚いた。でも、日本の大学で英文科に籍を置き、またアメリカに二年間滞在したことがあった彼女だからとも思った。いや、それ以上に驚いたのは、死に直面した若い女性が、そのようなことをよく口に出したからだった。いや、反対に死に直面した人だからこそ、また過去に苦悩したことがあったからこそ、そのようなことを言ったのだろうと思った。

あれは一年ほど前のことだった。美帆が日本の大学時代に長く付き合っていた人と別れ、そのことを心苦しそうに私に語ったことがあった。彼女は死と闘いながら、過去の人との関係の辛さを想い返したのだろう。だからこそ、今、前にいる人の優しさを強く感じながら現実を承認し、今の自分があるがままの姿を見て、「ありがとう」と言ったのだろうと。

私たちの間に沈黙がしばらく流れ続けた。

少ししてから、彼の黒い瞳を見ながら言った。

「君たち二人は何でも話し合うのだね」

「ええ、付き合い出してからいつもそうでした。それだから、ボクたちは、よく口喧嘩をしました。でもそのようにして、関係をつくってきたのです」

「そうだよ。わたしも、妻と意見の違いで口論になる場合があるね。そのときは、自分が傷ついたり、攻撃的になったりするね。でも、そのようにして、お互い思っていることを率直に言い合いながら、関係を築き上げていかないと、自分が本当に生きているかとの問題ともなるからね」

自分の思っていることを、私より二十歳年下の彼に語った。私とシャキールとの間に、

お互いが正直に言う関係が芽生えはじめていた。

再びナースセンターに行き、看護師に今の美帆の容体について訊ねたのだが、まだ医師から何の連絡もないと答えるだけだった。

病室に戻ると、シャキールは椅子に座って、身動きもせずに手を合わせていた。毎日恋人を見舞い、いくらか回復してきたら、このような状態に陥り、彼の心の内は、心配・不安・苦悩・希望・疑念が交錯していることだろう。それにしても、彼の若さで、今後どうなるかも知れない恋人を誠実に思いつつ、毎日訪れているのだ。その姿は、比類ないと思っただ。

しばらくすると、看護師が病室のドアを開けて入ってきた。

「ドクターが待っています」

それを聴き、私たち二人は目を合わせた。シャキールが私に、「難民の身のボクなので、誰かが傍にいたほうが、ドクターは親切に詳しく話をしてくれるのです」と二度ほど言ったことがあった。それを想い起こしながら、彼と一緒に医師のところに行った。

ドクターは、動脈瘤の破裂ではなく、白血球が急激に減ったことが原因で集中治療室に入ったと説明した。薬の調剤をすれば、二日後には元の病室に戻れるとも付け加えた。それを聴き、私たちはホッと胸を撫で下ろした。

病院を出て車に乗ったあと、何度も笑顔を浮かべているシャキールに、

「美帆はあすも集中治療室なので、明日の病院通いは休みとなるね」

と言うと、彼は肯きながら、

「明日は病院へ行きませんが、心での病院通いはします」

と、明るく弾んだ声が返ってきた。

駅まで彼を送り、いつもより力を入れて握手をすると、彼は、日本語で「アリガトウ」と周りの人たちにも聞こえるような声で言い、電車の中に消えた。

薬の調剤によって、彼女の白血球数は正常に戻り、日毎に良くなりつつあった。手術から六週間が経つと、一人で立つことができるようにもなった。しかし、その頃から、動脈瘤の原因とされる血管炎を治療するために、新たな薬を飲まざるを得なくなってしまう。その薬は、生殖器に障害を与えるものだった。

そのことを知らされた時、子供好きな彼女は非常な悲しみに陥った。今まで毎日、自分から積極的に右半身の麻痺のためのリハビリを続けていたが、それを拒否するようになってしまった。それを傍で見ていたシャキールは、彼女の悲しみをいくらかでも和らげようとして淑香に頼み、三人でゆっくり話し合う機会を設けた。そのお蔭で、美帆は再びリハビリをするようになった。

リハビリを再開して二日目のことだった。私とシャキールが病院敷地内の中庭で肩を並べながら散歩をしていると、彼が話し出した。

「ミホが倒れる前、ボクたちは子供に関して話し合ったことがあるのです。もし二人に子供ができたら、女の子だったら、エリカと名付けよう」と

「エリカか。よい響きを持った名前だね」

「生殖器に障害が生じるような薬を飲まざるを得なくなつて、ミホは大きなショックを受けたのは知っていますよね」

「彼女が子供好きなことは、ミヒヤエルと遊んだりしているところを見ると、わかる

からね。でも、その薬はずっと飲み続けるわけではないし、治療が終われば」

さらに言おうとしたことがあったが、美帆の今後の状態がどうなるかも知れず、薬を飲み続けなければならぬかも知れないと思ひ、黙った。それと、彼女の胸中を察すると、何も言えなくなってしまうのである。

「ミホは、二ヶ月前はあんなにも健康だったのに、今はこのようになってしまひ。彼女と過ごした手術前のことを思うと、信じられないのです。そして、今後のことも」

シャキールの声が少しづつ低くなった。その彼に言った。

「美帆を知っている私たちは、今は彼女の身体の回復を願っているが、君にとっては、これからのことも気になってるよね」

「ええ、ボクは難民ですし、ドイツ国から出られません。難民のボクが書類上のことなどで、ミホと結婚ができるかどうか。ボクとミホと一緒にいたくても、彼女の親が許してくれるのかどうか。イスラム教の家庭のなかで育ったボクを、ミホの両親が認めてくれるのか。何よりも、彼女の身体がどうなっていくのか。予測がつかないことばかりです」

「今、大切なのは美帆が回復することだよ。毎日、見舞いに来ている君の姿を見て、心が打たれるよ。今をしつかりと精一杯にやることをすれば、未来はそうであらぬに出ないと思うのだが」

「そうでしょうか。そうあってほしいです」

シャキールは空を仰ぎ見た。その彼に、これだけは伝えようとした。

「彼女のところに、毎日のように見舞い客が来ているよね。そのなかには、難民で、イスラム教徒の君を訝しがっている人もいないが、わたしは違うよ。君と知り合えて、うれしく思うし、君との関係ができたのを心からよるこんでいるよ」

さらに続けた。

「彼女が良くなってきたのは、毎日の君の行動がもたらしていると思うね」

「そうでしょうか」

彼は立ち止まって、私の横顔を見た。その時、彼の黒い瞳がキラッと輝いた。私たちはまた歩き出した。

手術を受けて二ヶ月した頃から、美帆は自分で身辺のことをすることが可能になってはいたが、ひとりで歩くことはできないでいた。そこで、身体の機能訓練を集中的に行うために、リハビリテーション・センターに移ることにした。

そのセンターはドイツとスイスの国境にまたがるボーデン湖畔に建っていた。シャキールがなかなか行かれないところだった。難民の彼は、遠くへ自由に行くことが許されていなかったからである。辛そうであったが、今の置かれている彼の立場ではそれを守るしかなかった。

そのシャキールを、私の車で彼女のところへどうしても連れていこうと計画した。途中で警官による検査もないだろう。いや、たとえ取り締まわれても、彼が恋人と会う権利はあると思ひ、法と闘っても彼を連れて行こうと決心した。

美帆がセンターに移って一週間が過ぎた時だった。日本から美帆の高校時代の友人二人が、チュービンゲンに見舞いに訪れてきた。二人とも美帆がリハビリ・センターに移ったことを知らなかった。ちょうどシャキールを連れて美帆のところへ行こうとしていたところだったので、その二人を車に乗せて一緒にセンターへ向かった。

シャキールは美帆と毎日電話で話をしていたが、今日は彼女と直接会えるとあって、終始ニコニコである。それは私にも言えた。彼女がどのくらいよくなってきたかを、今日確かめることができるからだった。

テュービンゲンから車で二時間走り続けていると、リハビリ・センターの白い大きな建物が見えた。

入口で美帆の病室がどこなのかを聞き、二階の彼女の室に入ったが、美帆は水泳療法のためにいなかった。私たち四人は待つことになった。

室の大きな窓からは、大きなボーデン湖が見え、その湖面には白鳥のように浮かんでいる白い帆のヨットが何隻も望め、その奥にはスイスの高い山々が連なっている。絵に描かれたような光景だ。

二十分ほどしただろうか、美帆が紅潮した顔で部屋に現れた。その姿を見たシャキールは直ぐに駆け寄り、彼女の肩を優しく抱いた。思っていたよりも元気そうだ。

少しすると、美帆は友人二人と手を取り合いながら懐かしそうな顔で話しはじめた。緩やかな時間の流れの中で、五人がそれぞれ笑顔を浮かべての歓談となった。

一時間ほど経った頃、私と友人二人は美帆とシャキールを部屋に残して、近くの林へ散歩に出かけた。

森閑とした林の小径を歩きながら、二人に美帆がここまでやってこられたのが奇跡のようだと伝え、彼女の生きようとする姿を語った。二人ともそれを聴き、口を揃えて、

「美帆は頑張るほうだから」と、言った。一人の友人が話し出した。

「美帆と私たち二人は、同じ教会に通っていたのです。私たちはクリスマスチャン家庭で育ちましたが、彼女はそうでなかったのです。洗礼を受ける際、父親から強く反対されました」もう一人の友人が語り出した。

「美帆は洗礼を授かってから、親から離れて、私の家に三ヶ月間滞在したことがあります。そのとき、私たちはいろいろなことを話し合いました。三人に何か困ったことが起きたら、お互いに助け合おうと約束したのです。先ほど、美帆の様子を見て本当にホッとしました」

二人は目を見交わして微笑んだ。その彼女たちが話すことを歩きながら聴き続けた。一時間半の散歩を終えて部屋に戻ると、美帆とシャキールは秋の柔らかな日差しを浴びながら椅子に腰かけて話をしていた。私たちが入ったことも、気づかない二人だった。

再び皆で冗談を言ったりしての歓談となった。しばらくすると、美帆は疲れを見せはじめたので、私たち四人は帰ることになった。

「また来るからね」そう言いながら、シャキールは美帆を抱いた。彼女はシャキールの目を見続けていた。

二人の友人はクリニック周辺のホテルに投宿して、そこから四日間、毎日美帆を訪れると語った。

エンジンをかけ、走り出すや、助手席に座っているシャキールに話しかけた。「美帆はびっくりするほど、元気になったね。歩き方がすっかりしてきたよ」

「驚きました。しかし、右半身はまだ感覚がありませんが」
「でも、これから少しずつリハビリをしていくうちに元のようにになっていくのではないか。」

階段もひとりで登れるようになったし」

「はい、そうです」

そう言って、彼は口笛を吹き出した。

しばらくしてから、このことを訊かねばならないと思った。

「美帆はセンターにあと二週間いることになっているが、その先どうするかについて、彼女は何か言ってた？」

「そのことを、二人で話し合ったのです。二つの可能性があります。一つはドイツに残って、さらにリハビリを続け、チュービンゲン大学で再び勉強するかです。しかし、あの身で学業を続けられるとは思えません。まして、あの体でアルバイトはできないでしょう。医療費がこの国では、すべて保険から出て、個人の負担は無いとはいえ、生活費の問題があります。もう一つは、日本に帰国することです。でも、ミホはボクとどうしても別れたくないと言いました。それはボクも同じです」

耳を傾き続けた。

「もちろん、ボクも一緒に日本に行ければと望むのですが、難民の身のボクにはそれは無理です。そこで、ミホはミュンヘンの日本領事館に電話して、難民のボクと結婚できるかを問い合わせたのです。もちろん、彼女は自分の体のことも説明しました。そしたら、まずミホひとりが日本に帰り、結婚の手続きをし、夫となったボクを呼び寄せればいいのではと言われたそうです。そこで、ボクたちは話し合ったのです」

次に何を言うのかに集中した。

「離れ離れになるのは辛いけど、とりあえず、ミホが日本に帰り、リハビリに専念し、その間に結婚の手続きをしようと。彼女はどんな困難があろうとも、ボクと結婚すると言ったのです。ボクたちは、結婚すると強く誓い合ったのです」

目を大きく開けながら話す声は、いつもより高かった。それにしても美帆は凄い。今、頭の中に二つの動脈瘤を抱え、それがいつ破裂するかも知れない身で、シャキールと結婚をしようとしているのだから。

それから三日後、シャキールは一人で列車に乗って、美帆のところへ向かった。もし車内で警察官の検査に引っかかれば、自分の身はどうなるかを覚悟で行ったのだった。さいわい、何事もなく戻った。

それを聴いてから四日後、彼を車に乗せ、再びセンターに行った。約束していた十二時前に着くと、美帆はセンター前で私たちが来るのを待っていた。その彼女を連れて、センター近くに住んでいる私の知り合いの日本人宅へ向った。

私とシャキールと美帆、それに私の知人夫妻との昼食となった。目の前には、巻き鮓と焼魚がテーブル上に並んであった。チュービンゲンの大学病院では、美帆は見舞いに来た日本人から時々手作りの日本料理をもらい、それを美味しそうに食べていた。しかし、センターでは、私とシャキール、それに日本から来た二名の友人以外は訪れていなかったの、彼女はまったく日本食を口に入れてなかった。

巻き鮓を食べている美帆に、私の知人が話しかけた。

「センターではドイツ食だね。日本食が恋しくなるよな」

彼は、以前ドイツの病院で二週間入院していたことがあった。

「はい、本当にその通りです。チュービンゲン大学に二ヶ月間ほど入院していたときは、

見舞いに来て下さったから頂いた日本食を口に入れると、涙が出てくるほどにうれしかったです」

それを聴き、彼が合槌を打った。

「そうだよ。ドイツの朝と夕の食事はチーズ・ハム・パンなどの火の通さないものが多く、食べて力を得るよりも、体力を衰えさせないように口に入れているところがあるからね。病気のときは、とくに、参ってしまうね」

「そうなのです。わたしは大学食堂で食事を摂ったことがあります。いつもアパートに帰って、ご飯を炊いていました。病院とセンターの食事は、どうも」

それを耳にした知人の奥さんが、ニッコリしながら美帆を見た。

「どうぞ、たくさん召し上がってください。お味噌汁もお替りしたらいかがですか」

「ありがとうございます。病院とセンターのドクターも介護師さんたちも、十分に対応してくださるのですが、食事だけでも」

美帆はさらに続けた。

「こうやって、日本語で話をしながら食べるのはいいですね。食欲も進みますし、自然とことばが口から出てきます」

彼女はいつもより口を軽やかにして語った。その彼女が、私を見ながら頭を下げた。

「このような機会をつくってください、本当にありがとうございます」

「いや、センター近くに日本人家族を知っていたので電話をしたら、彼が是非家に来てくださいと言ったので」

それを聴いていた知人が言った。

「このようなときは、お互い様だ」

彼の奥さんも肯いた。

「これから、美帆さんが退院するまで、二日に一度の割で日本食をセンターに届けますね」それを聴いた美帆は、遠慮をした。が、奥さんが言葉を強くして、

「持っていきます」

と、にこやかな顔で言った。

シャキールは、お皿に盛った巻き鮓を、「オイシイ、オイシイ」と声を出しながら食べていた。その昼食も終わり、私たちはセンターに戻った。

リハビリ・センターでの四週間の運動療法を終え、美帆はチュービンゲンに戻った。あと三日したら日本へ帰国しなければならぬ彼女だった。宿泊は以前働いていたホテルでもよかったが、そこにはエレベーターがなかったので、ネッカー橋近くに最近建てられたホテルとなった。川の流れがよく見えるところだった。

彼女が帰国する日となった。

美帆が宿泊している部屋のドアをノックしようとする、ちょうどシャキールがケーキを買うために、外に出るところだった。

「すぐに戻ってきます」

彼は私にそう言って、部屋から出た。

バルコニーに行くと、美帆は手すりに寄りかかりながら目の前のネッカー川を見つめていた。その彼女が、静かな声で言った。

「穏やかな流れですね。絶えず水は流れて行きますね。テュービンゲンで暮らした三年間
が、ふと想い出されます」

彼女は、なおもゆっくりと流れている水を眺めていた。私も彼女と同じ方向に目をやり
ながら言った。

「今は穏やかに流れているが、強い雨が数日間降り続けると、濁流のように走り、私たち
は愕いて恐ろしさを感じるよね。そのとき、この川で泳いでいる鱒は必死になって、その
荒々しい流れと闘うのだろうね」

美帆の今の状態について話したわけではなかったが、彼女のことが頭から離れずにいた
ので、自然とその言葉が出たのだった。彼女は黙ったまま、流れ行く水をなおも見つめて
いた。

さらに言おうかどうか迷ったが、続けた。

「その荒々しい流れのなかで、鱒はその急流が終われば、再び穏やかな流れとなることを
本能的に知っているのだろうね」

それを聴いた美帆は、こちらに顔を向けて微笑んだ。そして、再び太陽の光を浴びなが
ら輝いている川面に目を向けた。その顔から、「これからはじまる困難に毅然として立ち
向かって進むわ」と言った気概を感じ取った。

しばらくすると、シャキールが部屋に戻ってきて、手に持っていたケーキ箱をテーブル
の上に置いた。私たちは、いつか再びこのような時間が持てるようにと願いながらケーキ
を食べはじめた。

美帆が帰国する日となった。シャキールは半身麻痺している彼女の体を支えながら、ゆ
っくりとテュービンゲン駅へ向った。私も一緒である。

駅には、一人の日本女性が待っていた。美帆は、週末はいつもホテルで働いていたので、
毎日曜日に行われるテュービンゲン街での教会礼拝には、なかなか出席することができな
かった。が、クリスチャンの彼女は何か時間をつくり出して、毎月一回だけは、今前に
立っている人が通っているシュトゥットガルト日本語教会の礼拝には出席していた。

聖書に強い関心を抱いていた私だったので、その教会の礼拝に美帆と一緒によく出席も
していた。そのようなことで、私も美帆も前にいる女性を知っていた。その女性も日本に
帰るので、成田に着くまで美帆の世話をしてくれることになっていたのだった。

列車に乗る時刻となった。美帆は黒い糸の温かそうな帽子をすっぽりと被り、顔はい
つもより青ざめていた。その彼女が私の前に立った。

「いろいろお世話になり、本当にありがとうございます。この三ヶ月間、なんとお礼を
申し上げてよいのかわかりません」

深々と頭を下げた。

「お礼を言うのはこちらでしょう。美帆さんが少しずつよくなってきているのを目にして、
見舞いに来る人たちと『共に』よろこんでいるのだから」

「そう言ってくださいると、うれしいです」

彼女は再び頭を下げた。

「美帆さんがドイツから発ったことを、あとで皆に知らせるでしょう。皆よろこぶに違
ない。とにかく、日本での治療に専念し、さらに良くなっていくことを祈っています」

「ありがとうございます。くれぐれも、皆さんによりしくお伝えください。わたしは、ガ
ンバリます」

彼女は最後の語句を強めた。

今度はシャキールを見た。彼は美帆を抱きながら、

「長い黒髪の姿になった君と、再び会おうね」

と、誓うようにして言った。涙を流しての二人の別れとなった。

発車二分前になった。ハンカチで目を押さえながら、美帆は付き添いの人と列車の中に
ゆっくりと入り、座席に腰かけた。そして、ホームに立っているシャキールをじっと見つ
めた。

列車が動き出すと、美帆は麻痺のない左手を振って、シャキールに顔を向けながら、三
回ほど肯いた。それに応えるように彼は、手を大きく振り返し、走り過ぎようとする列車
を追った。線路上に列車の姿が消えるまで、彼はホームの先に立ち尽くしていた。

第五章 自立心

美帆と初めて会話を交わしたのは、彼女が頭部手術を受ける一年前のことだった。日本から訪ねて来た知人が、私の家の裏に建つホテルに泊まっていたので会いに行くと、彼が話し出した。

「このホテルには、日本の女性が働いているのだね。さっき、廊下で『こんにちワ』と声をかけられたよ。西洋的な容姿の女性だったのでちょっと驚いたね。ここは大学で勉強をして、このホテルでアルバイトをしているとのことだったよ」

「そうだったのか。時々外国人らしき女性がこのホテルでベッドシートを持って、従業員のように働いているのを何度か見かけたことがあったけれど、彼女が日本人だったとは知らなかったよ」

それ以来、美帆の姿を見かけると、挨拶を交わすようになった。

ある日、ホテルの前を通ると、彼女がいたので、

「今日の夕食を、わたしの住まいで摂りませんか」

と声をかけると、

「よろしいのですか」

と彼女は応え、三十メートル先に建っている薄緑色で塗られた五階建ての家を指差した。「あの三階に住んでいますので、玄関のベルを押してください」

そう言うと、彼女は肯いた。

家に戻ってから、ミヒヤエルを連れて、夕食の材料を買うために買物に出た。今日の献立は手巻き鮓。生の魚が手に入らないので、アボガドやきゅうり、それに卵焼きと燻製の鮭を海苔に巻いて食べるのである。特に、酢のきいたご飯に、アボガドと鮭を入れてのりで巻き、わさび入りのしょう油をつけると、これがマグロのような味となるのだ。手巻き鮓は、私たち家族の好物だった。

ホテルのアルバイトを終えた彼女が来宅した。

私たちはテーブルを囲んで、手巻き鮓を食べはじめた。ミヒヤエルは初めての人にはなかなか馴染まないのだが、彼女が両手で自分の耳をブラブラさせるユーモア的な仕草を見ると、彼もその真似をして、たのしそうにしていた。皆、「おいしい、おいしい」と声を出しながら食べ続けた。

その夕餉が終わりがけた頃、美帆が私に顔を向けながら、

「主夫をしていると聞きましたが、本当ですか」

と、日本語で訊いた。ドイツに来て二年が過ぎた彼女だったので、ドイツ語の会話はできたが、お互いが同国人となると、私と美帆の会話は日本語になってしまったのだった。

「私たち家族が、ここドイツに引っ越して来たときから主夫をしているよ」

日本語でそう答えてから、妻を見た。

「ハウスマンをして、もうどのくらいになるかな」

妻はアボガドを酢の効いたご飯の上にのせながら、ドイツ語で言った。

「七年ぐらいになるわね」

八年間日本に住んでいた彼女だったので、日本語を聞いてはわかるのだが、話すのが苦

手となっていた。また、日本で生まれたミヒヤエルは日本語をまったく忘れていた。

美帆はハウスマンという語を耳にしたことがなかったせいか、関心を示した。そこで、彼女に話した。

「私たち家族の場合、障がいのあるミヒヤエルと暮らしているので、親の片方が彼の傍に
いる必要がどうしてもあったので、それなら妻がより働き易いこの国で仕事に就いたのだ。
そして、自分が家のなかのことにするようになったね。それと、家事や育児をしながら、
ドイツの社会福祉分野に関する小さな情報誌を日本の友人や知人たちに、定期的に送るこ
ともするようになったよ。また日本から来る人に、こちらの福祉施設などに案内するこ
ともするようになったね。でも、訪れてくる人の数は少ないし、情報誌を読む人は限られ
ているし、やはりわたしは専属主夫といえるでしょうね」

「そうですか。ハウスマンは、ドイツでは多いのですか」

「約二%と聞いているよ。専属主夫を続けていられるのも、妻が何かと家のことも協力し
てくれるからね。それに、ドイツの社会保障制度に支えられているところもあるね」

「社会保障制度？」

「ああ、たとえばミヒヤエルのように障がいのある人でも介護保険に認定され、経済的な
援助もあるし、介護が仕事と見なされているので、介護をする人が年金年齢になったとき、
それなりの年金額を手にもすることもできるね。それと、障がいのある人は、最後まで子供
手当を受け取ることができるようになってるよ」

「そうなのですか」

「とにかく、私たち夫婦は社会保障制度が整ったドイツ社会のなかで、お互いが役割を意
識しながら暮らしているところがあつね」

それを耳にした妻が美帆に、

「彼の作る料理は本当においしいわ」

と言いながら、アボガドとサーモンがのった手巻き鮓を口の中に入れた。

私たちの話題が、夏の休暇のことになった。

「大学の夏休みがはじまっているよね。何か計画でもしているの？」

デザートを食べている美帆に訊いた。

「いいえ、何もしていません。ドイツに来て二年が過ぎましたが、旅行はほとんどして
いません。休みは、だいたいアルバイトにあてていますので」

「勉強とアルバイトで大変だな」

「いえ、日本の大学に通っていたときも、中・高校生に英語を教えるアルバイトをしてい
たので慣れています。それに、ここでの暮らしが気に入っているので、そう大変だとは感
じていません」

そう言うってから、彼女は妻と私の顔を見た。

「皆さんはどこかへ行かれるのですか」

「私たち家族は毎年、夏の季節になると、スイスやチロルの山々で休暇を過ごしているよ。
今年もあと二週間したら、南チロルの山々へ行く予定なのだ」

山の話をする、彼女は目を輝かせながら聴いていた。それを目にしていた妻が、美帆
に誘いの言葉をかけた。

「ミホも私たちと一緒に山登りをしたらどうかしら？ 今回はわたしの友だちのウルリケ

も一緒だし」

「えッ、お伴してもいいのですか。うれしい」

即座の返事だった。彼女にとっては、ドイツに来て初めての旅行。それもアルプスの山旅とあって、非常によるこんだ顔を浮かべ、前に座っているミヒャエルの顔を見ながら、「わたしも山と一緒に登りますよ」

と言うと、彼はニッコリした。そうになると、あとは何を持っていくかの話し合いとなった。私たちは二週間後の南チロールでの山歩きを待つことになった。

車の中にリュックサックと登山靴、それに食料品などを詰め込んでから、ミヒャエルと一緒に美帆と待ち合わせたところへ向った。

ちょうど午前九時に大学食堂前に着くと、美帆と一人の青年が立っているのが車の窓から見えた。私の車を目にするや、彼女はその青年と手を振って別れ、小走りでこちらへ向かって来た。青年は立ったまま、走り去る美帆の姿を目で追っていた。

車から降りて、十数メートル先にいるその青年と挨拶を交わそうとしたが、美帆がもう座席に着くところだった。立ったままの彼を残して、走り出した。

彼女はうしろを振り向き、ミヒャエルと握手を交わした。その彼女に訊いた。

「一緒にいた人は、友人なの？」

「ええ、そうです」

「学生？」

「いえ、違います。働いています」

そう言うてから、彼女は再びミヒャエルのほうを振り向き、

「さあ、山に行きましょうね」

と声を出し、彼と話しをはじめた。その様子から、彼女はその青年については語りたくないように思えたので、話題を変えた。

「今日は雲一つない天気だね。六、七時間したら、イタリアの南チロールだ。そしたら、暑くなるだろう。でも、空気が澄んだ山麓の村で宿泊するから、涼しいだろうが」

彼女は肯きながら聴いていた。妻とウルリケは車に弱いので、電車に乗って南チロール駅まで行き、そこで私たちと合流することになっていた。

高速道路を時速百十kmで走っていると、猛スピードで走る何台もの車が私たちを追い越していった。

「飛ばしていますね。どのくらいのスピードなのでしょう？」

「時速百五十km以上は出ているだろうね。ドイツの高速道路は、制限速度がないから。でも、私たちは急ぐ旅でもないのです、この速度で走るよ」

彼女は周りの過ぎ去る景色を見続けていた。その彼女に訊いた。

「なぜドイツの大学で勉強しようとしたの？」

「東京の大学で英文科を卒業してから二年間、ある会社で働いていました。でも、そこでの仕事はどうもわたしには合っていないと思い、それと今まで付き合っていた彼と、その彼とは結婚までも約束していたのですが、亀裂が生じ、自分の存在までがあやふやになった時期がありました」

過去を思い返しながら、彼女は語り出した。

「そこではばらくの間、外国で暮らそうと決意したのです。わたしは、じつくりと考える性格なのですが、思い立ったらすぐに行動するという一面もあるのです。アメリカへ行き、英語を習いながら、二年ほどサンフランシスコの知人宅にいました。そして、たまたまそこで知り合ったある人から、ドイツ人家庭に住み込んで、食事と居室とを提供してもらうかわりに、無給で家事の手伝いをする家政婦のような仕事があると聞いたのです。ちょうどわたしの貯金が無くなってきたこともあって、その組織団体に申し込んで、チュービンゲンに行こうと決心したのです。そして、ここにやって来ました」

「へえー、ドイツ人家庭で家事の手伝いをしていたのか」
驚いた。この二十八歳の女性は、チュービンゲン大学で修士または博士の学位を取るために、やって来たと思っていたからだだった。

「ええ、そうです。わたしがアメリカに滞在していたときは、日本人の家にいたので、アメリカ人家族とのコンタクトはそうありませんでした。でも、ここドイツではドイツ人家庭で七ヶ月間働いていました」

「そうすると、ドイツ人家族の有様を身をもって体験したわけだね」

「ええ、小さな子供が三人いて、その子たちの世話をしたり、家の掃除をしたりしていました。その際、いろいろなことを考えさせられました」

「たとえば、どのようなこと？」

「そうですね。その家は住宅地域内にあつて、休日になると、家族たちは広い庭で本を読んだり、子供たちと遊んだり、庭の手入れをしたり、裸になって日光浴などをしながらのんびりと過ごしていました。また、彼らは時々近くの森へ出かけたり、ハイキングに行ったりもしていました。その様子を見ると、生活のなかの心地良さを大切にしているように思えたのです。その心地良さを得るためかどうかわかりませんが、家には家事を能率的に済ませる大型の機械、たとえば食器洗い機やシャツなどの大きいものをきれいにするプレス機がありました。それらを使ってまとめて片付けるので、主婦は毎日家事に追われているという感じはしませんでした」

ドイツ人家庭をよく観察していると思いつながら、聴いていた。

「それともう一つ、強く感じたことがあります。その家族は、『ここを自分の家のように使っているよ』と言ってくれて、とても親切さを感じたのですが、その半面、ドイツ人の自己主張の強さに、驚かされたことがしばしばありました」

その家庭での自分の体験を、生き生きと語った。久しぶりに日本語で話すのがうれしうだった。

「たとえば、六歳の子供の言動について、その子に、『どうしてそうしたのか』と両親は訊き、自分の言動の根拠となる理由をかならず言わされてきました。それに、『やめなさい』という禁止的なことばを言う代わりに、『注意しなさい』と子供に考えさせることばかけをしていました」

そう言うてから、美帆はさらに続けた。

「わたしも家のなかでの行動について、『どうしてそうするのか』と何度か訊かれたことがあります。そのようなとき、彼らは自分の考えのもとで暮らしているように見えたのです。それが強く出ているときは、自己主張が強いなとも思いました」

「どうして、そのようなことをするのかと訊かれて、答えられなかったこともあったでし

よう」

「ええ、『どうして』と訊かれると、『なんとなく』と答えるしかなかったことが再三ありました」

「いわゆるカルチャーショックというものかな」

「ええ、そうです」

「彼らとの話はドイツ語でしたの？」

「いいえ、その家のご夫妻とも、英語ができましたので、最初のころは英語で意志は通じていました。しかし、子供の世話などをするのに、ドイツ語が必要となったので、語学学校にも通い出しました。その費用は、すべてその家を出してくれました」

彼女の話をお聴きしていて、自分も学生の時、一年間リュックサックを背負ってヨーロッパとアメリカに滞在して、昼間はレストランで皿洗いのアルバイトをして、夜はドイツ語を習うために市民学校に通っていたことがあったので、彼女に訊いた。

「語学学校には、いろいろな国の人がいたでしょう？」

「ええ、クラスには東欧や中近東、それにアジアの人など十数名いて、各国の話が聞けるのがたのしみでもありました。わたしが他の国に関する話を興味深く聴いていると同様に、彼らも日本に関心をもっているように見えました。そこで、日本文化について説明しようとすると、はたと困ってしまうのです。自分自身が、今の日本文化とはこういうものだとやる根拠を真に持ち合わせていなかったからです。日本の昔の文化が今どのような形で残っているのか、また日本人が自国の現在の文化をどのようなものだと思っているのかを、知らないまま、日本での生活を送っていたからでした。とくに初めてアメリカに滞在したときは、そうでした」

長く語っているせいか、彼女の頬は紅潮していた。体験を身に引きつけて語っている顔だ。彼女はさらに続けた。

「アメリカでもそうでしたが、ドイツでも生活していて痛感したのは、世界の国々について、わたしはほんの一つまみの情報しか持っていないと言ったことでした。そう思ったとき、何か恐ろしさを感じました」

それを聴き、私も昔体験した事を話し出した。

「自分も外国に初めて来て、生活するようになったとき、そのようなことを思ったよ。他の国の文化を知ることがは、自国の文化を知ることだと」

美帆は大きく肯いた。その彼女に、さらに語った。

「膨大な情報洪水のなかで、利害関係によつて歪められた情報ではなく、正しい現実を知るための正確な情報を得るのは難しいよね。でも、毎日の生活をしっかりと続けるためにも、本当のことを知る努力をしていかないといけないだろうね」

「わたしも、そう思います。正確な情報を得るためには、非常にエネルギーを要しますが、以前のような無関心とは、無縁でありたいのです」

彼女は自分に言い聞かせるように言った。

「それに、アメリカとドイツにいて思ったことは、とくにドイツ人は、『自分の生活をたのしむ』ことを知っているように映ったのです。わたし自身、膨大な情報や周囲のスピードに押し流されることなく、主体的な態度で、もう一度、自分の生活を見つめ直し、生活のなかによるこびを見つけていこうと思いました」

「それは、大切なことだよ。自分から積極的に生きようとして、だからこそ、そのなかで生きる意味を見つけたことができるのだろうな。わたしの場合、パートナーとの関係を真剣に考え、また家族のことを思いながら暮らすことが、とくに、大切なことだと知るね。ハウスマンだから、そう思っているのかも知れないが」

「いいえ、そんなことはありません。わたしが過ごしたドイツ人家庭も、夫婦の絆を最も大切にして毎日暮らしていました。そこに、よろこびを見つけているようにも映りました」

「自分も、身近なところによるこびを見出しているね。それが幸せにつながっていると思うようになってきたね」

車はドイツからオーストリアの高速道路に入った。後部座席では、ミヒヤエルが退屈そうな表情を浮かべていた。それを見た美帆が、私に顔を向けた。

「ドイツ人家庭にいたときは赤ちゃんもいたので、その子にいつも日本語で子守歌を唄っていました。よかつたら、ミヒヤエル君に日本の歌を唄ってみましょうか」

「それは、いいね」

彼女は後席に座っているミヒヤエルのほうを振り向き、童謡歌を唄い出した。テュービングンの教会コーラス部に入っているだけあって、美しい声だ。ミヒヤエルはそのメロディーに合わせて、身体で調子をとりに出した。ふと、腕時計をのぞくと、十二時を回っていた。高速道路の休憩所で車を止め、妻が作った弁当を食べはじめた。

しばらくしてから、再び車に乗り、目的地のイタリアの南チロルへ走った。ミヒヤエルは眠くなってきたようで、後席でウトウトと眠り出した。

美帆が話しかけてきた。

「二十数年前の学生のときに、ヨーロッパとアメリカに一年滞在したと聞きましたが、当時様々な体験をしたのでしょうか。どのような理由で、ヨーロッパにいらしたのですか」

それにどう答えようかと、一瞬、迷った。確かに、ヨーロッパの山々を登りたい、世界の国々をリュック一つで歩き廻りたいという好奇心は強くあった。が、その他にも理由があったからだ。彼女に話した。

「世界の国々を見て歩きたいという好奇心が強かったね。それと、山登りが好きだったので、ヨーロッパ・アルプスを歩きたいと言うこともあった。学生だったので、お金はなく、リュックを背負って、数ヶ月間レストランで皿洗いをしたり、木工所で働いたりして、お金を貯めたりしては、山に登ったり、ヨーロッパの国々をひとり旅していたね。その当時、わたしのよう無鉄砲な若者も多くいたよ。一人旅の女性も、時々見かけたな」

そこまで話をして、黙った。さらに言わねばならないことがあったが、それは止めにした。人には誰にも語りたくない秘事を持っているもの。だからこそ、そのことが人生を深いものにしてくれると思っていたからだった。

しかし、彼女には申し訳ないと思った。会話というのは、自分の思っていることを正直に言い、相手がそれを聴き、それによって信頼関係が築きあげられていくのに。

彼女はさらに聴きたい様子だった。そこで、山の中で一人テントを張って寝たことや、チロルの山で遭難しかけたこと、フランスのニースのユースホテルで寝袋にサソリが這っているのを見たことなどを話した。

しばらくしてから、今度は私から彼女に話しかけた。

「美帆さんは、学生用のアパートに住んでいるよね」

「ええ、ドイツ人の家庭にいたとき、チュービンゲンには大学があると知ったのです。わたしは言語学に興味があったので、もう一度、勉強してみようかと考えたのです。ドイツの大学は授業料が無いですし、月々平均して六万円で生活できそうなので、アルバイトをすれば、それは可能だと思ったのです。そこで、ドイツ人の家庭を出て、アパートに映りました。さいわい、金・土・日曜日の週末は、ホテルのメイドとして働くこともできるようになりました。今、そのアパート暮らしがとても気に入っています」

「どんなところが？」

「そうですね。アパートには、わたしを含め六名の学生たちが共同生活をしています。各自が作りますが、お茶の時間などは皆と一緒によくコーヒーを飲みます。とにかく、皆よく喋ります。家族のこと、友人のこと、何でも。日本では一対一のときは、話も弾むけれど、それが数人になると、話しに詰まったりして、誰かが話についていけなくなってしまう場合がしばしばありました。多分そこには、一人ひとりの持っている興味や話題の狭さもあったのでしょうが。しかし、こちらの学生はとにかくよく話をします。そして、様々なことについて討論をします」

彼女はさらに続けた。

「同居している学生たちは、週末は親の家に帰るのですが、戻ってくると、お母さんの焼いたケーキやジャムを持ってきます。もちろん、彼女たちからクッキーの焼き方なども教わりました。それと、学期が終わると、彼らはよくパーティーを開きます」

私も合槌を打った。

「わたしも何人かのドイツ人学生とコンタクトを持っているけれど、彼らはパーティーが好きだね。それも夜更けまでして。でも、その気持ちはわかるよ。学期中はよく勉強しているからね」

「そうですね。勉強しないとついていけないようで、留年、中退する人が多くいます。自分で希望して大学に入ったのだから、自分の責任で卒業しなさいと教育されているようですね」

責任という語に、彼女は力を入れた。

「でも、彼らは責任を強制的なものとして捉えてはなく、自分でしたいことに勇氣を持ってやっていると、自然と責任が生じてくると思っっているのではないだろうか」

「そうなのでしょね。アメリカでもそれを感じました」

彼女は少し考えるような表情を示してから、再び話し出した。

「ドイツの大学生は卒業するのが遅いですね。子供持ちの学生をよく見かけました」

「日本と較べたらそうだろうね」

「彼らはエリートなのでしょね」

「そうですね。でも、大学にいかない人も各種の職業資格を取って、自分の道を進み、そのなかで幸せを見つけているよね。そこには、『人は人、自分は自分』という個の実現を目指した教育がされていると思うのだ。自分を他の人と置き替えることはせずに、自分は何をしたのかとの主体的に生きる姿勢をもっていれば、それが自立へと導いていくのだろうな」

美帆は肯きながら聴いていた。

「それと、ドイツの学生たちは、議論をすることが好きだよね」

「はい、その通りです」

「彼らは大学に入る前、学校の授業ではよく討論をして、自分の考えを言う訓練をしていると思うよ。たとえば、歴史の授業では、ナチ政府のことやユダヤ人の大虐殺なども、真正面から取り上げて、犯罪責任なども議論しているね」

「だからでしょうか。彼らは批判的精神が強いようにみえました。とにかく、ドイツの学生たちは、まわりを気にせずによく発言します。日本の学生とは違いますね」

「そうだね。ナチ政府の歴史を一人ひとりが強く批判するには、自分自身で考えなければ、できることもないし、その個が集まって民主主義の社会が形成され、未来が築かれていくのだろうか」

彼女は背いてから、後席で眠っているミヒヤエルに目を向けた。

「ミヒヤエル君の笑顔はすばらしいですね。こちらを和やかにしてくれます」

「彼は、十六歳だが、知的には二歳ぐらいでしょう。まだ、二語が続かないし。そのような彼から、学ぶことがあるね」

「学ぶ？」

「彼はあるがままの心で、何事もしているね。その姿を見て、わたしなどはいつもエゴの心で自分が動いているのを知り、反省させられるよ。とにかく、彼は透き通った、飾り気のない、純粋な心を持っているだろうな」

そう言ってから、さら続けた。

「彼が一番嫌っているのは、親の私たちが喧嘩することだろうな。喧嘩しているときは、怒りも出て、エゴも強くなっているし。でも、彼を通して、それを少しでもおさえようとはしているが。なかなか難しいな」

彼女は再びうしろを振り向き、ニッコリしてミヒヤエルを見た。その時、今まで眠っていた彼が目を覚まし、「みず みず」と声を出した。それを聴いた美帆が、半身ひねって彼にジュースを手渡しながら、

「暑くなったわね。もうすぐママに会えますからね」

と言い、再び歌を唄い出した。

チロルの山々が目の前に迫り出してきた。周りにはもう高原の明るいアルプとなっていた。再び山にやって来たのを肌で感じながら、運転を続けた。

車はオーストリアとスイスとイタリア三国を結ぶ峠を通過して、イタリア内に入った。

「急に暑くなりましたね。村の様子が今までとは違いますね」

「そうだね。でも、この南チロルは、第一次世界大戦末までオーストリアに所属していたこともあって、住民は今もドイツ語で話をしているよ。これから宿泊する山村も、ドイツ語とイタリア語両方が通用するし」

「だから、標識も二カ国なのですね。ここの歴史を調べてくればよかった」

「トランクのなかに、この地方の歴史が書かれた本があるから、あとで読んでみたら？」

「ええ、そうします」

山々の合間を縫うようにして、車は走り続けた。

時々、色鮮やかな帽子を被って半ズボンに半袖のシャツを身につけ、サイクリングを楽しんでるイタリア人を見かけるようになった。あと少しで、妻たちと待ち合わせた駅だ。

第六章 アルプスの風

妻たちと待ち合わせた駅に、三十分前に到着。二時間に一本のローカル電車が止まる小さい駅、改札口もなければ駅舎もない。ホームには、わずかに古びた二つの木のベンチがあるだけ。そこに腰かけて、二人が来るのを待った。

とにかく暑い。三十五度はあるだろう。太陽の強烈な日射しが地に反射して、陽炎が立ち昇り、二本の線路が歪んでいる。ホームの周りには草がぼうぼうと生い茂り、古く腐った木柵が今にも倒れそうに、斜めに寄り添うように立っていた。

額の汗をハンカチで拭っている美帆に、話しかけた。

「ここは日本の地とよく似ているね」

「わたしも、そう思っていたのです。わたしの田舎にも、このような景色がありました」

「ここで蝉の声が聞こえたら、まさに日本の地だよ」

「そうですね。そういえば、蝉の声を今までに耳にしませんでしたね」

「西ヨーロッパには、蝉はいないと聞いていますよ。こちらに住むようになって長くなるが、今までのミイーン ミイーンの声を一度も聞いたことがない。あの声を耳にすると、日本の夏すべてを想い出すのだが」

いつか蝉の鳴き声が聞こえる日本の夏を再び味わいたいと思いつつ、二人が来るのを待ち続けた。

日本と違い湿度がないので、ジリジリするような暑さではない。が、帽子を車の中に置いてきてしまったので、汗が額から滲み出てくるのだった。

時刻通り、三両編成の古い型の電車がガタンと音を立てて止まり、妻とウルリケがホームに降り立った。二人を見つけたミヒヤエルが、帽子を振って母のところへ駆け寄った。車内は相当蒸していたのだろう、二人とも湯上ったような顔だ。

私たちは、「暑い、アツイ」と言い合いながら目指す山村へ向かった。

二十分ほど運転をしていると、ステイフルスと記された標識が目に入った。そこを右折すると、乾草を積んだトラクターが前をゆっくりと走っていた。それを追い越すと、周りは緑の高原になった。と同時に、アルプの匂いが車内にプーンと漂ってきた。あと少しで、標高一三一一メートルのステイフルス村だ。これから滞在するところだ。

山の中腹の急傾斜に家々が張り付いたように密に建ち並び、七百名が住んでいるこの小さな村を、ある山岳雑誌の写真で観た時、こんなところでよく暮らしていけるものだと思ひ、ぜひ訪れてみたいと切望したのだ。それが叶ったわけである。

展望が開けたところで車を止め、皆と一緒に外に出た。前にはビインシュガオ谷が山の裾野に広く伸び、右には三九〇五メートルの南チロルの最高峰オエトララーが白い万年雪を被って聳え、左奥にはオーストリアの高峰が陽光を浴びながら白銀のように波打っていた。その景観に、運転の疲れが一気に吹き飛ばす思いとなった。

「まあ、すごい眺めですね。来てよかったですわ」

ミヒヤエルの隣にいた美帆が、感嘆の声を上げた。私たち五人は立ち尽くしながら、前に広がるアルプスの絶景に目をやり続けていた。

しばらくすると、シャツ一枚の美帆は寒さを感じ出したのか、車から黒の革ジャンパー

を持ち出して、それをまとった。山歩きには不似合いのジャンパーだったが、彼女はそれを身につけながら明るい光景に目を注いでいた。

これから一週間、宿泊するところを捜さなければならなかった。この小さな山村には観光案内所がないので、通りに歩いている村人に、休暇用貸住宅がどこにあるのかを訊ねることにした。

さいわい、三つの寝室と居間、それに台所とバスルームとバルコニー付きの宿を教えてくださいましたので、そこに投宿することになった。

このような貸住宅の存在を知らなかった美帆が、部屋内を見回しながら言った。

「家族で過ごすには、このような宿はいいですね。まるで貸別荘ですね」

「そうだね。ヨーロッパのどこの観光地にも、このような宿はかならずあるよ。たいていは、その地の観光案内所で斡旋してくれるが」

「宿泊代は、高いのですか」

「いや、ホテルに較べたらずっと安いよ。ここは一人、一日千五百円。少なくとも一週間は滞在して、自炊になるけれど。でも、地元のスーパーで買い物しながら村の人とも触れ合えるし、なによりもこのような宿だと、寛げてのんびりできるのがいいね」

「日本にもこのようなものがあれば、家族でゆったりと過ごせるでしょうね」

「私たち家族は、毎年アルプスに来て、このような休暇用貸住宅で過ごしているよ。いつも思うのだけど、とにかくいいのだな。住宅内には、一週間以上暮らしていくのに必要なものはすべて整っているし、まわりは緑の山々に囲まれ、空気は澄み、もうそれだけでうれしくなって、身も心もつい躍ってしまうね。どこを見ても、驚かされるのだよ。驚きのある時間が持てるのはいいね。自分を発見するようで」

「驚きのある時間ですか」

彼女は周囲の山々を眺めながら、日常を離れた解放された顔でゆっくりと肯いた。

夕食を済ませてから、私たちは村の周辺を散策するために外に出た。真夏の八時過ぎはまだ明るい。太陽が少しずつ山並みの彼方に沈もうとしていた。村のどの道も、小型の車一台がなんとか通れそうな狭さだ。それも坂道が多い。通りに村人の姿を見かけない。急傾斜に建てられたどの家々のバルコニーに、黄と赤のゼラニウムやペゴニアの花々が咲いていて、そこに柔らかな夕陽が差し込んでいた。

しばらく行くと、七十歳ぐらいの老人が家の前で手作り風のベンチに座ってパイプを気持ちよさそうに吹かしていた。妻がその人に声をかけた。

「夕食後のお休みですか」

「うん、そうだ」

二階の窓辺には、色鮮やかな花が輝くように咲いていた。

「きれいですね。手入れが大変なのではないですか」

「わしの村では庭を持てるだけの土地が敷地内にないので、せめてバルコニーに花を植えているのだ」

「いつごろから、ここに人が集まって来るようになったのですか」

「三、四百年前からだ。当時、ここは鉱山村だった。そのあと、百三十年前に大火事となって、家々は全焼してしまったことがあった」

それを聴き、驚きもしたが、密集して並び建つ家々を目にして納得もした。

どの坂道にもロープがかかっていた。お年寄りのためだ。それと冬になると、路面が凍り、それを手にして歩くからなのだろう。村中の至るところで目にする丸太で作られた大きな桶には、水が絶え間なく流れていた。牛や山羊が飲む泉水だ。ゆっくりと一時間ほど歩いてから宿に戻った。

窓から外を望むと、太陽が山奥に隠れ、夕焼けの空となっていた。それを眺めながら、皆に言った。

「このぶんだと明日も晴れるぞ。そしたら山歩きだ」

翌日、目が覚めてからバルコニーに出ると、遠くに映る山並みの峰々がくつきりと望めることができた。登山には最良の天気だ。

朝食を終えてから、八時半に宿を出た。山歩きは、天気が比較的安定している午前がよいので、早朝の出発となった。今日は第一日目なこともあって、足を慣らそうとして、村の背後にある山へ登ることにした。

朝の新鮮な空気を大きく吸い込み、それを吐き出すと、白い煙が尾を引くように上へ昇っていった。

ジグザグ道をしばらく登り続けたあと、立ち止まり、目を下に向けると、ステイフルス村が霧に包まれているのが見えた。そこに朝日が注いでいる姿は、まるで赤く膨らんだ大きな風船だ。

さらに山道を登ると、樅と松の樹林帯に入った。あたりは急に薄暗くなり、土と木の織りなす湿った大気となった。その中を私たちは、土からはみ出した根っこを山靴で踏みながらゆっくりと進んだ。上を仰ぐと、濃い緑色をした松葉の間から澄んだ青空がわずかに望め、足許に目を落とすと、薄緑の苔が地に盛り上がり、一面が青みどりとなっていた。神秘的な色だ。

薄暗い中を一時間ほど行くと、木と木の間から、太陽の光がキラッキラッと射し込みはじめた。あと少しで、この暗さから出るのだろうと思っていると、急に目の前が明るくなり出した。と、前方の山腹に赤桃色のアルペンローゼの花が帯状に連なり、その下には、色とりどりの高山植物が競ったように咲いているのが目に飛び込んできた。今までとはまったく違う色彩の世界に、目を疑った。

分岐点に出た。上に登れば、背丈五十センチほどの高さのところまで赤く咲いているアルペンローゼの群落。下へ降りれば、広い谷にゆるやかに流れる小川と緑の草原。両方とも、アルプ（高原）の匂いを漂わせていた。どちらへ行こうかと迷ったが、今日は初日だ、無理をせずに小川の方へ降りることにした。

周りには、登山者の姿をまったく見かけない。わずかに人の足跡が残る土道をゆっくりと進んだ。柔らかい草の上を踏みしめると、体が浮いたようになって、雲の上を歩いているような気分だ。数十メートル先には、放牧された牛たちが草を食んでいて、その牛たちが時々頭を振ると、カウベルの音色がカランカランと辺りに響き渡らせていた。さらに草原の中を進むと、三本の大きな松の樹が目に入った。ちょうど昼食にしようと思っていたところだったので、その木の下で休むことにした。

リュックサックからおにぎりを取り出して、頬張るようにして食べる私たち。山でのこの味は格別だ。ウルリケにとっては初めてのおにぎり。口に合うかと心配したが、「オイシイ、オイシイ」と言いながら口に入れていた。

昼食を済ませたあと、再び歩き出した。緩やかな傾斜の草原には、黄・赤・紫・白色の花が咲きこぼれ、甘酸っぱい香りが辺りに漂い、その上を色鮮やかな蝶が自由に飛び交っていた。ミヒヤエルと一緒に歩いていた美帆に声をかけた。

「様々な模様をした蝶が飛んでいるね。すごい数だ。それも二匹で交互しながら、一緒に花々の上を舞っているね」

「ええ、こんなに多くの蝶を見たことはありません」

「まさに今のこのときを逃さないように飛び、花の蜜を味わっているのだろうね。彼らが舞い踊る姿は、なんとも言えぬ華麗さがあるな」

「そうですね。ここは蝶の楽園ですね。高山植物の宝庫ですね」

色鮮やかな光景を見ながらの歩きとなった。妻とウルリケは、ミヒヤエルにドイツの野山の童謡歌を唄い出した。二人とも、以前、幼稚園に勤めたこともあってか、いい声だ。

さらに下って行くと、急傾斜で草を刈り、それを集めている七、八名の人に出逢った。農家の一家族なのだろう、小さな子供から老人までいた。切り取った草の香りが、辺り一面に漂い、それが自然と人との調和を醸し出しているのである。さらに宿に向けて歩き続けた。

昨日に続いて雲一つない青空の下、私たちは八時前に宿を出て、車に乗ってズルデン村（一九〇六m）へ向かった。

二十分ほど走ってから、車から降りて歩き出すと、樅と松の薄暗いジグザグ道になった。高度をグングンとかせぎながら登り続けていると、汗が額から滴り落ちてくるようになった。

一時間半ぐらいしただろうか、あたりが次第に明るくなり出した。それにつれて、広々とした谷間が目の前に現われ出した。そこに川が流れ、太陽の強い光が川面を眩しいくらいに照らしてキラキラと輝いていた。足が自然とそこへ向った。

しばらく行くと、妻が大きな岩の横に転がっていた古いカウベルを発見。それを彼女は、ミヒヤエルのベルトに付けた。と、彼はよろこんでそのベルを鳴らしながら歩き出した。すると、近くで草を食んでいた放牧の牛たちが、仲間がいるぞといった顔でミヒヤエルをじつと見つめ出した。横たわっていた牛たちも立ちあがって、不思議そうな顔を彼に向けてはじめた。彼は得意げにベルを鳴らしながら進んだ。

谷川に着くと、十一時が回っていたので、昼食を摂ることにした。

五人が一緒に座れそうなどころを見つけ、そこに腰かけた。目の前には、雪で覆われた四千メートル級の二つの頂きが聳えていた。落ち着いたどっしりとした山だ。その姿を眺めながら、握ってきたおにぎりを食べはじめた。

昼食後、私たちは柔らかい草の上にゴロツと体を横たえた。と、山の頂から吹き下ろす風が体の上を渡っていき、五メートル先に流れている水がサラサラと軽やかな音を立てているのが耳に入ってくるのだった。山の静寂のメロディーだ。ここが一体、どこののか、自分の存在さえも忘れてしまうほどとなった。目を閉じ続けた。

十分ほどすると、急に寒さを感じ出したので、顔に被せていた登山帽を取った。と、今までの抜けるような青空に、暗雲が張り出していた。これはいけないと思い、近くでまだ横になっていた四人に声をかけた。

「雨が降るかもしれないから、戻ることでしょう」

来た道を戻りはじめた。黒い色のジャンパーを身につけて歩いてきた美帆が、私に話しかけてきた。

「山歩きがこんなにも心躍るとは、今まで知りませんでした。この雄大なアルプスの景色、素晴らしいですね」

「とくに、この地域はいいね。ここにいて、山が私たちを歓迎してくれているのを感じるね」

「ええ、登山靴をはいて山歩きするのは初めてですが、山に迎え入れられたような気持ちになります」

「山の方で、ここでゆっくり心を癒してくださいと言っているみたいだね。大自然に包まれたような気持ちになるね。そうすると、何かホッとするね。安心したような気持ちになるな」

「そうですね」

「大自然の力ってすごいよ。こちらが謙虚になるからね」

彼女は、静かに肯いた。

「このジャンパーは彼のものなのです。彼は難民として暮らしています。思いやりがあつて、とても優しい人なのです。知り合ってからまだ一年も経っていませんが、もう数年も付き合っている人のように思えるのです。彼はチュービンゲン市内にあるマクドナルドで働いています。そこで知り合いました。とても積極的に生きている人です」

美帆はさらに続けた。

「ここでは、わたしはひとり暮らしです。彼といると、明日へ向かう力が湧いてくるのです。山に包まれての言葉を聞いて、つい彼のことを話したくなったのです」

「今回のこの山歩きに、彼を連れてくればよかったのに」

「難民の身なので、今住んでいる地域からは出られません。来たがっていたのですが」

「帰ったら、会ってみたいな」

「ええ、もちろん、紹介します」

彼女は、着ていた黒いジャンパーを両手で抱いた。

車を駐車したところまで戻ってくると、ちょうど雨が降り出してきた。さいわい、濡れずに済んだ。山の奥では、黒くなった雲の下、雷が盛んに鳴っている。山の午後の天気は荒れがちだ。

翌朝、目を覚ましてから窓をのぞくと、灰色の空。今にでも雨が降りそうな天候である。

雨に濡れての山行は避けようと思ひ、皆と話し合い、今日は一日中、部屋でゲームをしたり、葉書を書いたりして過ごすことになった。

明日の天気が良いなるのを期待して、私たちはベッドに入った。

翌日、目を覚ましてからカーテンを開けると、曇り空だ。が、ところどころに晴れ間が見えた。今日は標高二八〇〇メートルの高さを目指すので、この天気ではと迷ったが、思い切つて出発することにした。

二三〇〇メートルまでリフトに乗り、そこから歩き出した。

真夏なのだが、厚手のヤッケを身につけていないと、とても寒いくらいだ。足元の小さな花は数日前の咲き誇ったようなものではなく、哀愁と孤独を感じさせるような姿である。天気が悪いせいだろう。山道を一步一步踏みながら登った。

標高二六〇メートルまで来ると、白いものがパラついてきた。このくらいの雪だったら、平気だろうと思いつながら歩き続けていた。しかし、二十分ほど過ぎてても雪は止まずに、大粒となった。周りには登山者の姿がない。これから、まだ登らなければならない。私たちは雪の中を歩く準備をしていない。ミヒヤエルは山歩きには強いといっても、どこまで歩けるか。ここは迷うことなく、今来た道に戻ることにだと思った。ミヒヤエルと一緒に歩いてきた美帆に言った。

「学生時代から山登りをしているが、多くのことを体験したよ。そのなかでも、引き返す勇気の大切さを経験したことがあったよ。目的の頂上へ向かって皆と一緒に前へ登って行くが、歩くのは前だけでなく、うしろに引き返す進みもあることを学んだね」

「うしろに引き返す？」

美帆は頭を横に少し傾け、呟くようにして言った。それを見て、今まで誰にも話したことのない、私の苦い経験を口に出そうかどうか迷ったが、思い切った。

「大学時代、山登りなどをするクラブで活動するようになった。あれは、三年生の夏合宿のときだった。部員総数五十名と北海道の山へ行き、四パーティーに別れ、それぞれの山に登り出したのだ。そして、五日目のことだった。ある一つのパーティーの部員が転んで、足を骨折してしまい、地元のヘリコプターで病院に運ばれる大きな事故が起きたのだ。クラブのキャプテンという立場にいたわたしは、その事故を聞き知ったにも拘わらず、自分が引き連れていたパーティーはさらに山行を続けてしまったのだ。そうなのだよ、そのとき、わたしには部員一人ひとりを尊重するところが欠けていたのだよ。皆と一緒に山に登ったのだから、緊急事態が生じたときこそ、皆と一緒に山から下りなければならなかったのに。うしろに引き返す勇気というものが自分にはなかったのだよ」

さらに続けた。

「大学に戻ると、そのことが運動部の社会的問題になってしまい、キャプテンをやり続けていくことができなくなってしまった。自身、それが最善だと思った。自分の不甲斐なさを思った。加え、そのあとのサークルの建て直しと、下級生の育成をしなければならなかったのに、サークルに籍を置いたまま、同期の仲間を任せて、ヨーロッパに飛び出してしまったのだ。それからというもの、わたしはなんと自分勝手に、責任感に欠けた人間なのだろうと思いついた。しかし、このことがもて、今のわたしがいるのだと思うようになったね」

それを聴いた彼女は、少し立ち止まってから、冷たくなった自分の手に暖かい息を吹きかけ、ミヒヤエルを見ながら、

「ミヒヤエル君、それでは戻りましょうかと、言った。」

しばらく歩いていると、雪は小粒になった。美帆が話しかけてきた。

「先ほどの話を聴き、わたしも同じような経験をしました」

彼女が話すことに耳を傾けた。

「わたしは、大学時代に長くつきあっていた人がいて、結婚までも約束しました。でも、そうはなりませんでした。そのことは、車の中で話をしましたね。わたしはところが痛みが続く、アメリカへ逃げるように行き、ドイツでシャキールと出会い、あのような悲しみを再び陥らないように決心したのです」

それを聴き、美帆に言った。

「誰でも、過去からの苦しみの反省から自分の考えがつくられていくのだろうか」
「そうですね」

そう言うてから、彼女はミヒヤエルに日本の童謡を唄い出した。

しばらくすると、本格的な登山者の一パーティーと出逢った。その中の一人がミヒヤエルの歩く姿を見ながら、妻に声をかけた。

「息子さんですか。この高度で、まして雪が降るなかでよく歩きますね。凄い、たいしたものだ」

周りの人たちも同じようなことを言い、ミヒヤエルを見ながら手を叩いた。その彼は、「ママ、ママ」と声を出して、ニコニコ顔だ。毎年、山歩きをしているので、障がいのある彼でも、人並みに、いやそれ以上によく歩く。繰返しの体験は尊いものだ。

再びリフトのところへ戻ってくると、雪は止んで、雨が降りそうな気配である。そこで、私たちは直ぐにリフトで降りることにした。

宿に着いて一休みしてから、皆で村のレストランに行くことになった。明日はテュービンゲンに戻るようになっていたので、最後の夕食は外でしようと言うことになったのだった。

私たちはこの地方の料理であるカイザーシュマーレンを注文した。一口食べて、その美味しさに驚いた。小麦粉と卵とレーズン、それに松の実が入ったこの料理、「うまい」の一言だ。家に戻ったら、早速これを作ってみると、妻に大言した。ミヒヤエルたちも、「オイシイ、オイシイ」と声を上げながら口に入れていた。

食事が終りになりかけた頃、美帆が言った。

「テュービンゲンに戻ったら、ご家族を招待して、パキスタン料理をご馳走します。彼と一緒に作りますので」

私たちはよろこんだ。

南チロルの山登りから帰ってから、二週間が過ぎた。

美帆が住む学生アパートの門前に立って呼び鈴を鳴らすと、二人が広い庭を横切つて私たち三人のところに来た。

「こんにちワ、よく来てくださりました」

彼女の横には、背が高く、黒い髪で彫りが深い顔をしていた青年が立っていた。

「シャキールといいます。お目にかかれてうれしいです」

その青年と握手を交わしてから、二人に案内されて美帆の部屋に入った。二十平米ぐらいの広さの中に、机・椅子・小さな洋服ダンスが整然と並んであった。窓からは、大きな向日葵が何本も庭に咲いているのが見えた。その景色を眺めていると、シャキールが私たち家族に、

「パキスタン料理は油濃くって辛いのですが、今日は控えめにしました。ご家族の口に合えばよいのですが」

と言うて、炊事場へ料理を取りに行った。私と妻とミヒヤエルは、美帆に連れられて広い庭に出た。

テーブルを囲んでの夕食となった。

妻とミヒヤエルは美味しそうにパキスタン料理を口に入れていたが、私には辛く感じ、フオークはそう進まなかった。美帆は時々ミヒヤエルに顔を向けては、手を耳にあてるユニモアな仕草をし、彼はそれを見ては真似をしてよろこんでいた。

その賑やかな夕餉が済むと、妻がバックから南チロルで撮った写真を取り出して、美帆に手渡した。

「まあ、きれいに映っていますね。ここで、過ぎたのですね」

美帆はその写真一枚一枚を手に取りながら、隣にいた青年に山での出来事を話し出した。彼は肯きながら、それに耳を傾けていた。その彼に、美帆が言った。

「そのうち、このようなところにも、一緒に行くこともできるようになるから」

二人はお互いに何かを確信しているかのように見つめ合った。あつという間に二時間が過ぎ、帰る時刻になった。

家へ戻る車中、妻が私の横顔を見ながら言った。

「たのしかったわね。料理もおいしかったわ。それと、ミホの恋人のシャキール、感じのいい青年ね」

「そうだね。難民と聞いたので、消極的にこちらで暮らしているのではないかと思ったのだが、マクトナルドで仕事はしていると聞いたし、積極的に暮らしているように映ったね。好感の持てる青年だ。何か私たちでできることは協力していきたいね」

「そうね。時々二人を家に招きましようよ」

私たち家族は、彼と知り合ったことをよろこんだ。

それから一年后、美帆は自分の部屋で倒れてしまい、三ヶ月間の治療を終えてから日本へ帰国したのだった。

第七章 難民収容所

美帆が日本に帰国して、二ヶ月半が過ぎた。シャキールは朝から夕方まで、調理人として以前美帆がアルバイトをしていたホテルで働くようになった。それまではマクドナルドで一日四時間働いていたが、今は一日八時間の労働。ホテルの女主人が好意的に彼を雇ったのだ。そのホテルは私の家と目と鼻の先だったので、一日の仕事を終えたあと、彼はしばしば私の家に来るようになった。

彼が五日ぶりに来宅した。

「美帆の様子は、ここのとこどうなの？」

居間のソファアに座っている彼に、コーヒーを勧めながら訊いた。

「週に数回は、電話で話をしています。手紙もよくもらいます。左手で書いているので読みづらいこともありますが、元気でいますよ。ミホは電話が終わるころになると、いつも涙声になってしまいますが……」

妻も私の横で関心を示しながら聴いていた。

彼の話が終わったあと、美帆から二日前に届いた手紙について、彼に伝えようとした。

「東京の大病院に月一回通い、他の日は両親の家から近くのリハビリ・クリニックへ通っている」と綴ってあったね。一字一字丁寧に書かれてあったよ。その文字を読み、彼女の頑張っている姿が目に見えただね」

それを聴いた妻が、私とシャキールに顔を向けながら言った。

「大変なことよね。でも、彼女は若いから右半身マヒもリハビリで早く元に戻るような気がするわ」

彼女は、自分の友人もやはり脳卒中で倒れたが、若かったこともあって麻痺が早く回復したことを語った。シャキールは妻の話にそれを真剣な眼差しで聴き入っていた。そのあと、彼女が彼に二杯目のコーヒーを注ぎながら、美帆との意志の疎通はできているのかと訊いた。

「ミホはまだ言語障害があるので難しいときもあります。とくに、電話だとわかりづらいです。でも、意志の疎通に困るほどではありません」

「日本への電話代は、高いでしょう。そう長くは話せないのではないの？」

「はい、でも、今はそれなりの収入がありますから」

「この電話を、いつでも使っているのよ」

「ありがとうございます。ボクは考えたのです。これからは、テープを交換していきましょう。テープだとミホの言いたいことを数分間でも待っていられるし、それに一時間も彼女と向き合っていられるので」

「それはいい考えね」

妻は再度電話を使ってもよいことを勧めた。しかし、彼は今まで一度も私の家の電話を使用したことがなかった。謙遜と誇りを持ち合わせているシャキールだった。その彼が、どのようなところで暮らしているのかを知りたくなった。

二年前の一年間だけで、四十四万人の難民がやって来たというドイツだった。これはすごい数だった。彼らがドイツに来る理由は、戦後ドイツはナチの歴史的反省から、政治に

迫害されている外国人を難民として受け入れる義務があると、ドイツ基本法で定めてあるからだ。それと、難民を対象とする高度な難民保障制度があるからでもあった。

人口八万人強のチュービンゲンでも、数百名近くの難民がいた。彼らのことが地元の新聞に載らない日はないくらいだった。そのようなこともあって、シャキールの場合はどうなのかと知りたくなった。

「君は難民として三年以上、ドイツで暮らしているが、辛いことも多いだろうね」

今まで話をしてきた彼が、急に視線を下に落として黙った。触れてはいけないことを訊いてしまったのかと一瞬、思った。しかし、彼と交流を続ける中で、彼をもっとよく知りたいという欲求があった。

シャキールは真顔になって、硬くなった表情で語句を強めながら言った。

「それは、いくつもあります。とくに、毎回それをやられると、いやになってしまうことがあるのです。それというのは、月に二回ほどボクたちが眠っている真夜中に警察官が予告なしに来て、ボクたちの身分証明証を調べ、コントロールすることなのです。ボクたちは決して囚人ではないのに」

その姿から、それがいかに辛いかが窺えた。

「それは酷いわね。寝ている最中に」

妻が同調した声を出した。

「はい、目新しい人物がまぎれ込んでないかのコントロールなのです。ボクたち難民がどのようなところで暮らしているのか、知っていますか。もし関心があるなら、ボクが住んでいるところに来てみてはどうですか」

私と妻を交互に見ながら、訊いた。

「うん、君の住んでいるところを見たいな」

そう返事をする、彼は私たちを招待してくれた。妻は仕事で行かれないと言った。

「それでは、来週の木曜日、ホテルの仕事が休みなので遊びに来てください。そのとき、またパキスタン料理を作りますから。こんどは辛いものにしめますので」

シャキールが暮らしているところへ訪れる日になった。

チュービンゲンから電車で十五分ほど走ったメツチンゲンの駅で降りると、彼が手を振ってホームの真ん中に立っていた。

駅舎から歩き出すと、彼が説明をはじめた。

「自分が住んでいるところには、約五十名の男性がいます。食事はそれぞれが作り、一室にベッドが二つ置いてあります。ボクはアフガニスタン人のチャンドラと一緒にです。彼はとても働き者で、ボクと同様に毎日仕事をしています。とても気が合うのです」

冬の曇っている空の下を十分ほど歩いて行くと、広い野原に簡易コンテナで造られた建物が見え出した。難民たちが暮らしているところだ。

建物内に入ると、独特の臭いが鼻に突いた。男所帯、それも二十代、三十代の人が多く、彼らの体臭と料理の油がしみこんだ臭いだ。台所とシャワー室に多くの落書きがされていて、壁の一部に穴があいていた。

シャキールの部屋に入ると、十六平方メートルはあるだろう室内に、簡素なベッドが二つ、それに小さなダンスとテレビが置いてあった。室内は簡単な熱風機で暖かかったが、

空気が悪いように思えた。同室のチャンドラと挨拶を交わしたあと、椅子に座った。シャキールは、料理を作るために部屋から出て行った。

チャンドラに話しかけた。

「ドイツに住むようになって、どのくらいの年月が過ぎたの？」

「五年になるな」

パキスタン人のシャキールと同様に肌の色は濃く、彫りの深い顔だ。シャキールよりも、十歳以上は年上だろう。何か一種独特の風貌が漂っていた。

「五年前からずっとここに？」

「いや、ここには二年前から住んでいる。前にいたところでは仕事ができなかったが、ここでは働くこともできて、活動できるのがうれしいのだ」

「活動というと？」

「政治的活動で、自分は今もアフガニスタン警察から追われているのだ」

難民には、本国の迫害や危険を避けるために他国へ逃れ、移住する政治的難民と戦争や貧困による経済難民がいるが、彼は政治的難民だろう。姿勢を正して静かに話す彼に、興味を持った。

「アフガニスタンでどのような活動をして、警察から追われるようになったの？」

彼は最初話すのを躊躇うような身振りをしたが、こちらが関心を持ったのを感じ取ったのか、少し間をおいてから話し出した。

「自分は大きな町に住み、学生運動の代表として、政府に反対する運動をしていた。しかし、警察によって逮捕されてしまい、一ヶ月間留置され、腕を一本折られ、痛みのある傷の上に唐辛子の粉をぬられての拷問を受けた」

五年間のドイツ滞在にしては、流暢なドイツ語だ。それも文法通りだ。

「留置所から出たあと、再び抗議運動をして、また逮捕されてしまった。そして再び拷問を受け、裸にされて打たれ、両腕が脱臼してしまった」

彼は、その両腕を押さえた。

「それから三週間後、家族と友人たちが保釈金を積んでくれたお蔭で、自分と仲間一人は留置所を出ることができた。しかし、その一日後、その仲間は警察官によって再び連れ去られてしまい、町外れのところで射殺されてしまった」

熱っぽく語るにつれて、チャンドラの話すテンポが速くなった。

「自分もそのような運命になることを避けるために、町から姿を消し、親と学生連合会の援助で偽装のパスポートを作ってもらい、アフガニスタンから脱出して、プラハを経て、なんとかドイツ国に足を踏み入れたのだ」

ちょうどその時、シャキールが料理鍋を持って部屋に入ってきた。その彼に、チャンドラのアフガニスタンでの活動、それにプラハを経てドイツへ難民として申請したなどの話を聴いていたと話すと、彼は小さな木机に並んだ皿に料理を盛りながら語り出した。

「チャンドラはまったくの政治的難民なのです。ボクの場合、高校卒業直前に父が病気で亡くなり、家の家計は厳しくなって大学に入学することができなくなりました。そして、町工場で働くようになったのです。また、ボクを生んでくれた母も織物工場で働くようになり、それから三年が過ぎたころ、家の家計を助けようとして、またパキスタンにいても希望がないように思えたので、ヨーロッパに行つて、いつか手に職を持ち、それで

生活をしていこうと決心したのです。だから、経済難民でしょう」

「そうだったのか。たしか、君はパキスタンを発つて、三ヶ月経て、やっとドイツに入国したと言ったよね」

「ええ、そうです。ここにいる五十名の男たちは、皆多かれ少なかれ危険を冒しています。ボクの知人の何人かは、ヨーロッパにたどり着く前に、警官の手によって連れ戻されてしまいました」

シャキールはそう話をしてから、手作りの料理を、「どうぞ」と私に勧めた。以前食べた料理と同様に辛いだらうと想像しながら口に入れた。

「辛いね。いい味だ」

「今回は唐辛子と胡椒を入れずに作りました」

ニッコリした顔で言った。狭い部屋を見回すと、ベッドの横の小さな木棚に、ドイツ語テキスト集が何冊も並んであった。二人とも今は流暢にドイツ語を話すが、よく勉強したからなのだろうと思った。

「君たち二人とも毎日仕事をしているが、ここにいる人たちのほとんどはそうなの？」

「いえ、仕事をしているのは数人だけで、残りの人はしていません。仕事をしようとしても見つからないのです。さいわい、ボクたちは働く場を見つけましたが」

「仕事をしていない人は経済的にはどうしているの？ ドイツ当局からお金をもらって生活していると思うけれど」

「一人一ヶ月二万四千円の現金をもらい、それが食費などの一ヶ月分の生活費になります。ただし、この住居費は無料です。しかし、ボクたちのように働いている人は、国からは一切お金はもらわずに、この住居費も自分の収入から出しています。非常に安いですけど。ここにあるテレビとラジオも、ボクたち二人がお金を出しあつて買いました」

シャキールは小さなテレビを指差した。今度は、チャンドラが話し出した。

「自分たちはここを出てもよいのだが、ここは住居費が非常に安い。それと、ここにいと、難民としての連帯性というものが生まれてきて、気持ちが悪く着くのだ。それに、同国人も多くいるし。自分たちのように今、置かれている状況のなかでは、仲間との繋がりがとても大切なのだ」

一人でいる身の苦しさから、この言葉が出てきたのだと思った。私自身を振り返ってみても、毎日が生き生きとしたものとなっている場合は、周りの人との繋がりによるこびを見つければ、そこに明日への希望が湧いていたのだから。パキスタン人のシャキールも、アフガニスタン人のチャンドラもこの室で連帯しながら、明日を希望しつつ暮らし、自分の存在を見出しているに違いない。

「この部屋に入る途中、廊下に受話器を見かけたのだが、皆さん自国へよく電話するの？」
チャンドラに訊いた。

「自国の家族へ電話すると、料金は高く、そう頻繁にはかけられない。でも、家族のことは気になるので、かける人もいる。それでも、シャキールのように、パキスタンの家族と日本の恋人にしばしばかけるほどではないが」

チャンドラはシャキールのほうを見て、ニッコリした。

シャキールが話し出した。

「ボクもチャンドラもそうですが、ここで働き、家族に仕送りしているのです。とくに、

ボクは長男で、家には一人の弟と一人の妹がいます。それに、母が違う三人のきょうだいがいて、彼らに送金しています。でも、今は少し貯金するようにもなりました。わずかですが」

それを聴き、自分が若い頃に経験した、ヨーロッパとアメリカの滞在について話した。「状況はまったく違ったが、一年近くヨーロッパで暮らしたことがあった。そのとき、やはりここドイツで皿洗いをしたり、木工所で働いたりして暮らしていた。リュックをかけたの渡り鳥のような生活だったから、一人でいる時間が多かった。ある日、スペインに行ったときのことだった。以前レストランと一緒に働いていた人とマドリッドのユースで再び会ったときはうれしかったね。同じようなことしてお互い生きているのだと思い、お互いの心が通い合ったことがあったよ。仲間意識みたいなものが生じ、人と一緒にいるありがたさを知ったね」

二人とも、私の目を凝視しながら聴いていた。私たちの会話は生き生きしたものになっていた。

時計を見ると、もう帰らなければならない時刻。チャンドラと別れの握手をしてから、部屋から出た。

家に帰る電車の中で思った。彼らの苦悩に共感した一日だった。シャキールと接しながら、責任を持って彼を見守ってこうと。

それから三日した午後のこと、あずき色とオレンジ色の布をまとったドライ・ラマー四世をテュービンゲンの通りで見かけた。二人のお供を連れて、教会前の広場を柔和な顔をしながら、ゆっくりとした足取りで大股に歩いていた。その姿は一種独特で、目に入ってくる光景をいかにもたのしんでいるかのようなでもあった。

その姿に魅せられたこともあって、翌日街の図書館に行き、彼が著した本を数冊借りて読みふけた。その中で、ドライ・ラマーは次のようなことを書いていた。

「人や生き物にとって、最も大切なものはいのちです。そのいのちを、傷つけるようなことをしてはいけません。暴力によっての問題解決は一時的なもので、決定的で長期的な解決には決してなりません。むしろ、次から次へと新しい問題が生じてきます。中国が一九五〇年にチベットに侵入し、それに対してチベット人が行った五〇年代の暴力運動は、自殺的行為でもありました」

さらに続いた。

「わたしにとつての敵対者は、まさにわたしの真の友人なのです。それは、他者への尊重と寛容とをさらに強く働きかける試金石なのです。だから、敵対者（友人）でも、憎むべきではないし、その人に尊重と感謝でもって接するべきなのです。現に、わたしは中国の文化を尊いものと思うし、私たちはお互いに隣人として深く学ぶことが大切なのです。わたしは中国人を尊敬しているし、敵とは思っていません」

彼はさかんに相互依存のことを記していた。

「人間はお互いにすべて依存しながら生きています。世界は一つの家族なのであって、そのメンバーのなかには小さい人や少数民族や小さな国もあれば、大きな人や大民族や大きな国もあります。それらは一つに結ばれ、平和で幸福に暮らすことが必要です。それには、お互いが寛容とハーモニーの精神とを持って尊重し合うことです。世界を全体としてみるべきです。なぜなら、すべての部分は、お互いに影響しあっているからです」

これを読み、亡命者のドライ・ラマは過酷な運命を背負いながらも、つねに明るい笑みを浮かべて、六百万人以上のチベット人に希望を与えているように思えたのだった。

彼自身、インドへ亡命した政治的難民でもある。人間は結合をなすことによって、生き働いているのだ。人間は孤立したものでなく、そのことを自覚することが大切なのだとドライ・ラマは体で示しているのだろう。

シャキールが住んでいる難民収容所に訪れてから、二ヶ月が過ぎた。ホテルでの仕事が終わると、彼は私の家に二日に一度の割で来宅し、美帆のことを語っていった。一人でゆっくりと歩けるようになったとか、テープでの交換や電話での内容などでも、ドイツ語で通じるようにもなったとかを話した。そのことを語る時の彼の顔は、生き生きしていた。ところが、ここ一週間以上も訪れて来ない。風邪でも引いているのではないかと思っていた矢先、彼から電話がかかってきた。

「どうした？　しばらく家にこないから、病気でもしているのかと思っていたぞ」

「いいえ、違うのです。今、ボクの身にあることが生じたのです。誰にも言わずに自分ひとりで解決しようとしたのですが、どうもそれが」

いつもの明るい声と違い、おずおずした声だ。

「話を聞いてくれますか」

「もちろん。で、何が起こった？」

「電話では言えませんが、明日、仕事が終わってから行きます」

彼が来宅するのを待った。公認されていない難民の身なので、自国に強制送還されるようなことになったのか、それとも何かの事件に巻き込まれたのかと想像した。

シャキールはいつもよりも早く家にやって来た。疲れた表情を浮かべながらソファアに腰かけた。

「十日ぶりに会うね。少しやつれたように見えるが」

「そんなことはありません。ただ、十日前にある女性から、一通の手紙をもらったのです。彼が何を言うのか耳を立てた。」

「ボクがドイツ国に入ったところ、市民大学でドイツ語を習う傍ら、昼間はある農家で働いていた時期がありました。そのとき、その農家の娘と知り合いになりました。ボクより年下で、彼女からドイツ語をよく習っていました。その彼女が、ボクに次第に好意を持つようになつたのです。もちろん、ミホと知り合う前のことでした」

彼の顔を見ながら聴き続けた。

「彼女は手紙のなかで、自分の家で働く人を一人募集しているから、ボクに来ないかと書いてきました。そして、一週間後、ボクのところへ直接来るからと記されてありました。しかし、それは今のボクには無理なので、すぐに断りの手紙を送りました」

「断つた理由も書いたの？」

彼は黙つたまま、自分の手を見つめていた。その表情からして、話さなかったことを読み取ることができた。彼がしゃべり出すのを待った。

「そしたら三日後、彼女からまた手紙が届いたのです。そこには、いまだボクに好意を持っていると書かれてありました」

彼が次に何を言うのかに、耳を傾けた。

「最初に断りの手紙を書いたとき、ミホのことを記せばよかったのです」

彼の声が次第に低くなり出した。

「そうか。美帆はあの右半身マヒの体で、君との結婚を考えて、自分の住む市に結婚届を出す準備をしているぞ」

それを聴いた彼は、いつもの声に戻った。

「そうです。二日前のミホから届いた手紙のなかに、婚姻届と宣言書が入っていました。そこに、ボクは署名をし、身分証明書も送りました。彼女はボクとの結婚、ボクが日本に住めるように働きかけています」

「美帆は一生懸命だぞ。だったら、なおさらその彼女に、美帆のことを伝えればよかったのに」

彼は何も答えないで黙っていた。強く言い過ぎたかなと思った。自分が彼の立場だったら、どうだろうかと思った。美帆との結婚、日本滞在、それに彼女の病気がどうなるかわからない中で、働く場があつて、その農家の娘が今も好意を抱いていると知ったら、まだいろいろな経験を積んでいない、若い自分の心はひよつとしたら揺れ動いたかもしれない。今でこそ、いくつかの経験、特に学生時代の出来事から、生きて行くうえで何が大切かを学んだ自分だ。そう思った時、黙らざるを得なかった。が、これだけは彼にどうしても伝えなかった。

「彼女も君もお互いに相手を思いやっていることは、今までの君たちの行動を見てるとわかるよ。君たちはお互い相手がしっかりと明日へ向けて生きて行くようにとの思いでやってきているよね」

「はい、そうです」

「だったら」

そう言ったあと、以前彼が私にふと洩らしたことが浮かんできた。そのことに触れようかどうかと迷ったが、思い切った。

「たしか、以前君は言ったよね。『僕には腹違いのきょうだいがいて一緒に暮らしていた』と」

「はい、イスラム社会では、一夫多妻が認められていますので」

そう言った彼の顔が、一瞬ハツとなった。私たちの間に少し沈黙が流れた。

彼が言い出した。

「でも、ミヒヤエル君を含めた三人の家族を見て、ボクたちの社会で認めている一夫多妻に疑問を感じ出したのです。しあわせとは、どういうことを考えさせてくれました」

それを聴き、彼を正視して言った。

「お互いが一体になるのは難しいが、常に二人の仲を深く意識して、相手のことを思いやりながら、ハウスマンとして暮らしていこうと心がけているところは、わたしにはあるね。これしか自分にはないのだし、ここで尻込みしたら、ニセの生き方になってしまうと思っ

ているからね」

彼は黙って聴いていた。と、その時、玄関口から自転車の置く音が聞こえてきた。妻が仕事から戻ってきたのだ。黙っていた彼がはつきりした声を出した。

「彼女に、手紙で必要ならば電話でミホとの関係を知らせませす」

妻が部屋に入ってきた。

「あら、シャキール、来ていたの。しばらく会っていなかったけれど、元気だったのでしょ？」

「ええ、ここで話をしていると、元気になってきました」

笑顔を浮かべた彼に、妻が訊いた。

「夕食を摂っていったら？」

「ええ、いつもありますがございます。御馳走になります」

彼はニッコリしながら答えた。

それから数日して、コック用の白い帽子を被ったシャキールと、ホテルの前でばったりと出逢った。私を見るや、彼は晴れ晴れとした顔で言った。

「電話でミホのことを彼女に伝えました。そしたら、わかってくれました」

それを聴き、胸を撫で下ろした。と同時に、このことを通して、二人の絆がさらに深くなったに違いないと思った。シャキールの明るい声が、それを物語っていた。

厳しい寒さの冬が過ぎて、花が競ったように咲く五月となった。シャキールを誘って、小高い丘の上に立つ小さな教会へ向かった。ミヒヤエルも一緒である。

テュービンゲンから車で十分走り、丘の麓で車を止めてから歩きはじめた。頂上までの三十分ほどの道は、私たち家族がよく散歩するコースでもあった。道の両側には、木全体を被うようにしてりんごの花が咲いていた。シャキールがそれらを見ながら言った。

「木全体が花束のようですね。今まで、このような光景を見たことがありません」

「この景色は、まさにドイツの牧歌的な田園風景だね。春はいいね。体全体でよるこべるからね」

暖かい陽を浴びながら、私たちは白く赤く咲いているりんごとプラムの花を目にしながら歩き続けた。

しばらくすると、シャキールが話し出した。

「数日前、ミホと電話で話したときに、彼女が言いました。婚姻届けに必要な書類をすべて揃えて、市役所に提出しましたと」

「そうか。と言うことは、結婚したことになるね」

「ところが、パキスタン人との婚姻届けはすぐには受理されず、一ヶ月から三ヶ月間は待たなければならぬそうですね」

そう言うてから、さらに続けた。

「受理されて初めて結婚は認められ、ボクはミホの夫になります。そこで、もし不受理となると、結婚は認められません。でも、彼女が話すには、ほとんどの人は受理されるそうですと」

「そうだよね。別に反対する理由もないのだから」

そうは言ったが、難民の身なので難しさも伴うかも知れないと思った。彼は続けた。

「ミホは婚姻届けを出したあと、地方法務局から呼ばれ、ボクとの関係及び『氏』について問われたようです。パキスタンの氏制度のことです」

「そのようなことを、彼女一人でやっているの？」

「そうです。でも、ミホと同じような立場の人たちを支えている市民グループがあって、その人たちから、いろいろなアドバイスをもらっているとも言っていました」

「そうすると、彼女は、今はその婚姻届けの受理を待っている段階だね」

「はい、そうです。ミホ一人でやってくれて、自分は何もできなくて…」

彼の声が次第に低くなり出した。その彼に、以前から計画していたことを話した。

「来月の中旬から、ミヒヤエルと日本へ行くことにしたよ」

「二人だけですか。奥さんは？」

「彼女は、勤めている駅ミツシヨンの全国大会があつて、そこでテュービンゲンの駅での仕事内容について発表するので、一緒に行かれないのだよ。残念だが」

「そうなのですか」

「父と息子との二週間半の日本旅も、またいいものだろう。もちろん、美帆と会うのもたのしみだが」

「ボクも飛んで行きたい」

シャキールは思いきり晴れた青空を見ながら、前を歩いているミヒヤエルに近づき、飛行機の真似をした。ミヒヤエルも両手を横に伸ばして走り出した。

丘の頂上まであとわずかとなった。

「あそこからの眺めは、まわりには遮るものもないので、それは素晴らしいぞ」
私たちは頂上へ向かった。

第八章 希望

機内の小さな窓から下をのぞくと、いくつもの川が濃い緑で覆われた山々の合間を縫うように走っているのがくつきりと見える。あの山並みはどこだろう。越後の山だろうか、谷川岳付近だろうか。小さな模型のように広がっている山域を眺め続けた。

浜松で生まれ、七歳まで日本に住んでいたミヒヤエル。イヤホンに当てる、彼の好きな日本の童謡のメロディーを聞いていた。これから、父と子のリュックを背負っての旅がはじまるのだった。

成田に着くと、小雨が降っていて、止みそうにない。傘を指しながら、今夜宿泊する千葉の妹の家へ向かった。

浜松で生まれ、七年間日本に住んでいたミヒヤエル。その彼が来るこのことで、叔母や叔父などが集まってくれていた。その人たちとの夕餉である。テーブルの真ん中には、にぎり寿司が置いてあり、それを食べながらの歓談となった。

久しぶりに口にする酢の効いたご飯と魚類の溶け合った味、舌と胃が悦びあっているのがわかる。ミヒヤエルは周りの人たちの顔と名前をまったく忘れていたが、「ウン、ウン」と肯きながら、会話の輪に加わっていた。

ふと気がつくとき、夜中の十二時過ぎである。明日は、ミヒヤエルが一歳から七歳まで暮らした地へ行くことになっている。欠伸をはじめた彼を連れて、隣の部屋に行き、畳に敷かれていた布団に潜り込んだ。昔を思い出すこの感触。隣のミヒヤエルはもう寝入っていた。柱時計の音を耳にしながら、私も眠りについた。

翌日、皆と一緒に朝食を摂ったのち、二人ともリュックを背負って妹の家を出て、列車を三回ほど乗り継ぎして土浦駅に到着。改札口を出ると、友人が待っていてくれた。これから彼の家へ訪れ、ここで六年間お世話になった人たちとの再会である。

私たちが広い部屋に入ると、寄り集まってくれた二十名ぐらいの人たちが、皆驚きの声を上げた。当時のモヤシのようなひよろりとした体つきから、今はがっしりした体格となっていたミヒヤエルを見たからだ。日本語をまったく忘れてしまった彼だったが、終始笑顔を浮かべながら、会う人と握手を交わし、たのしそうに振る舞っていた。その姿を目にして、ここまでよく育ったとの思いで、私の顔からは自然と笑みが零れるのだった。

翌日、私たち二人は以前住んでいたところに行った。左右には田圃が見える。その中をしばらく歩いてみると、あずき色をしたトタン屋根の簡易木造貸住宅が今も六棟建ち並んでいるのが目に入った。あの左端の一番奥の家で、私たち三人は暮らしていたのだ。

玄関前に立つと、四歳でやっとひとり歩きができたミヒヤエルの姿が浮かんでくる。もう十五年前のことだ。

周囲の風景は、ほとんど変わっていない。家の裏にあったピーナッツ畑は今も昔のままだ。あの周辺を、私たち家族はよく散歩をしていたのだ。当時、ミヒヤエルはあそぶちゃんと呼ばれ、隣の家族に同年齢のまなぶちゃんがいて、暑い夏の日には小さなビニールプールを家の前に置いて、二人一緒にその中で水遊びをしていたものだった。当時のことが次々と思い出されてくるのだった。

その土浦に三日間滞在してから、旅に必要なものが詰まっているリュックを担いで、美

帆が住んでいる街へ向った。

列車の座席に座っていると、半年ぶりに会う彼女の体はどのくらい良くなってきたのだろうか、言語の障害はどの程度回復してきているのだろうか、シャキールとの婚姻届けは受理されたのだろうか、などのことが浮かんできるとのだった。

十二時前に、待ち合わせた駅に到着。改札口を出ると、九ヶ月前に会った美帆の父親と母親が私たちを待っていてくれた。

「よく来てくれました」

父親が頭を深々と下げた。私もお辞儀をした。ミヒヤエルも、私に真似て頭を下げた。

「その節は、本当にありがとうございます。お蔭さまで、娘は回復してきております」
母親が私の目を見てから、恭しく礼をした。

「重たくありませんか」

父親が私たちの大きなリュックを目にしながら訊いた。

「いえ、そうでもありません」

「そうですか。息子さんもよく担ぎますね」

「彼はリュックを背負うことには慣れていきますので」

父親はミヒヤエルを見てニッコリした。

「娘はまだ来ていません。妹と一緒に来ることになっています。駅前広場で娘たちと会うことになっているので、そこへ行きましょう」

私たち四人が駅前広場に出ると、五月の陽をいっぱい浴びながら、鮮やかな色をしたつつじの花が咲いていた。頬を撫でる風がとても心地良い。

約束した時間になったのであたりに目を向けた。と、美帆が階段を妹のあゆみと並ぶようにして降りてくるのが見えた。ゆっくりと右足をいくらか引き摺るようにして、こちらへ向ってくる。私とミヒヤエルは、彼女のほうへ歩み寄った。

「こんにちは」

「こんにちは」

はにかむような笑顔を浮かべながら、彼女がお辞儀をした。

髪は伸び、九ヶ月前の頭部手術をした傷跡は髪の毛で覆われ、ドイツを発った時の蒼白な顔とは違って、頬がふっくらとして赤みを帯びていた。その彼女がミヒヤエルと握手を交わし、南チロールに行った時によくしていた仕草、両耳に指をあててブラブラする動作をした。と、ミヒヤエルも同じ動作をして、二人とも笑い合った。

私たち六人はタクシー二台に分乗して、十分ほど走ったところのレストランへ向かった。テーブルを囲んでの昼食となった。美帆は、毎日どのように暮らしをしているかを語りはじめた。それが終わると、父親とあゆみがテュービンゲンで過ごした日々のことを話し出した。

食事をしながらの一時間半の歓談が過ぎた。父親が立ち上がり、改まった口調で言った。

「とにかく、ご家族の方々、シャキールさん、それに美帆の友人たちや知人たちのお蔭で、娘はこのようにひとりでも歩けるようになりました。ありがとうございます。ドイツに帰りましたら、くれぐれも皆さんによりしくお伝えください」

私も立ち上がった。

「はい、ドイツに戻ったら、彼女の今の様子について皆に伝えます。きっと、皆よろこぶ

でしょう。それを伝えることができるのをうれしく思います。これも娘さんが毎日の生活のなかで、精一杯取り組んでいたからだと思います」

母親も改まった声を出した。
「そう言ってくださるとありがたいです。娘がさらに良くなっていくように見守っていきまます」

両親は私に深々とお辞儀をしてから、レストランをあとにした。残った私たちは、食後のデザートにコーヒーとプリンを注文した。

「大分良くなってきたようだね」

前に座っている彼女の顔を見ながらそう言い、シャキールのことを話そうとした。と、美帆が椅子の上に大事そうに置いてあったバックから一枚の紙を取りはじめた。が、右手がまだ麻痺しているようで、それをなかなか引き出せないでいた。

やっと抜き出した。

「どうぞ、これを見てください。ここに、シャキールの名前が書かれています」
急に明るくなった顔で、うれしそうに言った。

「これは、戸籍謄本ではないか！」

手に持った謄本には、彼女とシャキールの名前が記されていた。

「先日、やつとのことで、婚姻届けが受理されたのです」

「と言うことは、この謄本に記されているように、二人は結婚したことになるのだね」

「ええ、そうです」

彼女の目は輝いていた。

「それは、おめでどう。とうとう夫婦になったのだ。良かった！ 本当に良かった！」

心底声を高くして言った。

あゆみが、ここに至るまでに姉が何度も法務局に足を運んだことを語りはじめた。それを聴き終えてから、美帆の目を見た。

「そうすると、シャキールはもう夫なのだから、ドイツから彼を呼べるね」

「いいえ、それが、そうは簡単にいかないのです」

彼女は、少しがっかりした低い声で応えた。あゆみが話し出した。

「姉は二日前、東京入国管理局へ行き、シャキールの在留資格認定証明書を申請したのです。私も一緒でした。そこで姉はひとり係員に呼ばれ、いろいろな質問を受けたようです。申請してから一年以上も待っている人の話も聞かされ、姉の場合は、不交付となる可能性が大きいとも告げられたそうなのです」

それを聴き、美帆に訊いた。

「それは、シャキールがパキスタンからの難民だから？」

「ええ、そういうことだと思います。係の人は、わたしとシャキールの仲を何か疑っているようなのです」

隣に座っていたあゆみが姉の顔を見ながら、憤慨した声で、

「姉は、嫌な思いをそこでしたようなのです」

と、言った。美帆が語り出した。

「でも、わたしは入管からの返事を待ちます。あと数ヶ月、いや一年以上かかっても、シャキールの在留が交付となることを信じて待ちます。不交付の返事となったら、交付にな

るまで何度でも入国管理局へ通い続けます」

信じると語句を強めて言う彼女の顔は、紅潮していた。

「そうだよね。不交付になる理由はないし、シャキールはもう夫となっているのだから」
そうは言ったが、ドイツで難民の身である彼が、法的に日本へ直接行けるだろうかとの疑問が頭の中を駆け巡った。しかし、美帆と面と向かって話をしていると、並々ならぬ彼女のシャキールを思う心に打たれ、彼が日本に来て、美帆と一緒に暮らすことができると思える気持になるのだった。

別れの時刻までにはまだいくらか時間があつたので、彼女の体の具合について知ろうとした。

「大分良くなつてきて、今はひとりでも歩けます。ただ、階段の昇り降りにはすこし時間がかかりますが、リハビリの先生によると、週二、三日の簡単な仕事ならできると言ってくれました。そこで、わたしは子供が好きなので、障がいのある子供たちの幼稚園で働いてみようと思つています。先生もそれはいい考えだと賛成してくれました」

「ほう、障がいのある子供たちの幼稚園で」

「ええ、今まではそのようなことを考えたことはなかったのですが、ミヒヤエル君と知り合い、そして今回の病気で、自分に与えられたのは、福祉の仕事のように思えてきたのです」

彼女は、二つ目のプリンを食べ終えたミヒヤエルを見て、また両手を耳にあてブラブラする動作をした。それを目にしたミヒヤエルも同じ仕草をして、二人で笑い合った。笑いは、未来に希望をもたらしてくれるかのように思えるのだった。

壁にかかっている時計に目を向けると、もう三時半が回つていた。今晚の九時までには、ミヒヤエルが生まれた浜松に着きたい。急いでシャキールが、どのようにして毎日暮らしているのかを伝えた。二人とも、「そうなのですか」と何度も言いながら聴いていた。

別れの時刻となつた。テュービンゲンからのお土産として持ってきた向日葵の種を、彼女に手渡した。

「まあ、うれしい。ヒマワリはわたしの大好きな花です。咲かせてみます」

そう言つて、彼女は種を見つめた。私たちは、再びタクシーに乗つて駅へ走つた。

改札口前で美帆と握手を交わそうとすると、彼女の麻痺している右手がゆっくりと動き、私の掌を握つた。それは、テュービンゲンでの過去の出来事、今日の再会、それに将来また会おうとの気持ちがあつた握手だと思つた。

ホームへ向かう途中、うしろを振り向くと、二人が手を振つていた。私たちも手を振り返した。

電車の席に座りながら、彼女のことを思つた。ここに至るまでの間、家族と周りの人たちに支えられ、それに感謝を覚えながら、困難を乗り越えようとしていたのだ。あの体で、障がいのある子供たちの幼稚園で働こうとしている。あの清々しい顔は、シャキールとの生活を信じているからだろう。彼女の気概と自分の願いを実現していこうとしている姿は、比類するものがない。

浜松に夕方に着き、ミヒヤエルが生まれた地である三方原で、当時のお世話になつた人たちと会つたり、彼を連れて懐かしい思い出のところを散歩したりしていた。と、息子がダウン症とわかつた時、「この子と明日へ向けて妻と一緒に歩いていくぞ」と誓つたこと

が想い出されてくるのだった。今の自分があるのは、息子のおかげだろう。感謝だ。

三日間浜松で過ごしたあと、私たち二人は京都府の山間の村に住んでいた友人宅で二泊し、今度の旅で最も訪れたかった山口県の萩へ向かった。

三回ほど列車を乗り換え、やっとのことで萩駅に到着。あたりは薄暗い。まず、これから四泊する宿を捜さなければならぬ。駅前の観光案内所に行った。

「安い民宿を捜しているのですが、どこかにありませんか」

「民宿は一泊二食で、どこも六千五百円ですよ。今の時期は観光客が少ないので、直接行つて訊くとよいでしょう」

係の人から街の地図をもらい、それを見ながらの宿探しになった。彼は歩くことには慣れてる。

「ミヒヤエル、平気か」

「ヤーア、パパ」

明るい声だ。地図を広げ、どの宿にしようかと迷っていると、地元の人が話しかけてきた。

「どうなさいました？」

「泊まる場所を捜しているのです。それも安い宿を」

「それでは、近くにあるユースホテルがよいでしょう」

そのユースに投宿することにした。

六月上旬の今は、夏の観光シーズン前。泊り客は、私たち二人以外に誰もいない。大きな部屋で、二人だけで眠ることになった。

翌朝、ガランとした食堂で、朝食を摂ってから外に出た。江戸時代には城下町として栄え、明治維新には多くの志士を生んだ萩。ここには日本のふるさとが今も脈々と生き続けていると何かの本で読んだことがあった。ぜひ訪れたかったところだ。そこに、今息子と二人でいるのである。

武家屋敷を感じさせる佇まいの道を彼と一緒に歩いていると、大きな石垣と白い土塀から夏みかんが顔をのぞかせているのが見え、それらが日本の昔ながらの風景のようにも思え、自然と心が静かに満ちてくるのだった。

しばらく行くと、緑の濃い静かな地になった。目の前には、吉田松蔭が弟子を教育した松下村塾の建物が建っていた。数多くの志士たちが指導された塾だ。志半ばにして、二代後半で死んだ吉田松蔭や高杉晋作などの生き方は、どのようなものだったのだろうか。

彼らは仲間と一緒に信頼し合いながら社会を変革しようとして、その中で自分の生きる意味を見出していたに違いない。

さらに歩いて行くと、伊藤博文旧宅が見えた。その前を通って、杉と檜の大樹が左右に並んだ、うっそうとした緑に包まれた道をゆっくりと進んだ。

時々初夏の陽光が緑の葉の隙間から漏れるように射し込み、樹と土の匂いの湿った冷たい大気が、日本で暮らしていた時分のことを蘇らせてくれるのだった。

「これが日本だよ」

ミヒヤエルにそう言うと、彼は、「パパ、パン、パン」と声を上げた。お腹が減ったようだ。朝食から何も口に入れていない。ちょうど二十メートル先に木のベンチがあったので、そこに腰かけ、途中で買った餡パンとオレンジジュースをリュックから取り出して食

べはじめた。

十五分ほどしてから、ベンチから立ち上がって再び歩き出した。少し行くと、黄檗宗東光寺境内前に出た。と、整然と立ち並ぶ約五百基の石灯籠が見えた。それらを目にしながら近くをブラついていると、遠い歴史を偲ぶ思いとなって気持ちがあつたりとしてくるのだった。のんびりと歩き続けた。

萩の町を三日間、足に任せて過ごしたあと、次は日本海の澄みきった青い海に浮かぶ青海島周辺へ向かった。

一車両の電車に乗って、長門市で降り、仙崎湾まで来ると、二十人乗りの小船がちょうど出るところだった。即船に飛び乗った。

船席からは、日本海の荒波によって少しずつ削られた断崖・石柱・洞門などが望め、波が壁を打ち砕いている様は、まるで長州の志士たちのような男性的躍動さがあった。それを眺め続けていると、彼らの必ずやり遂げるといふ心意気が伝わってきた。と同時に、美帆とシャキールの思いが、それと重なった。

ミヒヤエルは、小船が揺れながら白い飛沫を飛ばして走っているのが面白いようで、絶えずニコニコ顔である。海を目にするのも、船に乗るのも初めての彼。目を丸くしての新たな体験だ。

ユースに戻ると、毎日お風呂に入る私たち。日本の湯船は大きくていいものだ。

「今日も、パパの背中を流してくれるか」

「ヤーア」

彼のぎこちない手が、背を走る。

「もつと力を入れて洗ってほしいな」

両手で力いっぱいゴリゴリ洗うミヒヤエル。痛いぐらいだ。でも、快いものだ。父子でお風呂に入るのは、ドイツではないので、この肌と肌の触れ合いは二人の気持ちを一つにさせてくれるのである。共同の湯はいいものだ。

湯に浸かったあと、夕食を摂り、下着などを洗い、九時過ぎに床に入る私たち。

ユースを発つ朝も、ウグイスの鳴く「ホー ホケ キョ」の声で目が覚めた。いにしえから続いている澄んだ音色の三語を聞きながら、私たち二人は、再びリュックに衣類を詰めはじめた。あと数日間、父と子の旅を心ゆくまで満喫して行こう。

最後の晩を迎えた。美帆に電話をかけると、彼女は力強い声で言った。

「シャキールに、わたしは元気ですと伝えてください。生きている限り、希望を持ち続けているとも伝えてください」

それを聴いてから、受話器を置いた。

チュービンゲンに戻った翌朝、ホテルで働いているシャキールに電話をかけると、直ぐに彼が出た。

「どうでしたか。ミホの様子は？」

「元気だったぞ。自分ひとりで歩けるようにもなっていたし、話し方も以前のようになっていたよ」

さらに伝えたいことがあったが、電話でもあったし、まして彼は今仕事中だった。

「勤務が終わってから、家に寄ったらどうか」

「いいえ、これから行きます。二時間の休憩を取りますから。ホテルのお客は少ないです。とにかく、これから伺います」

弾んだ声だ。勤務時間が終る夕方まで、待つていられないのだろう。

十分もしないうちに、シャキールが来宅した。私の顔を見るや、明るい笑顔で、「お帰りなさい」と言い、居間のソファ―腰かけた。その彼に、美帆の家族に会ったことを話した。

「そうですか。ミホはそんなに元気になっていましたか。手紙と電話、それにテープ交換などでは相手の姿が見えないので、実際の程度よくなっているのか、今一つわからないところがありました。でも、彼女から連絡があるたびに、回復に向かっていることは察することができました」

「それと、驚いたことがあったよ。君はもう知っているだろうが、婚姻届けが受理されたことだよ。美帆が見せてくれた戸籍謄本に、君の名前が記されていたね。と言うことは、君はもう彼女の夫だぞ」

最後の語句を強くして、彼に言った。

「はい、そのことは電話と手紙との連絡で知っています。そうなのですよ。ボクは、彼女の夫なのです」

シャキールもそれに呼応して、満面に笑みを浮かべながら高い声を出した。

「戸籍謄本を目にしたときは、信じられなかったよ。婚姻届けが受理されるまで、彼女は何度も、法務局に通ったようだ。右半身がマヒしているあの身体で、よくやっているよ」

「ボクがこちらでやれることは、書類に必要なボクの署名などでした」

「君たちの相手を思う心には、感心させられるよ。美帆は、どうしても君と一緒に暮らしたいと願っている。君もそうだろう。もうここまでくれば、あとは順調にいくのではないか」

「それが、そうでもないのです」

そう言ったあと、彼は口をきりつと結んだ。

「ミホは、日本でのボクの在留資格認定証明書を申請しましたよね。申請してから、返事をまだもらっていないのです。パキスタン人が日本人と結婚した場合、そう簡単に交付されないようなことが、手紙のなかに書かれてありました」

「うん、そのことは彼女から聞いたよ。でも、婚姻届けが受理されたのだし」

そう言ったあと、シャキールの顔を見た。彼はしばらく黙っていた。少しすると、彼が重々しい口調で話し出した。

「難しいのは、ボクの日本行きのことです。ボクはここでは難民の身、ここにいる限り、ドイツの法に従わなければなりません。パキスタン大使館と知り合いのパキスタン人弁護士に問い合わせをしましたが、難民のボクがここで日本行きのビザを取るの、ほとんど不可能なのです。まして今、ミホと一緒に住んでいないので」

先ほどまでとは違って、眉間に皺をよせながら、憂慮に満ちた顔である。

「パキスタンとドイツ、それに日本の法か。三国の法がいろいろと絡み合っているな」

そう呟いてから、私も黙った。その他にも、宗教の違いもあった。しかし、それは私の経験からして、さほど重要でないと思ったので口に出さなかった。今目の前にいるシャキールの情熱的な目を見て、それに彼らが何とか一緒に住もうと行動している姿から、この

困難も何とか乗り越えるだろうと思った。

シャキールは話題を変えて、私たちの旅がどのようなものだったかを訊いた。そこで、約二週間半の息子との日本滞在について語った。それを聴き終えたあと、彼は再びホテルへ戻った。

それからというものの、三日に一度の割で彼は私の家に来て、在留ビザのことなどを話していた。それによると、美帆が一度ドイツに来れば、日本での自分の在留ビザが取れる可能性があると言った。それを、彼女は願っていると。しかし、彼女の両親は娘の体が心配で、それには反対しているとも語った。

ミヒヤエルとの日本旅から戻って、三週間が過ぎた。いつものようにマルクト広場での買い物を終え、家に戻ると、居間で電話の鳴る音がした。急いで居間に入り、受話器を取った。

「あゆみです。今、病院から戻り、家から電話しています。姉が再び倒れてしまいました。倒れてしまったのです」

「えエ！」

絶句した。そのあとに続く言葉が口から出てこない。直ぐにあの二つの脳動脈瘤のことが浮かんだ。

第九章 なぜ、自分に

「と言うことは、お姉さんが倒れたのは、以前のように脳動脈瘤による破裂ではないのですね？」

「それは、お医者さんが否定しました」

「では、一体、何で？」

「姉は突然、家で倒れ、意識を失い、強直性マヒの全身発作が生じ、救急車で近くの医療センターに運ばれました。しばらくすると、意識は戻りました。お医者さんは、てんかんの大発作だと説明しました」

今まで受話器を強く握っていた私の手が、少し弛みはじめた。

「でも、その夜もまた発作が生じたのです。私と母は心配しながら姉を見つめていました。とくに、母は涙を流して…」

動脈瘤がまだ脳内に二つ残っている身なので、倒れたとなると、最悪の状態を思い浮かべるのだろう。

「だけど、てんかん発作がどうして急に起こったのだろう？」

「それは最近の姉の様子から思い当たるふしがあるのです。でも、これは精神的なことだから、発作とは関係がないのかもしれませんが」

あゆみはそうのべてから、黙った。彼女が再び話し出すのを待った。

「発作が生じる十日前ぐらいだったと思います。今までの姉の明るい顔が暗くなってきたのです。姉はシャキールの在留資格認定をもらうには、自分がドイツに行くことがよいと思っただけで、体も元に戻りつつあるので、それができると考えたようです。姉のことですから、じっくり考える二面もありますが、反面、行動するときには非常に早いのです。そのことを親に伝えると、二人ともそれには反対の意向でした。とくに、父は猛反対でした。姉はそのことで苦しんでいました」

「それが発作に結びついたと？」

「ええ、姉の傍にいる私には、そのように思えるのです」

「そうですか」

そう言うてから、口を塞いだ。苦しみ抜いている美帆の姿が浮かび、何も言えなくなってしまうからだった。少ししてから、あゆみに今の姉の病状について訊いた。

「発作が生じてから二日過ぎた今は、意識が朦朧としています。私たちのことはわかりません。ただ、元に戻りつつあった右半身と言語に障害が再び出てきています。しかし、それは一時的なものだと、お医者さんはおっしゃいました。あと数日したら、姉が月に一度通っている東京大学の病院に行き、一ヶ月半近く入院することになります。そこで、医学的な様々な検査をして、発作の原因を調べてから、薬の調剤とリハビリなどをするようになります」

彼女の話すことを洩らさずに聴き続けた。

「お願いがあります。シャキールさんに今、話をした内容を伝えてほしいのです。私はドイツ語ができませんので、電話で彼と話すことは難しいのです」

「もちろん、びつくりすると思いますが」

「このようなことまで、すべてお願いして申しわけありません」

「いや、そのようなことはありません」

「大学病院での検査については、数日してから連絡いたします。そちらにいくだけさって、本当にありがたく思っています」

「こちらで、できることは何でもします。ご両親とお姉さんによろしくお伝えください」
受話器を置いてソファーに腰かけたあと、しばらくの間、今話した内容を思い浮かべたと、これからどうなるのだろうかとの言葉が口から洩れた。

三十分ほどしてから家の裏に建つホテルに行くと、女主人がカウンターに座っていた。美帆が再び倒れたことを話すと、彼女は目を丸くした。しかし、命に障りないことを知ると、ホッとした顔となって調理場で働いているシャキールを呼びに行った。一分もしないで、女主人が戻って来た。

「シャキールはすぐに来るから、中庭で待つように」

そう言ったのを聴き、中庭の椅子に座り、彼が来るのを待った。

三分ほどすると、彼が現れた。

「ミホが倒れたと、おかみさんから聴いたのですが、本当ですか」

眉毛を引き上げ、目を丸くしてコック用の白い帽子を取りながら声高に言った。その彼に、先ほどあゆみと会話した内容を詳しく伝えた。

「そうですか。また、倒れたのですか」

彼は聴き取りづらい声を出しながら、視線を白いテーブルに落とした。

「だけど、前のようにくも膜下出血ではないし、命に障るようなことではないので」

そこまで言ってから、黙った。先のことは、予測がつかなかったからだ。

「どうしてなのだろう。なぜ、いつもミホが、そのような目に合うのだろう」

シャキールの黒い瞳は、今は情熱的ではない。鋭敏な感受性を持つ彼の純粹な心は、今は疑惑心に変わったように思えた。それは、「なぜ、ミホが……と自分に何度も問うように呟いたからだだった。

私自身、不条理に出合った時に生じるこの「なぜ、自分に……」と言う問いが何度かあった。その際は、疑惑心に陥ったものだった。ちようどその時、近くの教会から三時を告げる鐘の音が鳴った。それを聞き、時間は必ず前へ前へと進み、その中で変化は生じてくるものだと思ひ、未だ視線を下に向けている彼の肩に手を伸ばして静かに言った。

「でもね。妹が、『姉は再びよくなるでしょう。姉をいつも見ている私は、それを確信しています』と言っていたぞ。夫である君は、今はここでは何もできずに辛いだろうが、傍にいる妹がよくなると確信しているし、今までの美帆の生きる力強さからして、彼女は再び回復すると思うよ」

さらに続けた。

「それに、君は今まで精一杯にやってきたではないか」

彼が今の状況を少しでも前向きに考えることを願いながら、その言葉を口に出した。それを聴いたシャキールが頭を上げた。

「ええ、そうです。ボクの妻は、元気になります」

彼は自分に言い聞かせるように、語句を強めながら言った。

「とにかく、彼女の病状が再び良くなって、君に直接電話できるようになるまで、あゆみ

がわたしのところに電話をしてくれることになっているから」

「シャキールと話をしてから、三十分が経っていた。仕事中の彼なので、長話はしてはいけないだろうと思い、家に戻った。」

それから三日が過ぎたが、あゆみからは何の連絡もなかった。家の電話ベルが鳴るたびに彼女からだと思いつつ受話器を取るのだが、違っていた。こちらから電話をかけようとしたが、それは止めにして、連絡がくるのを待った。シャキールからは、

「妹さんから連絡が入ってきませんか」

と、毎日電話がかかってきた。

居間の電話ベルが鳴った。今度はそうだろうと思いつつ受話器を取った。

「あゆみです。長い間、連絡をしませんで、申しわけありませんでした。私の仕事と姉の入院準備などで忙しかったものですから」

「そうと思い、こちらから連絡をしませんでした。で、今のお姉さんの病状は？」

「病院に入院して、脳波と脳CTなどの検査を受けました。発作の原因は、以前、頭の手術を受けたところに何らかの障害が生じたと考えられるとの説明を受けました。でも、はっきりしたことは、現在の時点ではわからないようです」

「そうですか」

「痙攣発作は数回生じたのですが、今はなくなり、抗てんかん薬を飲んでいます。意識ははっきりして、しゃべることは元に戻りつつあります、しかし、右半身のマヒは前よりも強くなっています」

「そうすると、まだまだ入院ということになるのですか」

「ええ、予定通り少なくとも一ヶ月は入院して、リハビリをしたり、さらに詳しい検査をしたりしなければならぬようです」

「それで、お姉さんの精神状態はどうですか」

「今日も、姉のところへ行きました。そのとき、姉から、『二人に連絡しないとだめ』と怒られてしまいました。それと、シャキールさんの在留認定について、入国管理局から連絡がないかと訊かれたので、家にはまだ何の知らせないと返事をすると、がっかりした表情になりました。そのようなことから、精神的な働きは戻っています」

「そうですか。それで、体のほうはどの程度動けるのですか」

「まだ点滴をしています、それもなくなり、これからはリハビリを受けるようになりません。車椅子には、今日、乗りました。ただ、薬の副作用のせいなのか、よく眠いと言います。お医者さんは、『心配はいりません。発作の生じた前の状態にまでは回復します』とおっしゃいました」

「それは、よかったですね。シャキールの日本在留の許可が早くおけるとよいのだが」

「姉はそれだけを願っています。間もなく、その返事をもらえたいと思います」

あゆみは入院した姉のことを一通り話し終えたあと、シャキールがどのようにしているかを訊いたので、彼の日々の様子を話し、最後に言った。

「彼は、一刻も早く美帆さんのところへ行きたがっていますよ」

「そうですか。姉は数日したら、シャキールさんに直接電話すると言っていましたので、そのことを彼に伝えてください。いつも感謝しております。父と母が、くれぐれもよろしくと申しております」

それを聴き終えてから、受話器を置いた。彼女と話した内容を直ぐにシャキールに知らせようとして、彼に電話をかけた。

一部始終を聴いた彼は、弾んだ声を上げた。

「それでは、ミホはこれからよくなっていくのですね。よかったです。今、ボクは難民を支援している弁護士に、ボクがなんとか日本に行けるようにと働きかけているところです。日本語も図書館から本を借りて勉強しています。それでは数日したら、ミホから電話があるのですね」

「そう思うよ」

「それを待ちます」

彼のよろこびに満ちた声を聴いたあと、受話器を置いた。

美帆がシャキールに直接電話をかけるようになってからは、シャキールから彼女の症状について聴くようになった。それを耳にするたびに、美帆が快方に向っているのを知った。

彼女が発作を起こして一ヶ月半が過ぎたある日のことだった。あゆみから一通の長い手紙が私のところに届いた。

そこには、入院している姉が精一杯、今の体を回復させようと努めている様子が詳細に書かれてあった。また、毎日友人たちにハガキを出して、それがリハビリにもなっているとも記されていた。それと、今か今かとシャキールの在留認定を待ち続けている姉の様子も綴られてあった。しかし、そのあとの文を読んで、驚いた。

シャキールの在留認定の通知が昨日家に届き、不交付となり、それを明後日退院の姉にどう伝えたらいいのか、今の自分にはわかりませんと書かれてあったからだだった。それで、長い手紙は終っていた。啞然として、その封書を机の上に置いた。

何ということだろう。あれほど熱望していた在留認定が不交付になるとは。婚姻届けも受理されているのに。どうしてなのだろう。そのことを知れば、彼女はどんなにか気を落とす、悲しむだろう。

美帆に電話をかけようとしたが、このような場合は、一緒にこの世の理不尽を嘆くのがよいと思いい、連絡をしなかった。いや、正確に言えば、連絡できなかった。目の前にある、あゆみの便箋に目を注ぐしかなかった。

一週間近く連絡がなかったシャキールが、私の家に来て、ソファアに腰かけた。

「どうしていた？ ホテルに連絡したが、数日前から休みを取っていると女主人が言ったので、病気でもしていたのかと思っていたぞ」

「いいえ、ボクの知人の車に乗って、ボンにあるパキスタン大使館に行き、難民のボクが日本へどのようにしたら入れるかについて、その事務員から直接話を聞いていたのです。ボクの日本在留許可がおりなかったことは、もう知っていますよね。そこで、なんとか道はないかと模索していたのです」

「そうだったのか。で、何かいい方法はあった？」

「それが難民である今のボクの身では、無理なのです。まして、日本での在留許可がないので、望みはまったくありません。たとえば婚姻届けが日本で受理されていても」

「変な話だね」

彼は右手で両目を押さえながら首を横に振り続けたあと、頭を下に向けた。しばらくす

ると、彼は急に顔を上げた。

「でも、ボクはなんとしてもミホのところに行きます。彼女は涙声で、道はあるからと電話で力強く言いました。自分を支援している市民グループの人たちが、助けているとも付け加えました」

「そのグループのことは、彼女から聞いていたよ。その人たちと連帯していけば、なんとかなるような気がするね」

「そうやってほしいです。とにかく、一緒になります。ボクたちは一緒になりますから」シャキールの黒い瞳が、その時一瞬、輝いた。

それから一ヶ月後、美帆からの封書を受け取った。たどたどしい筆跡だが、今の心境が如実に伝わってくる文面だった。そこには、すでに十日前から月・水・金曜日の午前中だけ、障がいのある子供たちの幼稚園に勤務していることが書かれてあり、子供たちとのやりとりが記されていた。それを読み、精一杯力を出して仕事をしている彼女の姿が浮かんだ。

さらに読み続けていくと、シャキールの日本在留認定が不交付となったことが書かれてあった。理由は、難民としての彼が疑問視されているからだだった。そこで、彼女は支援グループの人たちと相談した結果、シャキールが日本に在留できるのは、自分がパキスタンへ行き、シャキールもパキスタンに帰って、パキスタンの法に従って結婚することが最善の方法だと記されていた。それも一人で行くと綴ってあった。

あの身体で、それも一人でパキスタンへ飛び、そこでイスラム教による結婚式を挙げようとしているのである。そのようにしなければ、ドイツでの難民の彼を、日本に呼び寄せることができないのだ。あの体でたとえ数週間でも、文化と習慣と食事などがまったく異なる国へ行こうとしているのである。これは、もう命を賭けた行為としか思えなかった。

文面の最後に、今のわたしにはこれしかないのですとも記されていた。そして、笑っている向日葵の絵が描かれてあった。それをミヒヤエル君に見せてくださいとの伝言で手紙は終わっていた。

二週間が過ぎた。久しぶりにシャキールが夜の八時過ぎに来宅した。

「コーヒー又はジュース、どちらを飲む？」

「今、ホテルでの仕事を終えたばかりなので、咽が乾いています。ジュースをください」注いだりんごジュースを、彼は一気に飲んだ。

「ここのところ、家に来なかったもので、どうしているかと思っていたよ」

「二週間前から、ホテルでの一日の仕事を終えたあと、以前働いていたマクドナルドでも夕方から深夜まで働くようになりました。そのようなことで、時間がなかったのです。今日は、マクドナルドの仕事が休みだったので来ることができました」

「朝から深夜まで働いて、体でも壊さなければいいのだが」

「それは平気です。もう知っているでしょう、ミホがパキスタンへ行って、結婚式を挙げようとしていることを。難民のボクが日本に住むには、ミホとパキスタンで、パキスタンの法の下で結婚すれば、ボクの日本在留が可能なのです。今は、これしか道はないのです」「だけど、今の彼女の体で、危険が大き過ぎやしないか。発作がまた起きたら」

空になった彼のコップに、またジュースを注いだ。

「ミホは命がけです。パキスタンの往復航空費をつくり出すためにも、幼稚園で働くよう

になったのです。ボクはもちろん、心配ですよ」

ジュースの入ったコップを持ちながら、彼は深い溜息を洩らした。

「ボクたちは離れ離れになってもう一年が過ぎました。その間、お互いに連絡を取り合っ
て、一緒になることだけを望んでの毎日です」

そう言うことから、シャキールは黙り続けた。その彼に、美帆がいつ頃パキスタンに行こ
うとしているのかを訊いた。

「二ヶ月後です。発作以来、薬が効いてきたのか、体の調子は良いみたいです」
今度は明るい声で答えた。

「とにかく、今、お金が必要になったので、日中はホテル、夜はマクドナルドで働いてい
るのです。パキスタンへの飛行機代を貯めなくてはなりませんから。あと二ヶ月ほどで、
それはできます」

希望に溢れた声だ。その彼に言った。

「何か、わたしで出来ることはないか？」

「いつもお世話になって、ボクとミホとの間にいてくれて本当に助かっています。感謝し
ています」

彼は頭を下げた。

「いや、それは反対だよ。わたしは君たちと関係が続けられることに、よろこびを見
出しているのだから」

「そう言うてくれると、うれしいです」
「でも、まだまだこれからだぞ。わたしで出来ることは」

そう言うてから、ある考えが浮かんだ。しかし、そのことを妻にまだ話していないし、
また経済的に余裕のない私たち家族だったので、言おうかどうか迷った。勇気がいった。
が、思い切った。

「飛行機代を払えても、パキスタンの結婚式にかかる費用と、日本に行くまでの期間の生
活費も必要だろう」

「結婚式は身内だけで、ごく簡単に済ませますので、費用はそうかかりません。とにかく、
パキスタンの法に従って結婚するのが目的ですから。それと、ミホは結婚式のために来て、
それが済んだら、すぐに日本に帰国して入国管理局に再度、ボクの在留資格認定を申請し
ます。それでボクの日本での在留許可は、かならず取れるでしょう。ボクもミホも、それ
を信じています」

「うん、そうか。でも、そうなるまでには、まだまだ時間がかかるだろう」

「そうかも知れません。でも、ボクは何ヶ月でも待つし、その間にやれることはします」

「そのためにも、いくらもお金が必要だろう。君が日本に順調に行けるように願うし、君
に経済的な援助ができればうれしいのだが」

「経済的な援助？」

彼は驚いたような表情を浮かべた。そして、手を横に振った。

「それはいけませんよ。そんなことは許されません」

「しかし、これからの君には、お金が必要にもなるし、二十万円渡すから、何かに使って
ほしい」

シャキールは、再び手を横に振った。

「二十万円は、パキスタンでの半年近くの生活費にも当たります。それは、受け取れませ
ん」

「君を援助したい。今、君はすぐに返事ができないだろう。数日したら返答してくれれば
いいから」

彼はしばらく黙り続けたのち、

「ありがとうございます。考えてみます」

と言って、片手で目頭を押さえた。

数日後、シャキールが再び来宅した。経済的援助を受けると言い、何度も「ありがとう
ございます」と言ってから帰った。このことは、前回彼が来たあとに、妻に話したことも
あって、シャキールが受けてくれたことを彼女に伝えると、

「それはよかったわね」

と、よろこんでくれた。

シャキールは自国のパキスタンへ帰国するまでの間、仕事の合間を見つけては、私の家
にしばしば立ち寄り、話をしていった。来るたびに、あと何日でミホに会えると、いかに
もうれしそうな表情で語り、帰国の日を待っていた。

その姿を目にして、やっとここまで来たかと思ひ、よろこんだ。しかし、彼女のパキス
タンでの滞在が心配であった。それと、娘のパキスタン行きを肯くしかなかった親の心を
察した。と、両親の困惑した顔が浮かんでくるのだった。娘とどのような会話があったか
は、想像できた。子を持つ親として、そのことを思うと、胸が詰まるのを覚え、思わず手
を合わせた。

第十章 花火

十二月三十一日の夜、シャキールから電話がかかってきた。今、飛行場において、これからパキスタンへ飛び立つとの知らせであった。難民の彼がドイツを出れば、再びここに戻って来ることはできないだろう。彼の言葉を聴き続けた。

受話器を置くと、夜空に大きな音が響き渡った。ドイツに住む人たちは、大晦日の夜から新年にかけて花火を打ち上げる習慣があった。その爆竹音だ。私の家は高台に建っているので、至るところで色鮮やかに輝く閃光がよく見える。向日葵のような花火も夜空に舞った。

それを眺めていると、新年になれば二人の望みは叶えられるだろうと思つた。二人は苦難を乗り越えてここまでできたのだ。必ず良い方向へ行くに違いない。新しい年になるのだ。変化が生じてくるのだ。

それから一週間が過ぎた。居間で食事をしていると、電話のベルが鳴った。受話器を取ると、パキスタンのシャキールからであった。

「連絡が遅くなつてすみません。今、ボクたち二人ともこちらにいます。昨日、結婚式を挙げました」

それを聴き、いつもより高い声で言った。

「それは、おめでどう！ 彼女と積もる話をしたのだろうね」

「はい、ミホは元気ですよ。ボクが想像していたよりも、ずっと元気です。とてもハッピーです。今、ミホと代わります」

彼も同様に、声を高くして言った。

「美帆です。今、彼の家からです」

彼女の言葉と一緒に、賑やかな声が耳に入った。

「どうとう、彼と再び会えたね」

「ええ、ドイツで別れたときに彼が言った、『長い黒髪の姿になった君と再び会おうね』がやっと実現できました」

「長かったね。辛いことが多くあったよね」

「ええ、でも、今は彼と会えてとても幸せです」

弾んだ声だ。

「昨日、結婚式を挙げたって？」

「ええ、イスラム教による形式的な式でした。ごく身内の人だけが集まりました。赤い民族衣装を着て、金色の靴を穿き、頭からショールみたいなものを被って、とにかく結婚式を挙げ、その書類をこちらの役場に提出しました。これでなんとか、彼が日本に来れると思えます」

結婚式を終えたあとの熱りが覚めぬ声である。自分はクリスチャンだと言っていた彼女だ。他の宗教の儀式で結婚式を挙げるには相当な抵抗があったに違いない。でも、どうしても一緒になりたかったのだ。彼女の話を聴き続けた。

美帆はシャキールの母と兄弟について語ったあと、一息ついた。その彼女に、今の体の調子はどうかと訊いた。

「相変わらず右半身はまだ十分に動かすことはできませんが、歩くことは難なくできます。こうやって、一人でここにも来られたのですから。発作もここ四ヶ月間、起こっていませんので安心してください」

「それならいいのだけれど。そこは見知らぬ地、習慣と食事それに言語も異なるし、戸惑うこともあるだろう。無理をして疲れないといいが」

「それは平気です。彼がいます。それに、彼の家族が優しくしてくれていますので」

明るい彼女の声だ。

「それで、あとのくらいそこにいる予定なの？」

「一週間ほど滞在してから、また一人で帰ります」

「また離れ離れになってしまうね」

「ええ、でも今度はかならず、彼の在留資格認定証が交付になると思います。彼は日本に來れます。それを信じています」

力強い声に、彼女の一途な願いがこちらに伝わってくるのだった。

「とにかく、これから一週間、無理をしないほうがいいよ」

「ええ、気をつけます。奥さん、ミヒヤエル君によろしくお伝えください」

今度は、シャキールが受話器に出た。

「彼女は薬をまだ飲んでいる身だし、無理な行動は差し控えたほうがいいぞ」

「はい、わかっています。ミホがパキスタンを発ったあと、また電話をします」

「それでは、その連絡を待っているから」

そう言ったあと、受話器を置いた。二人の元気な声を聴き、シャキールが日本へ行くのは、もうわずかだと思ひ、会話したあとの余韻をたのしんだ。

それから一週間後、シャキールから電話が入った。美帆が無事に日本に戻ったとの知らせであった。また、パキスタンから戻った美帆からも、東京入管にシャキールの在留資格認定の証明書を申請しましたとの電話をもらった。明日にでも交付となるような話だった。今までの仕儀から、そうなると思った。

それから二カ月後、美帆から電話がかかってきた。彼女の声を聞くや、シャキールの日本滞在の許可がおりたのだろうと思った。しかし、そうではなかった。普通だと、申請してから遅くとも三ヶ月待てば、不交付か交付かの連絡がくるのだが、彼女の場合、三ヶ月近くが過ぎても何の連絡もなかったのだった。そのことを美帆は受話器を通して、憤慨した声で語った。

「わたしはこの三ヶ月間、何度も入管に電話をしました。そうすると、係りの人は変な質問をするのです。『シャキールがドイツへ行く前に、日本にいたのではないか』と疑うのです。そんなことは、ありえないのに」

彼女は続けた。

「そこで、わたしを支援してくれている市民グループに連絡して相談してみましたら、そのグループの弁護士さんが、すぐに入管に電話してくれることになりました」

その弁護士から、彼女はしばしばアドバイスを受けたとも語った。そして、さらに言った。

「明日、その弁護士から電話をもらうことになっています」

それから三日後、彼女の明るい声が電話線を通じて聴こえてきた。

「シャキールの在留認定が交付になったのです。交付になりました。これで、彼は日本に来ることが出来ます。うれしいです！」

感動で震えた声だ。

「それはよかったです。本当によかったです！」

「あとは、彼がその在留資格認定の証明書を持って、パキスタンのイスラマバードの日本大使館で在留ビザをもらえばいいのです。すぐにおりるでしょう」

心の高まりが伝わってくる彼女の声に、シャキールが日本へ行けるのも間近だと思った。しかし、三週間後、彼女から再び電話が入り、イスラマバードの日本大使館は彼にビザをおろさなかったと語った。理由は、シャキールがドイツで確かに難民だったのかとの疑問が、投げかけられたからだだった。そのことを、彼女は憤ったように語った。

「そのことで、わたしは何度もイスラマバードの日本大使館に電話をしたのです。しかし、大使館の係りの人は、自分の名前さえもわたしに言いませんでした。支援グループの弁護士さんから、『相手の名前を、かならず聞きなさい』とアドバイスを受けていたので、係りの人の名前を訊いたのですが、言ってくれませんでした」

「どうも変だな。釈然としないな。何か、嫌がらせみたいだな」

「ええ、そうなのです」

「で、その弁護士は何と言ったの？」

「今、その弁護士さんとなかなか連絡が取れないのです。とれたら、相談してみます」

「それが一番いいよ」

「わたしは、待って、待って、待ち続け……」

涙ぐんだ声である。

それから一週間が過ぎた。朝食を摂りながら、二人はどうしているかなとちようど思っていた時だった。妻が友人たちや知人たちの誕生日が記されている一冊の手帳を繰っていた。

「あら、今日はミホの誕生日よ。連絡してみたら？」

「誕生日か。シャキールのビザの件がどうなったかも知りたいし」

直ぐに電話をかけた。時差は七時間、日本はちょうど今は午後四時だ。待った。カチツと音がした。彼女は私の声を聴くや、勢いのある声を上げた。

「ちようど、そちらに電話をかけようとしたところでした。先ほど連絡が入って、彼のビザがおりたのです。おりたのです」

彼女の躍った声だ。

「それはよかったです。とうとう取れたのだね」

「ええ、これで彼はやっと日本に来ることが出来ます。わたしの誕生日への素敵なプレゼントでした」

「それは本当によかったです。長かったね。これで、日本での二人の生活となるね」

「わたしは今、夢のような気持ちです」

「おめでとう！」

「うれしくて、うれしくて！」

打ち震える声を聴き、私の胸も熱くなった。

「それで、シャキールはいつ日本へ飛ぶことになったの？」

「航空券を今日中にも予約します。一週間以内に、こちらへ飛んでくるでしょう。彼が来たら、とりあえず、わたしの両親の家に数ヶ月間住むことになります。父も賛成してくれましたので」

「それはよかった」

「とにかく、彼は働くところを早く探すでしょう。すぐに仕事先が見つかるかどうかかわりませんが」

「彼のことだ。なんとか見つけるだろう」

「これも皆さんのお蔭です。わたしは多くの人たちに支えられ、なんと感謝してよいのか。ありがとうございます」

彼女の最後の言葉は、涙声となっていた。

受話器を置いてから、ソファーに腰かけて感慨に耽った。美帆とシャキールにとって、一年半は長かったに違いない。ここまでよくやってきた二人だ。皆が拍手をおくることだろう。彼らが成田空港で会う姿が目に浮かんだ。それは、まさしく躍り上つての再会になるだろう。その情景を想像するだけで、満たされた気持ちとなった。

彼ら二人が日本で落ち着いて暮らすようになったら、訪れようと決心した。

終章 蝉の声

日本の夏山が恋しくなつたと同時に、美帆とシャキールがどのような生活をしているかを知りたくなり、日本へ行くことにした。彼らが一緒に暮らすようになって、二年が過ぎていた。

列車を降りてから約束した駅の改札口のところに行くと、美帆の姿が目に入ったので、「ヤア！」と手を挙げて合図をすると、彼女は気づいたようで、こちらに向つて来た。

「こんにちは」

「こんにちは」

「久しぶりだね。元気かいのでしょ？」

「ええ、発作もなく、毎日幸せに暮らしています」

涼しそうな水玉模様のワンピースを身につけた彼女と並んで、駅構内の階段を降りた。真夏の太陽の光がジリジリと照りつける中を歩き出した。

「今日も蒸し暑いね」

「ええ、三十度は超えていると思います。背負っているリュックサック、重くはありませんか。山にでも登りに行かれたのですか」

彼女がニッコリしながら訊いた。

「日本に着いてから、大学時代の山仲間と会い、その足で越後の山へ行つたよ」

「越後の山？ 新潟でしたね。どのくらい、いたのですか」

「越後駒ヶ岳がよく見える山小屋で、三日間ほど過ごしていたね。そこは学生のころ、よく訪れたところで、電気などもないから、夜はランプの生活でね。十数年ぶりだったかな。小屋周辺で数匹の蛇も見だし、日本の自然は豊かだね。それに美しい」

「ええ、そうですね」

「山はいいな。大自然の懐のなかにいると、自分が包み込まれるようになるな。そう言えば、一緒に南チロールに行ったこともあったよね」

「あの山歩きはたのしかったです。今でも、あのアルプスの光景を時々想い出します。ミヒヤエル君と遊んだり、花を摘んだりして……」

彼女は時々笑顔を浮かべ、南チロールで過ごした一週間の山歩きのことを語り出した。その話し方は、手術前の彼女に戻っていた。また、歩き方も右半身にそう麻痺を感じないほどになっていた。十分ほどすると、彼女が二階建ての小さなアパート前で止まった。

「ここが、私たちの住まいです。シャキールは日本に来て三ヶ月間だけでしたが、わたしの親の家に住んでいました。その間に、彼は職場を見つけ、自動車のタイヤ工場で働くようになりました。それ以来、この貸アパートで暮らしています。部屋は一つしかありませんが、私たちにはちょうどいいくらいです。今日お泊りになって、窮屈に感じないとよろしいのですが」

美帆はハンドバックから鍵を取り出して戸を開けた。中に入ると、外以上の蒸し暑さだ。急いで彼女が居間の窓のサッシ窓を開けた。

「風があると、いくら涼しくなるのですが」

そう言うてから、美帆は台所に行き、冷蔵庫から冷えた麦茶を持ってきた。一口飲むと、

大麦の実を煎じた風味が口の中に漂い、その美味しいこと。日本の夏の暑さには、やはりこれが一番だと思ひながら飲み干した。

開け放した窓に目を向けると、大輪の黄色の花が何本か見えた。

「あれ、あそこにヒマワリの花がいくつか咲いているが？」

前に座っている美帆に言った。

「ええ、あれは、ミヒヤエル君と日本にいらしたときに戴いた種から咲いたものです」

「どれも、シャキールの背丈ぐらいはあるな」

「そうですね」

そう言うってから、彼女が話し出した。

「雨と風が強かった日があったのです。そのとき、わたしとシャキールとで、折れそうになったヒマワリの茎の一本一本に棒を添えたのです」

「そうだったのか」

「テュービンゲンにいた時分、夏はあの花を見て暮らしていました」

美帆は、直径二十センチぐらいの黄色く咲いている向日葵の花に目を注ぎ続けていた。その横顔を見て、あの花に彼ら二人の物語があるのだろうと思った。

二杯目の麦茶を飲みながら、シャキールが工場から何時頃に帰ってくるのかを訊いた。

「もう少ししたら、戻って来ます」

「土曜日の今日も仕事をしているのか」

「ええ、隔週の土曜日は、半日仕事があるのです」

「日曜日はクリーニング店で働いていると彼の手紙には書かれてあったが、そうすると、休む日はないのではないか」

「ええ、それでも休みを見つけては、二人で遊びに出かけています。先日は奥多摩湖に遊びに行つて来ました。ちょうど、わたしが週三日働いている幼稚園が休みだったのです。それはたのしかったです」

うれしそうな表情で語っている彼女の目は、輝いていた。幼稚園での仕事内容を聴いていると、部屋の片隅にあった電話のベルが鳴り出した。

「彼からだと思います」

美帆は受話器を取るために立ち上がった。

「彼の携帯電話からです。駅で降りて、今こちらへ向っています。もう少しすると来ます」
シャキールの仕事内容を聴いていると、玄関のドアが開く音がした。

彼がニコニコしながら部屋に現れた。

「こんにちは」

「ハロー、シャキール」

立ち上がったから、彼のがっしりとした肩を強く抱いた。

「元気そうじゃないか」

「はい、元気ですよ。ミヒヤエル君は？ 奥さんは元気ですか」

「ああ、皆、元気です」

「そうですか。懐かしいな」

日本語でそう言ったあと、彼は帰宅の途中に買ったケーキ入りの折り箱をお膳の上に置いた。私たちは畳の上に座って、ショートケーキを食べながら、今度はドイツ語でお互い

の生活などについて語った。

目の前にいる二人の顔を交互に見ていると、鮮烈な悦びと感動が走ってくるのだった。少しすると、シャキールが小さな扇風機にスイッチを入れた。

「パキスタンも暑いですが、日本も暑いですね」

ブーンという音とともに、熱した風が流れ出した。

「土曜、日曜も働いているらしいね」

「ボクは若いですから」

ニッコリして、言った。その笑顔から、ここでの暮らしが満たされていることがわかった。私たちは時間が経つのを忘れて、話に花を咲かせ続けた。

折り畳みの小さな卓袱台を囲んで、三人の夕餉となった。久しぶりに口にする日本の料理に舌鼓を打ちながら、食べ続けた。

それも終わり、三人で近くを散歩することになった。

夜になっても、日本の夏は暑い。しかし、これが日本の夏だ。私たちは肩を並べながら通りを歩いていった。と、太鼓の音が聞こえてきた。一瞬、欲びにも似た気持ちとなった。隣にいた美帆に話しかけた。

「どこかで、盆踊りをしているのだろうか」

「ええ、近くの公園で町内盆踊り大会をしているのです。今日と明日、二日間催されます。踊ったことがありますか」

「盆踊りは大好きで、日本にいた時分はよく踊っていたよ。あの太鼓の音を耳にすると、体と心がうずうずして、吸い込まれるように輪のなかに入ってしまふのだ」

「そうだったのですか。それでは、その公園まで行きましょう。すぐそこですから」

三分もしないうちに、提灯で明るく照らされていた公園に着いた。中央には櫓が組まれ、その上では太鼓が叩かれ、百名以上の人たちが輪になって踊っていた。その様子を眺めていると、美帆が訊いた。

「踊りたいのではないですか」

「体が自然と動いてくるね」

「わたしは体をまだ自由に動かすことができませんので踊れませんが、シャキールを連れて、あの輪のなかに入ってみたいかがですか」

シャキールは、自分は踊れないと言いつ張ったが、その彼を連れて輪の中に入った。

炭坑ぶしと東京音頭などを踊っていると、体が自然と動き、指の先がピンと張ってくるのだった。我を忘れたようになってしまった。うしろでは、シャキールが不器用な手つきで踊っていた。時々彼と顔を見合わせては、お互いニッコリして踊り続けた。

美帆は最初、シャキールの横で一緒に踊るような手つきをしていたが、しばらくしてから輪の外に出て、私たちに手を振った。十数年ぶりの夏の盆踊りに興じた。

一時間半近く踊ったあと、三人でアパートへ向かった。

「踊りが好きなのですね。とても上手でした」

美帆がハンカチで顔を拭きながら言った。

「盆踊りはいいね。夏の風物詩だ。皆と輪になって体を動かしているのはいいものだ。あの太鼓の音がまだ耳に残っているよ」

そう言うてから、隣にいたシャキールに訊いた。

「君はどうだった？」

「ボクは踊るのは初めてでした。少し恥ずかしかったです。でも、たのしかったです。まわりの人たちの手足の動きを見ながら踊っていました」

彼は、愉快そうに再び手足を動かした。それを目にした美帆が、「こーよ」と微笑みながら、シャキールの手の動きを直した。

快い疲れでアパートに戻ると、美帆が冷蔵庫から冷たい麦茶を持ってきた。小さなお膳を囲みながら、私たち三人はそれを飲んだ。体も心も静まってくるのだった。シャキールが、パキスタンでの夏がどのようなものを話し出した。

その話が終わると、彼は立ち上がって筆筒の引出しから一通の封筒を取り出して、それをテーブルの上に置きながら座った。

「これは、あの上に頂いたお金です」

驚いた。あのお金は、あげた積りで渡したので、まさか彼が返してくるとはまったく予想さえもなかったからだ。

「あのお金は君への贈り物だったので、これは受け取れないよ」

「それはだめです。ボクは今、働いています。会社からボーナスももらえるようになりました。あのときは、あのお金でいろいろと助かりました。ボクはうれしかったです。ボクのことを、本当に思っていてくれて」

隣に座っている彼女も、訴えるような声で、

「受け取ってください。お願いします」

と、言った。その二人の真剣な眼差しに、困った。彼らはこれからまだまだお金を必要とするだろう。

「では、どうだろう。半分を受け取ることにするから、残りは、君たちへのこれからのためにということだ」

封筒から十万円を取り出し、残りを彼らに戻した。黙っている二人に、

「こんどは、わたしの願いをきいてほしい」
と言って、無理やりに渡した。

柱にかかっている時計に目をやると、十二時半が過ぎていた。部屋に布団を敷いて寝ることになった。八畳くらいの広さに、机とテーブルと筆筒などが並んであったので、三人が横になると、もう歩く余地はなかった。

敷き布団の上に横になったが、彼らのことが想い浮かび、なかなか寝入ることができないでいた。それでもいつの間にか、眠りについた。

半開きとなった窓から聞こえてくる小鳥の鳴き声で目が覚め、腕時計をのぞくと、五時前だった。隣に眠っている二人を起こさないようにして、静かに外に出た。早朝の新鮮な空気を吸い込んでみると、体が少しずつ目覚めて清々しい気分になってくる。

昨夜の盆踊りのあったところを通り過ぎて行くと、多くの樹木で被われた緑の公園が目に入った。そこに足を踏み入れると、蝉の声がミーン、ミーンと至るところから聞こえ、蝉の大合唱といったところだ。数日前の越後の山々では、蝉の声が山々に反響しながら、どこからともなく聞こえていたのだが、今は一本一本の樹に止まって鳴いているのである。

公園の真ん中に一つのベンチがあった。そこに腰かけた。十年ぶりに耳にする蝉の声に、

子供の時分に戻ったような気分になって耳を傾け続けた。

少しすると、新聞配達の少年が私の前を走り過ぎようとした。その少年に、「ごころうさん」と声をかけると、「おはようございます」との明るい声が返ってきた。私も少年時代、新聞配達をした時期が三年間あったので、その少年の姿と自分の少年時代とが重なった。通り過ぎた彼の姿を目で追った。

近くで鳴いている蝉の声を耳にしていると、この場から離れたなくなり、ベンチに座り続けていた。と、一人のお年寄りが白い小さな犬を連れて、私の目の前をゆっくりと通り過ぎようとした。犬は大きな樹の前で止まり、片足を上げておしっこをちよっぴりして、次の樹に移り、また片足を上げた。人の姿を再び見かけなくなった。蝉の声だけが、聞こえるだけである。

今度は、木のベンチの上に横になった。風がいくらか吹いてきて、葉と葉が気持ち良さそうにひるがえりながらサラサラと音を出して揺れはじめた。寝ながら仰ぎ見る樹木は、こちらを包んでくれているようで、目が自然と閉じてくるのである。いつのまにか眠ってしまった。

誰かが私の名を呼ぶ声で、目が覚めた。

「ここにいたのですか。ボクが起きると、もういなかったの、ちよつと心配しましたよ」自転車のサドルにまたがったシャキールが、上からのぞいていた。

「ごめん、ごめん。早く目が覚めたので、外の空気を吸いたくなって散歩に出ただけけれど、ここで蝉の声を耳にしながら眠ってしまったようだね」

半身起こしてから、ベンチに座り直した。彼は自転車から降りて、私の横に座った。

「シャキール、とうとう君とこの日本で会えたね。君は美帆と一緒にになって、職を得て、生き生きと暮らしているように見えたが、そうなのだろう？」

朝日に照らされた、淡いコーヒー色で輝いている彼の顔を見ながら訊いた。

「はい、毎日ハッピーな思いで暮らしています。言葉はまだ十分にわかりませんが、ここでの生活には慣れてきました」

「君は英語とドイツ語を話すし、語学力があるようだから、ここで暮らしていくうちに日本語も身につけてくるよ」

そう言うてから、このことを話そうかどうか迷ったが、思い切った。

「君は、週日は工場で働き、日曜日はクリーニング店でアルバイトをして、休みも取らずに仕事をしているよね。そして、毎月パキスタンにかなりの額を送金しているようだね。」

それは、君たち二人の今後の生活設計を考えた上でのことなの？」

さらに続けた。

「昨夜、君は独自のタイヤ店を開きたいと話したね」

「はい、そうです」

「そのためには、お金を貯めないといけないよね」

彼は黙っていた。言い過ぎたかなとも思った。私にお金を返そうとした彼だ。でも、一年前、あゆみから届いた手紙の中で、シャキールの給料のかんりの額を毎月パキスタンに送金して、そのことに両親と姉が憂いを持っていると記されていたのを読み、少し気にはなっていたからだった。

彼の目を正視した。

「君もわたし国際結婚で、相手の国で暮らしているよね。見知らぬ文化と伝統と宗教のなかで生きている私たちは、ふと自分がどこに立っているかを考えるときがあるよね。そうすると、わたしの場合、返ってくる答えは、『今、一緒に暮らしている家族のところに分は立っているのだ』と思うようになってきたね」

今という語に力を込めて話した。今が未来を創っていくと思っていたからだ。シャキールにとっては、パキスタンの母や兄弟のことが常に頭の中にあるのだろう。でも、先日の美帆からの手紙の中で、彼の兄弟たちは、今は皆働いていると書かれてあった。

シャキールは黙り続けていた。結婚してまだ二年しか経ってない彼だ。まして、故国での慣習を背負っているシャキールでもあった。当然だろう。ここで、彼の心の中に土足で踏み込むようなことはしてはいけない、また彼と同じ目の高さで会話を交わしていかねばならないと思った時、私も黙らざるを得なかった。しかし、これだけは伝えようとした。

「山登りが好きなことを知っているよね」

「はい、ミホから聞いています」

「ハウスマンをしながらの暮らしから、また異国の地で住むなかで考え続けたことがあるのだよ」

そう言うってから、続けた。

「ある山の頂上を目指して、文化・宗教の異なる背景のなかで生きてきた十人が、それぞれ違う登山口から登り出した。そして、頂上付近になってそれぞれが自分の歩いてきた道を振り返ると、いままでの異なっていた道が一本になっているのを見出すね。その道のかなにこそ、君たちのような関係があると確信するのだ」

そこまで言い終えると、シャキールが少し間をおいてから口を開いた。

「ボクはミホとお金のことでもしつかりと二人で話し合います」

そう言うってから、彼は今の生活について熱い目と口でいろいろと語り出した。それに、耳を傾け続けた。

腕時計をのぞくと、八時が過ぎていた。私たちはベンチから立ち上がった。彼は自転車を押しながら、私と一緒に歩きはじめた。その自転車で今度は私がまたがり、ペダルを漕いだ。シャキールは、私に遅れまいとして走り続けていた。

アパート前に着いて戸を開けると、コーヒーの香りがした。その足で、風呂場に行って顔を洗っていると、美帆が来て、タオルを私に手渡しながら訊いた。

「どこにいらしたのですか」

「公園で蝉の声を聞きながら、目を閉じていたら眠ってしまったよ。気がつくと、シャキールが目の前に立っていたので、彼としばらく話をしていたよ」

「そうだったのですか」

朝食になった。彼女は私のカップに左手でコーヒーを入れた。右手で何かを持つことはまだ難しいようだ。

食パンにジャムを塗っている私を見ながら、彼女が言った。

「テュービンゲンで、毎朝、食べていたパンの味が懐かしいです。あのようなパンはここでは手に入らないのです。都心に出れば買えるのかも知れませんが」

「日本の食パンもいいね。トーストで焼け、あたたかいパンを口に入れられるし」

「そうですね」

彼女はそう言うてから訊いた。

「今日の午後に、帰るとおっしゃっていましたね」

「東京で友人と三時に会うことになっていますよ」

「そうですね。では、午後二時までには、私たちと一緒にいられるのですね」

美帆はニツコリしてから、今度はシャキールに顔を向けた。

「あなたは？」

「クリーニング店のバイトは、今日は休んだし、三人で公園のボートに乗りに行こうか」

そう言うてから、彼は美帆の目を見ながら続けた。

「いや、今日は君と『共に』教会へ行くよ」

「ほんと！」

彼女は手を合わせたあと、再び私のほうを見た。

「よかつたら、教会の礼拝に行ってみませんか。日曜日は、シャキールはいつも働いているので、彼と一緒に教会へ出かけることはありませんし、今まで彼と一緒に教会に行ったことはないのです。でも、今日は違います」

「行きましょう」

即返事をした。

朝食を済ませたあと、私たちは外に出た。教会は、歩いて十五分のところにあつた。入口のところ、美帆は周りの人たちと挨拶を交わしてから、私たち二人の座る席をつくってくれた。彼女は、何かの係があるらしく、「あとで来ます」と言うてから立ち去つた。

礼拝がオルガンの音ではじまると、私たちが座っている長椅子に彼女も腰かけた。讃美歌を唄う彼女の声は一際澄んでいた。

一時間半の礼拝が終つて教会を出ると、日曜日の正午なこともあつてか、通りには車の影がない。私たち三人は肩を並べて歩き出した。

「教会に参加されていかがでしたか」

美帆が私に訊いた。

「皆さん、声高らかに賛美の歌をうたい、力強いものを感じたね。説教の内容もよかつた」

「そうですね。生きていくうえで、大切なことは何かとの話でしたね」

それを聴いていたシャキールが、急に立ち止まつて、私たちのほうに顔を向けながら、

「なに、なに？」

と、訊いた。二年しか日本に住んでいないので、教会の日本語での説教はまだ彼にはよく理解できないでいた。そこで、彼にドイツ語で先ほど牧師が話したリーベ（愛）についてだつたことを語つた。それを聴いたシャキールが、大げさなジェスチャーで美帆の肩に手を回した。

陽が段々と高くなつて、暑くなりはじめた。ふと、立ち止まると、目の前に立つ大きな桜の樹に数匹の蝉が止まつて、体を振るわせながら、自分の存在を誇るかのように鳴いているのが見えた。その声は共鳴して、遠くまで響き渡つていた。